



王の女と呼ばれて
～異説 春香伝～

東 めぐみ

序章～事実は小説よりも奇なり～

序章～事実は小説よりも奇なり～

今は昔、王国の末期に、それはそれは美しい中殿さま(チュンジヨンマーマ)がおられたそう。中殿さまは今を時めく左議政(チャイジョン)の息女で、王妃となることは王さまの母君の大妃さま(テービマーマ)もお認めになっていたという。

ここまで話を聞けば、誰もが中殿さまが何の苦もなく王妃の地位に昇られたと思うだろうが、そうはゆかなかった。

中殿さまは女官から身分の低い側室となり、更に側室として上の方の位階を賜った後、漸く正妃となられた。

なにに、どうして、左議政の令嬢、しかも予め王妃になることが定められていた令嬢がすんなりと中殿さまになれなかったのか？

やはり、それには相応の理由があった。

よく事実は小説より奇なりというが、まさに、そういう出来事が左議政の令嬢には起こったとしか言えまい。

その頃、例の有名な`春香伝、の続編ともいえる`続春香伝、が都で大流行したが、これから儂が話すのはその`続春香伝、よりも更に面白き話よ。

この話を聞けば、つくづく人の縁も人生も数奇なもので、我々人間は天のご意思には逆らえぬということも判る。

左議政のご息女はやはり、どのような試練を経ても王妃になるべくして生まれ、その宿命を背負っていたとしか言えぬ。

はてさて、王さまのご寵愛を一身に集めたというその中殿さまは、どのようにして王妃におなりになったのか。

知りたければ、まずは儂の話を聞いて下され。

`本の虫、と呼ばれる少女

華仙(ファソン)は先刻から食い入るように自分の手許を見つめていた。まるで壊れ物にでも触れるかのような慎重な手つきでそれにそっと触る。ひとしきり恍惚(うつと)りと眺め入り、切なげな溜息をそっと零す。

その様はまるで妙齡の娘が恋しい男からの待ち焦がれた文を漸く受け取ったかのようなでもある。そう、確かに華仙は美しかった。今年、やっと十六歳になったばかりの初々しい美貌はさながら咲き初(そめた水仙の花にでも例えられるだろう。

都漢陽(ハニャン)に降り積もる雪のように白く透き通った膚、紅など引かなくても椿のように紅い唇は可憐で、何より人眼を惹くのは大きな生き生きと輝く瞳であった。それは当時、屋敷

の奥深くで大切に育てられ、親の言うなりの従順な両班(ヤンバン)の令嬢には珍しいもの一覇気と呼べる類のものだ。

だが、当の本人はその美貌の自覚はいささかもなく、今は後生大切に両腕に抱えている一冊の本にのみ意識は向けられている。

「ああ、本当に `忠孝明道、なのね」

ファソンは感じ入ったように呟き、腕に抱えた本をギュッと抱きしめた。

「やっと手に入ったわ」

愛おしげに分厚い書物に頼ずりしたまさにそのときだった。ドスンと背後から強い衝撃が押し寄せ、ファソンの華奢な身体は前方へとつんのめった。

「痛ー」

ファソンは勢いで飛ばされ、膝を突く形で床にへたり込んでしまった。ここは都は外れの下町の一角、町の人々からは `曹さんの本屋、と呼ばれている古本屋だ。ファソンはこの本屋の常連の一人でもある。

`曹さんの本屋、の主人曹ガントクは常民(サンミン)ではあるけれど、あらゆる分野に対しての知識が広く深く、なまじ身分だけは高く偉そうにふんぞりかえっている中身のない官僚などよりは、よほど教養も学才もある人なのだ。

年の頃は四十ほどで、ファソンの父とたいして変わらない。

この古本屋は品揃えも充実していて、なかなか巷では手に入らない稀少本を手に入れることができる。何よりファソンは主人のガントクの気さくでいながらも知識人であるところが好きで、足繁く通っていた。

顧客が多い割に、いつ来ても客の姿は殆ど見かけることもなく、ひっそりとしている。間違っても他の客と衝突するなんてことはないはずなのだがー。ファソンは痛む膝をさすりながら身を起こし、背後を振り返った。

「ごめんなさい、欲しかった本がやっと手に入ったものだから、つい我を忘れていたみたいで」

言いかけ、彼女はたった今、ぶつかったばかりの相手をまじまじと見つめた。相手はあろうことか、二十歳ほどの若者であった。絹製の薄紫の上等なパジ、更には罈広の帽子から垂れ下がった紫水晶(アメジスト)の玉を見れば、彼が相当に身分のある両班の子弟であることは一目瞭然だ。

とはいえ、ファソンが愕いたのは彼が常民ではなかったからではない。ファソンの周囲にもそのような若い青年は当たり前にいるから、別段愕くようなことではない。

彼女の視線は青年がひしと握りしめている一冊の本に釘付けになっていた。

「一春香伝」

何と彼は女子どもの間で今、大流行しているという恋愛小説本を大切に抱えているのだ。普通、貴族の若い男が好んで読むものではない—というより、表向きに読むのは体裁が悪いとされているような通俗小説とされている。

ファソンの視線にギクリとしたように青年は眼を見開き、慌てて言った。

「こ、これはだな」

ファソンは黙って彼を見つめ続ける。

若い男はファソンに見つめられ、白い頬を上気させた。彼の男ぶりもなかなかのものだ。逞しさなどは欠片ほどもない優男ではあるが、美男には違いない。

「妹に頼まれて買いにきた」

男の右眉がひくついている。ファソンは、にっこりとしながらも、しれっと言ってやった。

「嘘でしょ」

「うっ」

生来嘘がつけない質なのだろう、彼は言葉に詰まり、呆気ないくらい早く認めた。

「何故、判る」

「右の眉がピクピクしてるもの」

ファソンは彼にグッと顔を近づけ、自分も右眉をひくつかせて見せた。

「馬鹿な」

彼は心外だというような顔をする。ファソンは肩を竦めた。

「別にあなたが `春香伝、を読もうが読むまいが、私には関係ないから。気にしないで」

ファソンは彼に取り合う気はさらさらなかった。そのまま行き過ぎようとするのに、呼び止められる。

「待て」

「なに？」

青年の物言いたげな瞳に、ファソンは小首を傾げた。

「そなたの手にしている書物は—」

「ああ、これ」

ファソンは軽く頷き、さらりと言った。

「 `忠孝明道、よ。あなたも両班の子息なら、きっと書名は知っていると思うけれど」

彼はまた顔を紅くした。

「題名は知っている。だが、まだ全部は読んだことはない」

「この書物はまだ清国から伝わって間がないもの。この朝鮮であるとしたら、王さまのいらっしゃる宮殿の書庫くらいにしかないと言われているほどの価値ある本なのよ。もちろん、国王殿下（チュサンチョナー）はとっくにご覧になってらっしゃると思うけどね」

「うっ」

何故か青年は踏みつづされる寸前の蛙のような声を出した。

「そなたは、な、何故、国王がそれを既に読んだと思うんだ？」

「当たり前でしょ」

と、ファソンは断じた。

「国王さまはこの国を統べる尊い方でおわすのよ。まだお若いけれど、きっと向学心も旺盛だし、政にも熱心でいらっしゃるに違いないものね」

当代の国王賢宗は二十一歳だと聞いている。十年前に父王の早すぎる死の後、十一歳で即位。最初は生母である朴大妃とその父、つまり幼い王には外祖父に当たる領議政（ヨンイジョン）がその後見として政に当たっていたが、六年前、王が成人したのを機に国王親政が始まった。

二年前、外戚として権勢を振るった領議政が亡くなっても、いまだに王の母朴大妃の朝廷における影響力・発言権は絶大だという。

「確かに王宮の書庫に『忠孝明道』はあるが」

彼は形容しがたい複雑な表情で呟き、ファソンを見た。

「そなたは父か兄に頼まれて、その本を探しにきたのか？」

「あら、違うわ」

否定すれば、青年がちょっと慚然として言う。

「許婚とか、恋人とかに頼まれて？」

「そんな男はいないわよ」

ファソンはクスクスと笑う。青年が勢い込んで続けた。

「そう申せば、そなたは先ほど、国王の話をしたな。王といえば、今は国婚の準備が始まり、國中の適齢期の両班の令嬢には禁婚令が出ているはずだ。そなた、見れば、それなりの家の娘のようだが、そなたは王の妃候補として名乗り出ていないのか？」

ファソンは黒い大きな瞳をくるっと動かした。

「まさか、私がお妃ですって？ あなた、知ってるの？」

ファソンは声を低めた。

「お妃に名乗りを上げて選抜試験を受け、紛れでも最後まで残ったら、どうなると思う？」

「何か大変なことになるのか？」

彼がいささか不安そうに言うのに、ファソンは真顔で頷いた。

「最悪は中殿さまになるか、外れても側室として後宮入りは必至よ。冗談じゃない。一生、豪華でも狭い鳥籠に閉じ込められて終わるなんて、私は願い下げだわ」

「中殿になるのは最悪なのかー」

青年の整った顔が何故か引きつっている。

「中殿といえば、両班の娘であれば誰もが夢見ているこの国最高の地位であろうに。そなたは何ゆえ、それを望まぬ？」

「だから言ったでしょ。一生、狭い後宮に閉じ込められるのはご免だって」

ファソンは言うど、またクスクスと笑った。

「それに、幾ら国王殿下が物好きでも、私を見れば絶対に嫌だとお思いになるわ」

「それは何故？」

「私は、本の虫、だから」

「本の虫？」

彼が素っ頓狂な声を出す。

「あなたは信じてないようだけど、この、忠孝明道、は私が読むのよ」

「そう、なのか？」

「ええ」

ファソンは迷いなく応えた。

「本当はね、私の父に頼めば、この本を手に入れることはできると思うの。でも、父は私がこんな難しい本を読むことを歡ばないのよ。女はせいぜい、内訓、を読めばそれで良いと信じているようなカチコチの石頭の時代遅れなのよ」

「カチコチの石頭の時代遅れー」

青年はまた呆気に取られている。

「私は」

ファソンは言いかけ、伸び上がるようにして青年を見上げた。ひよろ長い彼と小柄なファソンでは向かい合うと勢い、そんな体勢になる。青年はファソンに真正面から見つめられ、また頬を上気させた。眩しい陽光でも見るかのように、しきりにまたたきしている。

「やっぱり良い」

ファソンが首を振ると、彼はすかさず言った。

「話してくれ。そなたの話をもっと聞いていたい」

「でも、あなたも所詮は両班の男よ。私の話を理解はしてくれないでしょうし」

「とにかく話してみてくれ。絶対に笑ったり否定したりしないと約束する」

ファソンは彼の眼を見た。真剣そのもののまなざしに嘘はない。彼がファソンの話に納得するかどうかはともかく、少なくとも耳を傾けてくれるのは確かなようである。

「あなたを信じるわ」

ファソンは話し始めた。

「私は色々なことを知りたい。内訓、なんて所詮は女の通り一遍の心得を説いただけよ。そんなものじゃなくて、もっともっと広い世界のことを、この国をより良くするには、どうしたら良

いのか。そういうことを考えてみたいの」

「なるほど」

青年は約束どおり、ファソンの打ち明け話を真摯に聞いてくれた。

「それで、`忠孝明道、を讀みたいと思ったのだな」

「そう。清国は大国だけあって、私たちが見習うべきことはたくさんあると思う。だから、何とかして彼(か)の国から来た書物は讀みたいと思ったのよ」

`忠孝明道、は前半はその書名のごとく人としての徳目を説いたものだが、後半は国のあり方について記されている。全体を貫くのは、政は民のためにあるべきものであり、国の根本であり財産は民草であるという考えだ。

儒教思想とは少し考え方を異にしたものではあるが、政について判りやすく説かれた優れた書物として評価されている。若者にも言ったとおり、最初は父に讀みたいと頼んでみたものの、案の定、

—おなごには不要。

と、一蹴されてしまった。

「あなたももう、少しは讀んだの？」

問えば、青年はまた顔を引きつらせた。

「いや、その」

そこで、ファソンは笑った。

「まだ讀んでいないのね」

「恥ずかしい話だが」

自分を取り繕おうとせず、正直に話すところが好ましい。彼の率直さをファソンは嫌いではなかった。

「まあ、あなたときたら、`春香伝、が愛読書みたいだし」

笑いを含んだ声音で言うと、彼が恥ずかしげに頬を染めた。

「私もそなたと同じだ。屋敷にいれば、俗な小説などろくに読めぬ。どこに監視の眼が光っているか判らぬでな」

実は、と、彼が袖から取り出した帳面の表紙には`続春香伝、と流麗な手蹟で書かれている。

`春香伝、は作者不明の小説である。元々はパンソリの詠唱曲であったものが人気を博し、小説化された。両班が書いたとも伝えられているが、同じ`春香伝、でも微妙に筋が違っているものがそれぞれ流布しており、正確なところは判らない。

妓生と両班の間に生まれた美しい娘春香は妓房で生まれ育つが、ある日、その地方を治める代官（使道）の息子夢龍（モンリョン）と恋に落ちる。父の任期が終わり、モンリョンは都に帰るが、それに際し、必ず迎えにくると約束する。

何年後、モンリョンは見事に科挙に合格、暗行御使(アメンオサ)となり再下向する。暗行御使とは国王の命令を受け、地方官が善政を行っているかどうかを極秘調査する任務を帯びる。いわゆる隠密である。

後任の悪徳代官（使道）に横恋慕され無理に妾にされようとした春香はモンリョンのために操を守った。そのために、拷問の末、投獄される。悪徳代官の不正を暴いたモンリョンが春香を助け、最後に二人はめでたく結ばれるという話だ。

「`春香伝、の続きを今、書いている」

「ええっ。まさか、あなたが`春香伝、の作者ということ？ あなたが小説を書いているの—」
流石に愕いた。思わず叫んだその口を若者の手が覆った。

「シッ。声が高い」

彼が低声になった。

「そんなはずがないであろう。`春香伝、は私が書いたものではないが、自分で読んでみて、是非、続きが描いてみたいと思ったのだ」

線の細い優男に見えても、やはりその手は大きく、男のものだ。父以外のしかも若い男性に触られたのは生まれて初めてのことで、ファソンは身を強ばらせた。

少しく後、若者は我に返ったようで、まるで焰の塊にでも触れたかのように素早く手を放した。

「す、済まぬ。さりながら、読むだけならともかく、書いていると知られるのは幾ら何でも、まずいのだ」

「え、ええ。そうね」

ファソンはまだ早鐘を打つ胸の鼓動をなだめるの必死で、まるで上の空で応える。

会話が途絶えたところで、遠慮がちに割って入った者がいた。

「話がお弾みのところ、申し訳ないんですがね。朴氏の若さま（トルニム）」

身の丈がさして高くない中年の男、彼がこの古本屋を営む曹ガントクである。

「若さまがお書きになっている例の小説、少し拝見してもよろしいですかね？」

「ああ、良かったら、見てくれ」

ガントクはしばらく真剣な面持ちで若者から渡された小説を読んでいた。ややあってから、自慢の口ひげを撫でて若者に言う。

「なかなかですな。これは売れるかもしれませんよ」

「そうなのか？」

「ええ。春香伝の人気は今、うなぎ登りですからね。大きな声じゃ申し上げられませんが、若さまのように両班家の方々の中にも、ご夫人やご令嬢だけでなく、れきとした殿方が熱心に読みふけておられる方は少なくないのです。その今や大人気の`春香伝、に続きが出たとなれば、こりゃ売れるのは間違いないと、儂は踏んでますがね」

ガントクはいっそう声を潜めた。

「どうですか、この作品をお書き上げになったら、儂に預けて下さいませんか？」

「私の書いた『続春香伝』をこの書店で売ってくれるというのか！」

「さようです」

ガントクの頼もしい返事に、若者の白い面に血が上る。

「それは願ってもない話だ。何とぞ、よしなに頼む」

「合点でさ」

本屋の主は胸を叩いて請け合った。売れるか売れないか一、この道二十年の目ききのガントクが言うからには目算はかなりの確率であるのだろう。

ファソンと若者はそれぞれ本の代金を払い、本屋を後にした。いちおう古本屋、貸本屋ということになってはいるが、もちろん新しい本も売っている。

「毎度ありがとうございます」

ガントクの愛想の良い声に見送られた後、二人は何となくそのまま並んで通りを歩いた。ガントクはファソンの父がそも誰であるかを知っている。同様に『朴氏の若さま』と呼んでいた彼の素性をも知っているのかもしれない。

が、ファソンはこの青年にそれを訊ねようとはしなかった。大体、彼の物腰や身なりを見れば、彼が高位の両班であることは丸分かりだし、ファソンはファソンで身許をあまり知られたくはない。特に父には内緒で巷の古書店に通っているなんて知られたら、それこそ屋敷に閉じ込められて二度とお忍びでの外出はできなくなる。

そんな危険を冒す愚はしたくない。

この本屋の良いところは大通りから外れた小路に面しているのもある。つまり、出入りしているのもそれだけ人に見られる可能性も低いということだ。二人は直に小路から大通りに出た。流石に人通りが多く、たくさんの人が忙しない足取りで往来を行き交っている。

往来の両脇にはあまたの露店が軒を連ね、通りすがりの人々が熱心に店の品物を検分している。それに混じって客を呼び込む商人の声が声高に聞こえる。いつもながらの活気に溢れた下町の光景がひろがっていた。

青年がやや名残惜しさを感じさせるように言った。

「そなたの屋敷はどこだ？ 送っていこう」

「ありがとう。でも、私なら大丈夫だから」

ファソンが言い終わらない中に、彼らの間前に突如としてヌッと現れた人影があった。

「陳ファソン、こんな場所で逢えるとは、つくづく奇遇だな。やはり、俺たちは縁があるのか」

近づいてきた男を見て、ファソンは両班家の息女にはおよそ似つかわしくない悪態を心でついた。

「あら、金氏の若さま。今日もまた相変わらず嫌みがお上手ね」

つつかつとやって来た若い男は険のある眼でファソンとその傍らに立つ青年を交互に見た。

「俺の許婚者と他の男が昼間からよろしくやっているとは、これはどういうことかな、ファソン？」

この男、金サムジョンという。右議政の嫡男で、父親が政府の高官なのを鼻にかけて傍若無人なふるまいが眼に余る。妓房で女遊びに狂うは酒色に溺れるはで、その放蕩ぶりはつとに知られている。

こんな男ではあるが、ファソンにとっては幼い頃からの知り合いなのだ。子どもの時分から、このいけ好かない性格は変わらない。

男ぶりはそこそこのだけれど、何しろ性格がそれを上回って有り余るほど悪いのが難点である。

「お生憎さま、私はあなたと婚約した憶えなんて、金輪際ありませんけど」

確かにサムジョンが父を通して結婚を申し込んできたのは知っている。けれど、その縁談はその時、父がきっぱりと断ったはずだ。

なのに、この道楽息子ときたら、
一陳氏の娘と婚約した。

などと真っ赤な嘘偽りを触れ回っているらしい。父も嫁入り前の娘のこととて外聞をははばかりゆえ、事実無根の話を触れ回るのは止めて欲しいと、右議政に苦情を申し入れたが、どうやら、息子に甘すぎる右議政は止めさせた風はない。

現在、領議政の地位は例外的に空席になっている。ファソンの父陳明瑞(ミヨンソ)は左議政の要職にあり、右議政とは若い頃からの盟友でもあり飲み友達でもあった。政治的なライバル以前に、二人の絆は強い。父もサムジョンにはあまり強く出られない立場ということもある。

ああ、と、サムジョンがもっともらしく頷いた。

「そういえば、そなたの父御がこここのところ、そなたを後宮に上げる気になったとか。確かに、願い出れば妃候補の一次選考試験にはまだ間に合うかもしれんが、お若い国王殿下がそなたのような跳ねっ返り、おまけに「本の虫、に興味を示されるとは思えんがな」

「私は後宮に上がるつもりもありませんから。誰にも嫁がず、本に埋もれて暮らすわ！」

ファソンがつんと顎を反らすと、サムジョンが鼻で嗤った。

「そういうわけにもゆかんのは、お前も判っているだろうが。嫁き遅れと人の噂が立つ前に、この俺が妻に貰い受けてやろうというのだ。ありがたく受けろ」

「冗談でしょ。後宮に閉じ込められるのもご免だけど、あなたと同じ屋敷に住むのはもっとご免だわ」

「何だと」

流石に気色ばんだサムジョンの前に、それまでずっと二人のやり取りを聞いていた例の朴氏の息子が立った。彼は背後のファソンを庇うように立ち、サムジョンをおもむろに見つめた。

「何なんだ、貴様」

「私は朴家の縁戚の者だ」

サムジョンが唾棄するように言い放った。

「朴なんて姓はこの都中だけでも掃いて棄てるほどある。どこの朴か、俺は知らんぞ」

「どこの朴氏ゆかりの者かを私自身もそなたに告げるつもりはない。さりながら、名乗らぬ卑怯者にはなりたくないゆえ、先に名乗ろう。私の名前は李幹（イ・カン）だ」

サムジョンがゲラゲラと笑い出した。癪に触る笑い声だ。

「なるほど、ありふれた名前だ。俺は金サムジョン、父は右議政をしている」

「国の重責を担うだけあって、流石に右相大監（ウサンテーガン）は道理を心得られた方だが、その息がこの程度とは大監もお気の毒なことだ」

イ・カンと名乗った青年は静かな声音で断じた。

「き、貴様ッ。この俺にそんな口を叩いて無事で済むと思うのかっ」

激昂するサムジョンを見、ファソンはカンの袖を引いた。

「カン。もう、止めて。あなたのお父さまもそれなりの地位をお持ちでしょうけど、ああ見えても、サムジョンの父親は右議政なのよ」

国政を司る議政府の三丞承(チヨンスン)の第三位、それが右議政である。カンが幾ら名家の子息でも、その三丞承に立ち向かえるほどの立場にあるはずもなく、下手をすれば右議政に睨まれて失脚する危険もある。

「君は心配するな、ここは僕に任せて」

カンは安心させるようにファソンに微笑みかけた。どこか頼りなげな坊ちゃん然とした雰囲気から、一転して頼もしげな毅然とした表情に変わる。何故か胸の鼓動がまた速くなり、ファソンは身体が熱くなった。

今日の自分はどうもおかしい。今まで、こんなに身体が熱くなるのは珍しい書物を手に入れたときだけだったのに。

「そなたは先ほど、国王の女の趣味がどうこうとか申していたが」

カンは淡々と言った。サムジョンが下卑た笑いを浮かべ、したり顔で言った。

「殿下も所詮は若い男だ。こんな小難しい本にしか興味のない色気なしの乳臭い小娘など、好まれるはずがない」

「さて、それはどうだろう。王に逢ったこともないそなたが何故、国王の女の趣味が判るのだ？」

私は殿下のお側近くお仕えしておるゆえ、殿下の女性の好みはよく知っているが、殿下は触れなば落ちんの色香ある女よりは、清楚な娘をお好みになると聞いているぞ」

事もなげに言ったカンに、サムジョンはせせら笑った。

「フン、どうせ負け惜しみで、口から出任せを申しておるのだろう。貴様のような者が畏れ多くも殿下のお側近くに仕えるなど信じられぬ」

カンがその端正な顔に不敵な笑みを刷いた。

「そうか。そう思うのなら、そう思えば良い。金サムジョン、そなたの名はしかと憶えておく。せいぜい親父どのの名前に泥を塗らぬように注意するんだな」

ファソンは生きた心地もせずに二人を見守っている。サムジョンは武官だ。サムジョン、カン共に上背はあるが、筋骨逞しいという点では、はるかにサムジョンが優位に見える。

「くそっ」

我慢鳴らず、カンに殴りかかろうとしたサムジョンの巨体がつんのめった。

「うおっ」

獣の断末魔のような声を上げ、サムジョンはあっさりと道端に転がった。カンが片脚を出して、掴みかかってくるサムジョンに足払いをかけたのだ。

「くそっ、貴様」

サムジョンが起き上がる直前、カンがファソンの手を握った。

「これは流石にまずいな。逃げよう」

二人は脱兎のごとく駆け出した。

「待てっ、貴様ら」

もちろん、待つてやるはずもなく、二人は駆けに駆けた。

とりあえずは大丈夫そうなところまで来て、カンは漸く脚を止めた。

「ここまで来れば、あやつも追いかけてこないだろう」

二人共に相当、息が上がっている。

「カン、無謀なことをしないで。サムジョンは頭の方はからきしだけど、見てのとおり、武芸はかなりのものなのよ。何しろ、武官なんだから。あなたがまともに立ち向かって勝てる相手じゃないわ」

「失礼な女だな。それでは私がいかに弱々しい男みたいではないか」

「みたい、じゃなくて。弱いでしょ。力仕事なんて、まともにしたこともない細い腕をしている癖に、あの筋肉の塊のようなサムジョンとどうやって喧嘩するのよ？」

「うっ」

カンは顔を紅くし、言葉を詰まらせた。

「それに、あんなハツタリを口にしては駄目よ」

「ハツタリ？」

訝しげなカンに、ファソンは笑った。

「そう、あなたが畏れ多くも国王殿下の側近だなんて。サムジョンじゃなくても誰も信じないわ」

「ええと、そなたは」

言いかけた彼に、ファソンは笑顔で告げた。

「ファソンよ」

「そうだ、ファソン。何ゆえ、そのように言い切れるのだ！ 私が殿下の学友だというのは嘘ではない」

「あなたが殿下のご学友ですって？」

ファソンは堪え切れず笑い始め、その笑いはしばらく止むことはなかった。

「つくづく失礼なヤツだ。私は相当傷ついたぞ」

ファソンはやっと笑いを納めた。あまりに笑い転げたため、涙眼になっている。

「ごめんなさい。でも、やっぱり信じられない」

また笑いそうになるのを堪え、ファソンは言った。

「サムジョンって、昔から性格が変わらないのよね。もっとも、傲慢で女好きで最低な男だけど、根はそこまで悪くないの」

ファソンとサムジョンの腐れ縁は物心つく前からのことだ。そこで、彼女は幼い頃の意外な思い出を語った。

サムジョンには乳母がいて、乳母にはギルボクという息子がいた。サムジョンの母親は二つ違いで生まれた弟の方を溺愛していたため、彼は乳母を本当の母のように慕っていた。サムジョンは半年違いで生まれたギルボクを実の弟よりも可愛がっていたものだ。

ある日、サムジョンが自邸で同じような両班家の子ども数人と遊んでいたところ、ギルボクが通り掛かった。悪童の中の一人がギルボクを心ない言葉でからかうと、サムジョンは烈火のように怒り友達を殴った。

事後、サムジョンは母親からは鞭で打たれ、父親からも延々と説教された。その時、彼は父に向かって広言した。

「ギルボクは確かに身分は低い。ですが、私にとっては大切な乳兄弟です。その大切な身内に等しい者を蔑まれて見過ごしにはできません。」

最後まで謝らなかった息子に、両親は呆れ果てたという。けれど、その話を父から聞かされたファソンはサムジョンを子ども心に見直したものだ。

ギルボクは乳兄弟とはいえ、使用人であった。その使用人を身を挺して庇ったサムジョンは立派だと思った。

「なるほど。確かに、その行いは見上げたものだな。身分が低いからと、人を訳もなく辱めて良いわけがない。ファソン、この国は王族や両班といった特権階級だけで成り立っているわけではないからね。国の根本は民だ。民の存在なくして国は成り立たない。名も無きたくさんの民こそが、朝鮮の宝なんだよ」

「凄いわ、カン。あなたの言うとおりのよ。カンがもし本当に国王殿下のご学友だったら良かったのにね」

ファソンは笑った。

「それでも、あなたもいずれ官僚となって、この国の未来を担うのは間違いないでしょうし、今の気持ちを忘れないでね」

「さりながら、私は通俗小説を隠れて書いているような男だ」

どこか自嘲するような物言いに、ファソンは真顔で首を振る。

「カン、両班だから、小説を書いてはいけないなんて、それも世の中がおかしいのよ。女が政を語ってはならない、男が恋愛小説を書いてならない。誰が決めたのかしら。あなたはそんな小さなことを気にせず、あなたの生きたいように生きれば良いと思うわ。『春香伝』の続きを書きたければ書けば良い」

「ファソンー」

カンが愕きに眼を見開く。ファソンは少し照れたように言った。

「熱く語り過ぎたみたい。私も女だからと父からいつも言われているから一。難しい書物ばかり読んでないで、刺繍や伽耶琴(カヤグム)の練習をもっとやりなさいとかね。だから、小説を書きたくても思うように書けないあなたの立場が少しだけ理解できるような気がしたのかもしれないわ」

ファソンの口調が少し淋しげなものになった。

「サムジョンの言うことは満更、嘘じゃないの。私は両親や親戚から『本の虫』って呼ばれてる。こんな私を妻にと望んでくれる男はいないでしょう。もっとも、私自身は一生、嫁がずに本を読んでいる方が良いのだけれど」

カンが言うとはなしに言った。

「サムジョンはそなたの父御が王妃の選考試験にそなたを応募させるつもりでいると申ししたが」

「そんなのはただの噂よ。大体、私にそのつもりはまったくないんだから。幾ら父でも、私にその気持ちがないのに、そんな横暴なことはしないわ」

「そう一だな」

カンがどこか落胆したように言い、ふと視線を動かした。

「ちょっと待ってて」

大通りを隔てた斜向かいの露店に近づいてゆく。どうやら小間物を扱っているらしいその店の主人としばらくやり取りした後、彼はほどなく器用に人混みを縫って戻ってきた。

「これを君に」

カンの男にしては細くて綺麗な長い指が束の間、ファソンの黒髪に触れた。今日のファソンの装いは全体を明るい色合いで纏めている。やや濃いめの桃色のチョゴリ、ごく淡い色の萌葱のチマだ。チマは下に殆ど白に近い薄緑色の地に木春菊を大胆に手書きしており、その上に薄い緑の紗をふんわりと重ねている。

二枚重ねになったチマがさながら咲き誇る大輪の八重の花びらを思わせる華やかな装いだ。

そろそろ日中は気温が高くなってきたこの季節にはふさわしい、涼しげな色合いがファソンの初々しい美少女ぶりによく似合っている。

まだ未婚なので、長い黒檀の髪は背後で一つに編んで垂らしている。牡丹色の髪飾りが飾られているのも愛らしい。

カンがその艶やかな髪に飾ったのは、堇青石（アイオライト）の簪(ピニヨ)だった。愛らしい蒼色の小鳥を象った玉(ぎよく)がついている。

「`本の虫、なんて気にすることはない。そなたが私に言ってくれた言葉をそのまま返そう。君は自分がしたいようにすれば良いんだ。今に、女性が難しい本を読んでも誰にも何も言わせないような国を私はきっと作る。だから、ファソンはずっと変わらないで、そのままの君でいてくれ」

それに、と、カンは笑った。

「`本の虫、を妻に迎えたいと願う変わり者の男もこの広い世の中にはいるかもしれないよ？何より、ファソンは可愛いし綺麗だ。美しく咲き誇る花に吸い寄せられるように魅了される鳥がおらぬはずがない」

丁度、そなたの髪に飾ったこの小鳥のようにね。

カンはひそやかに笑んだ。

「カン、私、こんなものを頂くわけには」

彼とは町の本屋で知り合っただけで、`イ・カン、という名しか知らない。まだ互いのことをろくに知りもしないのに、簪を贈られて受け取れるはずもない。

「良いんだ。これはファソンが私に勇気をくれたお礼だ」

「私がカンに勇気を上げた？」

彼の言葉をそのままなぞったファソンに、カンが大きく頷いた。

「誰が何を言おうと気にしないで、自分の好きなことをすれば良いと言ってくれた。ファソン、だからといって私はもちろん本来の自分の仕事をおろそかにするつもりはない。けれど、その傍ら、`春香伝、の続きを書いてみよう今日、はっきりと決意したよ。これもファソンのお陰だ」

「カンはもう任官しているのね？」

「ああ、どこの部署にいるかまでは話せないけどね」

ファソンは微笑んだ。

「私はてっきり、カンはまだ任官していないのかと思ったの」

「親のすねかじり息子だと思った？」

問われ、まさかそのとおりでとも言えず、ファソンは紅くなってうつむいた。

「だって、あまり仕事をしているようには見えなかったんだもの」

カンが嘆息した。

「私はつくづく君には頼りない男のように見えているらしい」

ファソンは狼狽えた。

「そういうわけではないのよ。でも、そのう、あなたって武官には到底見えないし。強いていえば文官のタイプだけど」

言葉を濁したファソンに、カンがすかさず言った。

「よくも言ったな、`本の虫、め」

「ふふっ、これでお相子ね」

二人は顔を見合わせて吹き出した。

流石に長い初夏の陽もそろそろ傾きかけている。結局、ファソンは屋敷の近くまでカンに送って貰い、彼とはそこで別れた。

五月の空は淡い夜の気配に覆われ、そこそこに薄墨を溶き流したような宵闇が垂れ込め始めている。昼間は夏を思わせるほど気温が上がるが、流石にこの刻限は吹く風にも幾分冷たさが混じる。

ファソンは屋敷の門に脚を踏み入れる間際、つと背後を振り返った。カンとはここからはかなり離れた場所で別れたのだから、今、眼の届く距離に彼がいるはずもない。それでも、振り返らずにはいられなかったのは何故なのか。

いつになく火照った頬を傍らを過ぎゆく夜風が快く冷やしてくれる。生まれて初めて経験した`熱、の理由をこの時、ファソンはまだ知らなかった。

そして、そんな彼女の運命を激変させる出来事が屋敷内で待ち受けているとも知らずに。

突然の見合いと家出

お忍びで町に出たファソンがこっそりと自室に戻るのはいつものことだ。そこに側仕えの女中チェジンが色を様変えてやって来た。

「お嬢さま(アガツシ)、夕刻までにはお戻りになるとおっしゃっていたのに、今まで、どこでどうなさっていたのですか！ あたしはもう、旦那さまと奥さまからきついお叱りを受けましたよ」

チェジンが恨めしげな表情で訴える。チェジンは亡くなった乳母の娘だ。チェジンの母はファソンが生まれた直後から七歳のときまでまめやかに仕えてくれたが、病で亡くなって久しい。乳母には二人の娘がいて、チェジンはファソンと同年だ。上の娘は既に他の両班家に仕える下僕に嫁している。

「ごめんね。古本屋で友達に逢って長話してたら、遅くなって」

忍びで外出している間は、大抵、チェジンが上手く言い繕ってくれている。今日は頭が痛いから昼寝をしているということになっていたのだけれどー。確かに、昼寝にしては長すぎたかもしれない。

「とにかく、一刻も早く旦那さま（ナーリ）のお部屋にお行きになって下さいまし」

チェジンの声に急かされるように、ファソンは父ミョンソの居室に赴いた。室の前で右手のひらを胸に添え、深呼吸する。

「父上(アボニム)、ファソンです」

「入りなさい」

そこには当然というべきか、父だけでなく母ヨンオクも揃っていた。ファソンは手のひらを胸に添えたまま軽く一礼し、殊勝な顔つきで二人の少し下手に座った。

「その分では、自分がしでかしたことの愚かさは重々承知しているようだな」

父が重々しく言い、父から少し離れて座る母がすかさず口を出した。

「一体、いつになったら幼い童のように屋敷を抜け出し、ほつつき歩く癖が治るのかしらね」

が、父は片手を上げて母を制し、お喋りな母は不満そうに口を閉じた。

「あの、そのことでは私がチェジンに無理に頼み込んだことでもあり、チェジンへのお叱りはこれ以上は止めて頂きたいとー」

言いかけたファソンに、母が声を尖らせた。

「主(あるじ)の行いを側にいて諫められぬのは、側仕えが責めを負うべきことです。ソジがよく長年仕えてくれたゆえ、これまでは大目に見て参ったが、今度、そなたが黙って屋敷を抜け出すのに荷担致せば、チェジンを鞭打つことになりますよ」

「まあ、ヨンオク。今はその話は良いだろう。大体、チェジンはこの娘に無理矢理頼み込まれ、仕方なしに協力させられたのは判っている。鞭打つならば使用人ではなく、この娘の方が先だ」

父は柳眉を逆立てる母を宥め、ファソンには一転して厳しい表情を向けた。

母は三十代後半とは思えないほど、若々しく美しい。こうして華やかに装っていれば、適齢期の娘を持つ母親には見えないだろう。しかも、母はファソンを生むときに相当な難産で、生んだのは娘一人だった。母の関心はいつでも一人娘に注がれている。

親の愛情を知らない子どもには贅沢すぎる話かもしれないが、幾つになっても干渉してくる母の小言は正直、あまりありがたくないものだ。

「まあ、それはそうですけど」

ヨンオクは不承不承言った。父はおもむろに腕組みをした後、唐突に切り出した。

「明日、見合いだ」

「え？」

ファソンは大きな黒い瞳を見開いた。

「相手はさる名家の若君だ。心して支度を整えるように」

父の言葉はどうやら、もう決定事項らしい。

「そんな、お父さま、あまりに急すぎるのでは」

父はゆっくりと首を振る。

「そんなことはない。明日とはいかにも急に聞こえるかもしれぬが、実のところ、かなり前から内々に話を進めていたのだ」

「一」

話の急展開についてゆけず、ファソンは言葉を失った。

「あなたは何も心配することはないのよ、ファソン。お父さまがすべて良きように運んで下さいますからね」

傍らから母が言い添えるのに、父ももう止め立てはしなかった。

ややあって、ファソンは父を見上げた。

「お父さま、仮にも見合いするのは私なのに、お相手の方のお名前さえ教えて頂けないのですか？」

「これは正式な見合いではない。その方と内々に対面するというのも外部に洩れてはならんのだ」

「そこまで外聞をはばかり方というのも」

ファソンがまた黙り込むと、父が宥めるよように言う。

「ヨンオクの言うとおりのだ。そなたは何も案ずるには及ばぬ。縁談というのは時と運が決めるものだし、互いの相性もあろう。万に一つ、相手の方とそなたがあい合わぬとなれば、この縁談をゴリ押しもできぬ。そのために、正式な対面の前に内輪にてお逢いするのだ。ゆえに、そなたも気遣う必要なく、嫌ならば嫌と申して良いのだぞ」

つまりは相手の評判や名に無用の傷を付けないために、正式な見合いとなる前に内々に対面の場を設けて相性を見ようということか。

「それでしたら」

頷きかけた時、母がすかさず言った。

「大監（テーガン）、そのような甘いことを仰せになって良いのですか？ この縁談をお断りするなんて、到底考えられないのではなくて？」

「そういうわけにはゆかぬだろう。結婚というものはある程度、互いに合う合わぬもある。合わぬ者同士を無理に娶せたとして、不幸の因を作るだけではないか」

「とは申しまして」

不服そうな母に、父は不機嫌な声で言った。

「良い加減にきなさい。家門も大切だが、まずいちばんに考えるべきは娘の幸せではないか」

「それはそうですけど」

母の綺麗な面には

一父上はファソンに甘い。

と、はっきり書いてある。そして、ファソンは若く美しい母にそっくりだ。性格はどちらかという父に似ているのに、外見は母の容貌をそのまま受け継いでいる。いつまでも若い母と並ぶと、母娘というよりは姉妹にしか見えないというのも、娘としては考えものではある。

「話は終わった。もう室に戻りなさい」

「はい、お父さま」

ファソンは両親にまた頭を下げて室を出た。

両開きの扉を閉める寸前、憤懣やる方ないといった母の言葉が聞こえた。

「大監はあの娘に甘過ぎます。あんなことを仰せになって、ファソンが嫌だと言い出したら、いかなさるおつもり？ 今度のお相手は我が家からお断りできるようなお方ではないでしょうに」

父が何か言う前に、ファソンは急ぎ室の前を離れた。到底、両親の会話を聞いていられなかった。

母の頭には陳家の隆盛しかないのだ。娘の幸せなど、二の次なのかもしれない。

自分の部屋に戻ると、チェジンが待ち受けていた。

「やはり、きついお叱りを受けられたのですか？」

お茶を淹れてくれながら、そんなことを訊いてくる。ファソンは座椅子(ポリヨ)に座り、だらしなく脇息にもたれた。どうも力尽きた感がある。

「見合いをしろと言われたわ」

「お見合い、ですか」

素っ頓狂な声を出すチェジンを、ファソンは軽く睨んだ。

「申し訳ございません」

チェジンが肩を竦めるのに、ファソンは苦笑する。

「良いわよ、当の私だって、青天の霹靂だったんだから」

ファソンが文机の上に青磁の湯飲みを置く。それを手に取り、彼女はひと口味わうように口に含んだ。

「チェジンの淹れてくれるお茶も当分、飲めそうにないわね」

「え？」

チェジンに訝しげに見つめられ、ファソンは曖昧に笑った。

「何でもないの。チェジン、私だけじゃないわ。あなたもそろそろ嫁いでも良い年頃よ。良い縁談をお母さまがいずれ下さると思うから、必ず良い男を見つけて幸せにならなければ駄目よ」

「お嬢さま。あたしのことは良いです。そりゃ、あたしもいつかは分相応な男の許に嫁いで家庭

を持ちたいって想いはありますけど、まずはお嬢さまがお幸せにならなくては」

「チェジン」

ファソンはチェジンの両手を自分の手のひらで包み込んだ。両班の令嬢のファソンと異なり、日々の仕事でチェジンの手は荒れている。それでもまだお嬢さま付きの上女中であるチェジンは下働きと違い、仕事は楽な方である。

これが下働きともなれば、どのような苛酷な仕事をこなさねばならないのか、お嬢さま育ちのファソンには想像も及ばないことだ。

そんな気随気儘な日々甘んじていて、それでも逃げ出すというのがどれだけ我が儘なことか自覚はあった。けれど、ファソンはどうしても母の言葉が気に掛かっていた。

「この縁談をお断りするなんて、到底考えられないのではなくて？」

「今度のお相手は我が家からお断りできるようなお方ではないでしょうに。」

「何故、母はあのようなことを言ったのか？」

常識的に考えれば、見合いの相手がこちらから断っては無礼に当たる—そういう相手だということだ。それほどの身分ある若君というのは、一体、どこの誰なのだろう。議政府に領議政がおらぬ今、その筆頭に立つのは父陳ガントクに他ならない。飛ぶ鳥を落とす勢いの左議政の娘が断れないほどの相手となれば、同じ両班家ではそうそうはいない。

もしかしたら、王族かもしれない。とにかく、と、ファソンは考える。このまま大人しく見合いなどするつもりはさらさらしない。両親には申し訳ないけれど、ファソンは明日の見合いに出る気は既にこの時、なかったのである。

ファソンが屋敷を抜け出したのは、その翌朝早々であった。これまでも度々、屋敷を抜け出したという前科があるものの、その都度、側仕えのチェジンの協力があつた。が、今回ばかりはチェジンも母によくよく言い含められていたと見え、

「明日は絶対に絶対に駄目ですよ、お嬢さま。」

と、念を押してきた。むろん、チェジンに協力して貰うつもりはなかった。むしろ、この忠実で人の好い乳姉妹を自分の家出にまで巻き込みだけはすまいと思っていた。

屋敷の者たちが一早起きの使用人たちでさえ眠っている時刻、ファソンは身の回りの荷物を風呂敷に少々と路銀になりそうな金子を持ち、屋敷の塀を軽々と乗り越えて逃亡した。

通い慣れた何とやら、である。お忍びで町に出るときは大概が塀を乗り越えているので、特に戸惑うこともない。まさに両班のお嬢さまらしくない鮮やかな身のこなしで塀によじ登り、乗り越えると向こう側に着地を決めた。

「ま、ざっとこんなものね」

ファソンは軽く手をはたき、チマの裾を直した。心と背後を振り返る。

「お父さま、お母さま、親不孝な娘を許してね」

チェジンは今回の家出について何も知らない。恐らく、逃亡がバレたらチェジンが真っ先にファソンのゆくえについて詰問されるだろうが、何も知らないものは応えようがないではないか。忠義を尽くしてくれた乳母の娘であり、チェジン自身も働き者で機転が利くので、母は気に入っている。ましてや、母は口うるさいけれど、使用人たちを訳もなく鞭打つような非情な人ではない。

恐らくチェジンが今度のファソンの家出で罰を受けることはないに違いない。

着替えと金子の入った風呂敷包みを持ち、足取りも軽くファソンは歩き出した。

「何か、これでやっと自由を手に入れた気がするわー」

うーんと両手を天に向かって突き出す。まだ都の空は東の空の端も白んでいないほどの早い朝、下弦の月が蒼白い夜の名残を残した空に浮かんでいるのを眺めつつ、ファソンは呑気に鼻歌を歌いながら歩いていた。

実はこの時、自分がどれだけ無謀で先を考えていなかったか、ファソンはこの少し後、思い知ることになるのだった。

とはいえ、ファソンも家を出るからには、それなりの覚悟をしたつもりではあった。まず、いつもよく行く `曹さんの本屋、の近くに、空き店があるのを見つけていた。そこは以前、老夫婦が暮らし筆屋を営んでいた跡だ。跡継ぎがないまま二人が相次いで亡くなり、住む者もないまま放置されてきた。

ファソンも書店の帰りに立ち寄り、何度か筆を買ったこともある。二人ともに親切で働き者だったし、小体な割には良い品を安く売っていた。とりあえずは、その空き店をお借りしようという算段である。夫婦はこの近くに別に住まいを持っていたらしく、そこからこの店まで通ってきたらしい。

その住まいはどこなのか知らないし、今、どうなっているのか定かではないが、店の方は少なくとも二年ほどは誰も暮らしていないというのは確かだ。

こういうのを `不法侵入、というのだろうが、この際、構うものかと居直っている。その中、適当な空き家でも見つければ、すぐに家移りすれば良い。

さて、生きてゆくには生活の糧を得なければならず、そのためには仕事を探す必要があった。これについても、ファソンには当てがある。

まだ夜明け前に屋敷を抜け出したため、筆屋に着いた途端、ファソンは急激な眠気に襲われた。昨夜は流石に眠るどころではなかったから、屋敷では一睡もしていない。また、ホッとして緊張が緩んだというのもあるだろう。

「とにかく後は眠ってから考えれば良いわ」

彼女は円くなると、掛け布もかけずにそのまますぐに深い眠りにいざなわれていった。

ファソンが次に目覚めたのは既に陽が高くなった刻限であった。幸いにも季節が季節なので、凍えることはない。しかし、五月初旬といえ、朝夕はまだ冷え込むこともあるものだ。クシュンと小さくしゃみをし、ファソンは肩を竦めた。

「いけないいけない、風邪なんか引いたら、余計なお金がかかってしまう」

などと両班家の令嬢には不似合いな科白を呟き、うーんと伸びをした。

「まずは仕事探しに行きましょう」

遊びに行くような気軽さで、近くの`曹さんの本屋、に出かけた。

「おじさん(アデユツシ)、こんにちは」

古書店の主人曹ガントクはいつものように小さな構えの店の奥でメガネ越しに分厚い書物を読んでいた。

「ああ、お嬢さんかい」

ガントクは小さなメガネ越しにファソンを認めると破顔し、立ち上がった。

「昨日の`忠孝明道、は読んでみたかい？」

「残念ながら、まだなの。昨日は家で色々あってね。でも、ちゃんここに持ってきたわ」

と、意気揚々と風呂敷包みを掲げて見せた。読みたくてずっと探していた大切な書だ。これまでコツコツと集めてきた蔵書はどれも漢字が並んだ難しい本ばかりで、ファソンにとっては宝物である。それらの`お宝、は居室の片隅の物入れに山のように積み上げて保存（隠しているともいうが）してある。もちろん、両親には内緒である。

今回の家出に際して持ち出すことは叶わなかったけれど、昨日、やっと手に入れた`忠孝明道、だけはまだ読んでいないこともあり、荷物に入れたのだ。

ガントクは小首を傾げ、訝るような視線でメガネの奥からファソンを見ている。どうも、いつもと雲行きが違うようだ、と、ファソンは遅まきながら悟った。

小さいながら漢陽の片隅で本屋を営み続けて二十年余、様々な人を見てきたガントクは学識も深く、人を見る眼も備わっている。今日のファソンがこれまでと違うと鋭い勘で嗅ぎつけているのかもしれない。

それでも、ここで引き下がるわけにはゆかない。ファソンは両脇に垂らした拳に力をひこめた。

「おじさん(アデユツシ)。私をここで働かせてくれない？」

「ええ！？」

ガントクは愕きを露わにし、数年来の付き合いのファソンを初めて逢う人のようにまじまじと見つめた。

「こう見えても、代書はできるし、数の少ない稀少な本を書き写すこともできるわ。私のような人間が一人いたら、商売もますます繁盛すると思うんだけどなー」

と、熱心に売り込んでみる。

「お嬢さん、うちは代書屋じゃないよ」

「それは知ってる。でも、たまにおじさんが代書も引き受けてるのは知ってるもの」

たまたま本を探しに来た時、ガントクに代書を頼みに訪れていた客と遭遇したことがある。代書とは頼まれて手紙や書類の代筆をすることであり、時には字の読めない人に手紙や書類などを読んであげることもある。

ガントクは何も言わない。ファソンは慌てた。

「なら、代書は良いわ。本を書き写したり、筆耕はどうかしら。今まではわざわざ外部に頼んで書き写させていたりしたんでしょ。私にもそういう仕事をさせて貰えないかしら」

ガントクは小さな溜息をついた。

「お嬢さん。確かに、お嬢さんは女にしておくのは惜しいほどの物識りだ。難しい漢籍でもすらすらと読みこなせる。そんな人がうちの店で筆耕をしてくれたら、儂は随分と助かるがね」

「なら、働かせてくれるのね！」

瞳を輝かせると、ガントクはむっつりと首を振った。

「駄目だ」

「何で？ お金なら、そんなにたくさんは要らないわ」

「そういう問題じゃないんだよ、ファソン」

ガントクは漸く呼び慣れた親しげな呼び方でファソンを呼んだ。

「あんたがどこのお嬢さんか、あんたの親父さんがどれだけお偉いさんなのか。儂は今まで敢えて拘ることはなかった。だが、それは、あんたが客にすぎなかったからだ。仮にも店で働くとなりゃ、あんたの身許がどういうものなのかっていうことをしっかりと考える必要があるのは雇用主の立場としては当然だと、これは判るだろう？」

「それはそうだけど」

「そんな手荷物一つ下げて、恐らくは家出でもしてきたつもりだろうが、止めときなよ。ファソンのような世間知らずのお嬢さんが一人で生きてゆけるほど、漢陽は甘くはないぞ。今の中にさっさと屋敷に戻りなさい。悪いことは言わん」

ファソンはがっくりと肩を落とし、古書店を出た。いつもは優しいガントクにぴやしりとやられ、自分の甘さと世間知らずさを突きつけられたようだ。

「ここで使って貰えると信じていたから、他には何も考えてなかった」

涙が零れそうになるのをまたたきで堪える。と、正面をよく見ていなかったたせいで、小道を向こうからくる人とまともに体当たりした。

「痛っ」

向こうが悲鳴を上げるのに、ファソンも負けずに声を上げていた。

「あら」

何と衝突したのは、またしてもあの若い男、イ・カンであった。つくづく腐れ縁というか、ぶつかる縁のある二人である。

「そなたはファソンではないか」

カンも相当愕いているようである。

「私たち、いつもぶつかってばかりいるわね」

「それもそうだ。初めての出逢いもそうだったからな」

昨日の出来事を思い出したのか、カンは笑った。ファソンは彼に再会して、また身体が例の得体の知れない熱を帯びてくるのを自覚した。昨日は屋敷に戻るなり、慌てふためくチェジンに出迎えられ父に「見合い、を告げられ、到底、カンを思い出す余裕もなかった。

それでも、彼に昨日、貰った堇青石（アイオライト）の簪はちゃんと髪に挿してある。

「そなたも曹さんのところに？」

ということは、彼も本屋に用があったのだろう。ファソンは淡く微笑んだ。

「用事はもう済んじゃったみたい」

じゃあ、と、小さな声で言い歩き出す。数歩あるいたところで、カンが追いかけてきた。

「待ってくれよ、まったく、つれないな。折角、奇遇にも再会できたのに」

「ごめんなさい、今、私はそれどころではないのよ」

唯一の仕事の当てが外れてしまったからには、別の仕事を探さなければならない。暇な両班の若さまの相手をしている時間はないのだ。

カンもファソンの元気がないのに気付いたらしい。

「どうした？ 何か元気ないな。私で良ければ、力になるよ」

ファソンはカンを見上げた。今日は淡い青色の上等なパジを纏っている。帽子に垂れ下がっているのはやはり衣装に合わせているようで、蒼玉（サファイア）だろう。そんな風には見えませんが、もしかしたら、人の眼を気にする伊達男なのかもしれない。

そういう意味では、ファソンの好むような類の男ではない。

洗練された端正な風貌の貴公子ではあるけれど、彼の雰囲気からは世慣れない若さまといったものが漂っている。仕事探しには間違っても役に立ってくれそうにはない。それでも申し出てくれた彼の親切は嬉しかったので、素直に礼を言った。

「ありがとう。でも、良いの。自分で何とかするから」

ファソンは微笑み、また踵を返そうとした。

「待てよ」

と、今度は行く手を塞ぐように前方に立つ。いささか強引なその態度に、ファソンはムツとして彼を睨んだ。

「何なの？ 私はこれから行くところ、やらなければならないことがたくさんあるんだから、邪魔しないで」

「どこに行くんだ？」

何故かしつこく追及してくる男に、ファソンは良い加減焦れてきた。

「どこでも良いでしょ。あなたには関係ないことよ」

「いや、それが関係あるんだ」

ここでカンはそれまでの強気な態度が嘘のように態度を軟化させた。最初からやや下がり気味の綺麗に弧を描いた眉も心なしか下がっている。彼自身、本当に困惑しているといった体だ。

「どうして、私がこれから行くところとカンに関係があるの？」

これも素朴な疑問をそのまま口に出せば、カンはますます眉尻を下げた。

「そなたのことが忘れられなかった。確かに、`本の虫、と呼ばれるだけあって、少し世の常の女とは変わっているようではあるが」

最後のひと言は余計だ。ファソンはムツとした。

「そう、変わり者で悪かったわね。そんな変わり者のことなんて、さっさと忘れれば良いでしょ」

そのまま去ろうとしたところで、腕を掴まれた。

「待ってくれ」

「ああ、だから一体、何なの、何が言いたいの」

ファソンはもどかしげに叫んだ。

「何度も言うように、私はこれから仕事探しをしなければならないのよ。あなたの訳の判らない理屈に付き合っている暇はないの！」

だが、カンは大真面目に言った。

「そなたといると胸がドキドキする。こんな気持ちは初めてなんだ、その気持ちが何なのか突き止めたい」

いきなり握りしめた自分の手を彼の心臓辺りに持っていかれ、硬直した。確かにカンの鼓動は速いようではある。ファソンはその瞬間、彼に初めて出逢った一昨日の出来事を思い出した。彼にじいっと見つめられると、ファソンもまたいつになく鼓動が跳ねたり身体が熱くなったりして、初めての体験に戸惑った。

彼が当惑しているのは、昨日、自分が体験したのと似ているのだろうか。だが、と、そこで思考は現実に戻った。

自分は彼にも告げたように、これから職探しに奔走しなければならない身だ。ファソンとしても昨日、感じた得体の知れない熱について原因を突き止めてみたい気はするが、ここは仕事を見つける方を優先しなければならない。

カンはファソンの小さな手を握りしめたまま、放そうともしない。ずっと彼の大きな手に握りしめられている中に、ファソンの方までまた身体が熱くなり胸の動悸が速くなってきた。

「いつまでやっているつもり？ 放して」

それでも放そうとせず、ますます彼女の手を握る手に力をこめる。ファソンは大きな声で言った。

「放して、この変態、助平男」

カンが切れ長の双眸をまたたかせる。

「酷い言い様だな。さりながら、他人から変態とか助平とか言われたのは生まれて初めてだ」

妙な感慨を抱いているらしいカンは、やはりどこか常人と感覚がズレているように思える。ファソンは内心、溜息をつきたい気持ちになった。

「あなた、やっぱり変よ」

当人を前に「変人、とまでは言えず、言葉だけは適当に濁したものの、女だてらに難しげな漢籍をすらすらと読みこなすファソンも変わり者なら、この浮世離れした若者も相当の変わり者といえよう。

「教えてくれ、ファソン。この訳の判らぬ胸の高鳴りの正体は一体何なのだ？」

真顔で問われても、応えられるはずがない。しかし、そこでファソンの中で閃くものがあった。

「そうね」

勿体ぶって思案に耽るふりをして見せる。

「私も一緒に考えてあげても良いけど、条件があるわ」

「条件？」

果たして人の良いお坊ちゃんは眼を輝かせて身を乗り出してくる。世間知らずの若さまを騙しているような罪悪感がちらと走ったが、家出が成功するかどうかのこの瞬間、手段を選んではいけない。

「少しの間、匿ってくれたら、あなたの気まぐれに付き合っても良いわよ」

「匿うとは？」

ファソンの言葉の意味が本当に理解できなかったのだろう。カンは首を傾げた。

「あなたのお屋敷の片隅で良いの。私を置いて貰えないかしら。もちろん、下働きの女中でも何でも、贅沢は言わないわ」

「うむ」

カンはしばらく考え込んだ。ファソンは息を吞んで彼の様子を見守る。

「嫌なら良いのよ、他を当てるから」

最後の一押しを試してみる。むろん、他に頼れるところなんて、あるはずもないのだから、これはハッターというヤツだ。どこまでも貴族の令嬢らしからぬふるまいだけれど、これも生きてゆくためには致し方ない。

カンが小さく息を吐いた。

「頼み事をするには横柄な態度だな。それが人に物を頼むときの態度か？」

「嫌なら別に無理にとは言わないから」

去ろうとすると、慌てた声が追いかけてきた。

「判った、私の家で良ければ、気が済むだけいると良い」

とりあえず、身を寄せる場所は確保できたと、ファソンは胸を撫で下ろしたのだった。

「ねえ、何で、あなたがここに用があるの？」

先刻から幾度、同じ問いを繰り返したことか。ファソンは今、王宮の正門前に立っていた。もちろん、古書店の前でカンと再会し、ここまで連れられてきたのである。

「まあ、良いから」

その度に、カンは同じ応えしかくれない。ファソンは昨日の彼との会話を懸命に思い出そうとした。確か彼は国王殿下に仕えていると話していたのではなかったか。どう見ても、王の側近のようには見えず、下手をすれば任官さえしていない極楽とんぼに見えたものだが。官吏だという話は真実だったのかもしれない。

線も細い優男にしか見えない彼もやはり男なのだ判った。ファソンが脚を踏ん張ってみても、彼は楽々とファソンの手を掴み、半ば引っ張るようにして正門をくぐり王宮内の敷地をどこに行くものか、早足で歩いてゆく。

明らかに官服を纏っているわけでもないのに、門を守る衛兵は彼を見ても咎め立てもしないし、少し進んで殿舎が見える辺りまで来ると、お仕着せを纏った女官たちともすれ違うようにな

るが、彼女たちも皆、一様にカンを不審者扱いはしなかった。一どころか、カンをもとに見ようともせず、面を伏せてそそくさと通り過ぎてゆくばかりだ。

「何なの？ あなた、一体、何者一」

ファソンは言いかけ、はたと思い当たった。

「まさか、あなた、王族とか言わないわよね、カン」

そのときだった。少し離れた前方から、小柄な老人が小走りに駆けてくるのが眼に入った。

「国王殿下、殿下～」

ファソンは小首を傾げた。あの小柄な老人は今、何と言った？

茫然としている彼女をよそに、老人はカンの前で止まった。相当に急いだものか、気の毒なほど呼吸が荒い。

「何だ、爺。何かあったのか？」

「爺、と呼ばれた老人は濃い緑のお仕着せを着ていた。どうやら、内官（宦官）のようである

。老内官はジロリとファソンを一瞥し、次いで、ファソンの手をしっかりと握っているカンの手に移った。

「殿下、今までどこにおいでになられていたのですか！ 本日の午後は大切なご用があると爺があれほどまでに申しあげましたのに」

と、どこか恨めしげな眼でファソンまで見られ、彼女は慌てて視線をあらぬ方に逸らした。

どうも、この気まずいやりとりに巻き込まれたくない。だが、そうは問屋が卸さないようで、老いた内官はファソンをあからさまに訝しむ眼で見て言った。

「この娘は何者ですか？」

そこで、カンが破顔した。

「ファソンという名だ。金尚宮に預けようと思うので、後で後宮まで案内してやってくれ」

事もなげに言われ、内官は顔を引きつらせた。

「チ、殿下。今がどのようなときなのか、ご自覚はおありなのですか？ 今は殿下のご伴侶となるべき中殿さまを決めるべく、国中の両班の子女に禁婚令を出して花嫁捜しをしている大切な時期なのですぞ！」

どこか蛙に似た滑稽な面相がひくひくと震えている。カンがファソンを連れ帰ったのがよほどショックだったに相違ない。

「あ、あの」

今更ながら、ファソンも漸く自分がとんでもないところに連れてこられたという自覚が芽生えていた。聞き間違いでなければ、この国で`国王殿下、と呼ばれるのはただ一人のはず。

ファソンは恐る恐るカンーとつい今までは気安く呼んでいた男を見た。カンは笑顔で内官と向き合っている。突然の事態に大いに狼狽している内官とは対照的だ。

「そんなことは言われなくても判っている。ただ、私は何度も言ったはずだ。まだ当分、妃を迎えるつもりはないと。こたびの禁婚令にしても、母上が勝手に大臣たちと諮ってなしたことで、私は賛同した憶えはない」

「しかし、このような時期に殿下おん自ら見初めたおなごを後宮にお納れになるというのは、いかにも外聞が悪うございます」

「ー！」

今度はファソンが蒼くなる番だ。冗談ではない、父の言うがままに顔も見ない男と見合いをさせられるのも嫌だが、王の後宮に入るだなんて、もっと嫌に決まっている。

「カ、カン。私、後宮になんて」

入るつもりはないと言いかげ、内官にきつい視線で睨まれた。カンは笑いながら言った。

「勘違いしてくれるな、爺。この者は妃にするつもりで連れてきたのではない。しばらくの間、身の置き所が必要だと申すゆえ、身を隠すには後宮が丁度良いと思っただけだ」

「なるほど、さようでしたか。いえ、殿下、爺は別に殿下ご自身が望まれた娘なら、異を唱えるつもりはありません。むしろ、女嫌いとなえ風評が立つ殿下にはご側室の一人でもいた方がよろしいかと存じます」

さりながら、この娘は少し不調法で、殿下のお側に待るにはふさわしからぬとも思えますが。

余計なお世話だと言いたいひと言を付け加えるのも忘れない。まったく、口の減らない年寄りだ。ファソンはイーとあかんべえをしてやったものの、内官は目ざとく見つけて逆ににらみ返

されてしまった。

「それにしても、身を隠すなどとは、穏やかではありませんな。娘、一体、何を良からぬことをしでかしたのだ？」

カンに対するのとは裏腹の尊大な口調に応える気にもなれず、ファソンはパイと横を向いた。祖父と孫ほど歳の離れた二人のいがみ合いをカンは傍らから興味深そうに眺めている。

「最近の若い者は、どういう躰をされているのだ」

内官はぶつくさと零しながら、カンに一礼してキム尚宮という女性を呼びに行った。

「カン」

呼びかけ、ファソンは怖々と言った。

「もしかしくなくても、あなたは国王さまなのよね？」

カンがにっこりと綺麗な顔に微笑を浮かべた。

「ごめん。騙すつもりはなかったんだけど、結果としては君に嘘をつくことになったね」

「いえ、まだ信じられなくて、夢を見ているようだけれど」

ファソンは呟き、頬をつねった。ツと顔をしかめ、陸(おか)から上がった犬が水飛沫を飛ばすように、勢いよく首を振る。

「ああ、どうやら夢ではないみたいね。これは現実だわ」

カンは堪え切れないうように笑い出した。

「そなたはつくづく変わっているというか、面白い女だな」

ファソンはハッと我に返ると、神妙な顔つきで両手を組んで眼の高さまで掲げた。地面であることも頓着せず、手を組んだまま座り込み深々と頭を下げる。また立ち上がり、同じ動作を二度繰り返した。貴人に対する敬意を表す拝礼である。

カンは呆気にとられ、拝礼するファソンを見つめていた。

「ファソン？」

ファソンは拝礼を終え、更にもう一度軽く頭を下げた。

「存じ上げないこととはいえ、失礼致しました。国王殿下に対して不敬の数々、どうか寛大なお心もちまして、お許し下さいますよう」

面を伏せたまま言うのに、カンがまた笑い出した。

「今更、遅いよ。ファソン、私は出逢ったときのままの`カン、だし、そなたも`本の虫、だ。そんな風に畏まれると、私の方まで調子が狂ってしまう」

「何ですって、誰が`本の虫、一」

勢いづいて怒鳴りかけ、ファソンはまた、うつむいた。

「いえ、さように仰せのとおりでございます、殿下」

「では、これは王からの命だといえば、今までどおりに接してくれるかい？」

ファソンは顔を上げ、笑った。

「仕方ないわね。王命なら従わないといけないから、今までどおりにしてあげる」

ふとカンと視線が合った。その眼(まなこ)に愉快そうな光が燦めいているのを見てとり、ファソンは吹き出した。ほぼ時を同じくしてカンも笑い出し、二人は声を出して笑い転げた。

「実をいえば」

ファソンはまだ笑いながら、ようよう言った。

「あなたが王さまだというのは紛れもない現実だと認識はできているのに、どうしてか、今まで通りにしか話せないの。不敬罪に問われかねないのにね」

「私も同じだ。どうも、ファソンに改まって`殿下、と呼ばれたら、背筋がかゆくなりそうだよ。だから、今まで通り、カンと呼んでくれて構わない」

二人はそれからしばらくまだ笑い合っていた。キム尚宮が老内官からの依頼で駆けつけた時、女を身辺に寄せ付けないことで知られる若い国王と美しい娘が寄り添い合い、愉しげに笑いさざめいている姿がやけに鮮烈に尚宮の眼に飛び込んできた。

「殿下があのように愉しそうに笑っておられるお姿は初めて見たこと」

キム尚宮は極めて珍しいものでも見るかのように、若い二人を見つめ独りごちた。

国王は漸く心を開くことのできる女性を見つけたのかもしれない。彼女は結婚の経験もなく、子も持たない生涯であったが、それだけに余計に畏れ多いことではあるが、王を我が子とも思ってお育てしてきた。

王が乳を差上げた乳人の手を離れた二歳のときから、彼女は王に乳母として仕えてきた。あの娘が我が手でお育て申し上げた若き国王の孤独を癒してくれる存在であれば良いがと心から願った。

そのためには自分は、これから、あの娘を後宮女官として、いずれは王の側室となるにふさわしい女人に育て上げようと固く心に誓った。

このキム尚宮は若い王の乳母を勤め上げた人で、王が`仁平大君、と呼ばれた幼少時代は保母尚宮として、王が成人後は提調尚宮（後宮女官長）の地位に昇り、後宮で重きを成していた。二十一歳の王にはいまだ正妃どころか側室もない。そのため、後宮で最高位にあるのは王の生母、朴大妃となるが、後宮の実際的な運営に当たり、その最高責任者となるのは金尚宮だ。

キム尚宮は常に大妃の意向を伺うので、最終的に決定権を持つのは大妃ではあっても、後宮を統括するのは提調尚宮である。

ほどなくファソンはキム尚宮に連れられ、後宮に案内されることになった。強引に見合いをさせられそうになり、屋敷を飛び出したのは良いが、ファソンが飛び込んだ新しい世界は何とも彼女の予想をはるかに越えた世界だったのである。

賢宗は生来、病弱というわけではなかったが、何かと寝込むことは多かった。彼の父である前王も蒲柳の質で、若くして亡くなっている。そのため、廷臣たちは十一歳で即位した王がまだ十五歳にもならない間に、中殿を迎える件について真剣に検討したものだ。

十五歳という年齢は、けして妻帯するのに早過ぎはしない。特に貴人であればあるほど、後継を残すためにも早婚はむしろ当然といえた。

しかしながら、まだ少年の王は同じ年頃の少女に興味を示すどころか、むしろ寄せ付けない素振りさえ見せた。彼が好んで側に置きたがるのは同年齢の内官ばかりで、それゆえに、一お若い殿下には衆道の気がおありになる。

と、暗に女嫌いなのは同性愛嗜好があるのでとは実に無礼千万な噂が廷臣たちの間で囁かれた

もつとも、これには大きな誤解がある。前王と王妃との間に生まれ、三歳で世子となった賢宗は生まれながらの王であった。見た眼も美男で、しかも若い。そういったところから、まだ幼い時分から、彼に色目を使う女官たちが多かったのは確かなことだ。色目を使うといえども身も蓋もない言い方かもしれないけれど、要するに、

一王さまのお眼に止まりたい。

と、熱望する若い女官は多かったということだ。仮に第一王子の母となれば、未来の国王の生母となることも夢ではない。

後宮で生まれ育った賢宗は、そういう女の裏の部分一醜い欲望を幼いときから目の当たりにしてきた。父王は生涯に渡って中殿（正妻）の他には側室を数人置いていた。しかし、これもひそかに囁かれていることだが、体力がなかったせい子種が薄かったせい、側室には一人も御子は生まれず、正妃一人に賢宗が生まれたただけだ。

もつとも、これも怖ろしい噂が後宮で囁かれています、嫉妬に狂った王妃が懐妊した側室たちをことごとく薬を飲ませたり転ばせたりして流産させた一とも伝えられている。

もちろん、賢宗自身もそういった黒歴史的な後宮の噂話、伝説と笑い飛ばすことは満更できない話を知っている。そして彼がよく知る気性の激しい母であれば、そういうこともありなんと思えてしまうところが哀しい。

あれはいつだったか、確か彼が八歳くらいのときだ。季節は真冬で、漢陽に純白の雪が降り積もったある朝、彼はなかなか全文憶えられなかった漢籍をやっと憶えることができ、嬉しくて母に報告にいった。

けれど、後で行かなければ良かったと何度後悔したことか。東宮殿からとある後宮の殿舎を通りかかり、爺やと慕うお付き内官を従えていた彼は脚を止めた。

美しい白装束の女が降り積もった雪の上、筵一枚で端座していた。

一あの者はいかがしたのだ？

当時はまだ若かった爺やこと沈内官は沈んだ面持ちで応えた。

一中殿さまのお怒りを買った者にございます。

一何ゆえ、母上のお怒りを買ったのだ？

一それは。

沈内官は口ごもった。幼い彼は女の許に駆け寄った。

一このような雪の上では寒かろう。何の詮議があって、このようなことになったのかは知らぬが、私が母上に取りなして参ります。

白装束の女性は美しかったけれど、それは例えば降り積もった雪のように儂いものだった。母よりは、かなり若い、まだ十代のようにも見えた。

後に、その女が父王の寵愛した側室の一人で、その時、懐妊していたのだと知った。

彼は中宮殿に赴き、漢籍のことなどそっちのけで、雪の中で端座させられている女性のことを母に話した。

一このような寒い日に風邪を引いてしまいます。

一世子は慈悲深いこと。きっと、行く末はご立派な王とおなりでしょう。

母は微笑んで頷いたが、その後、取った手段は残酷極まりないものだった。

帰り道、雪の中にいた女性はもう跡形もなく姿を消していた。彼女が座っていた場所には筵さえない。ただ、白い雪をおびた美しい鮮血が紅く染め上げていた。

一何があったというのだ！

興奮して訊ねれば、内官は哀しげに首を振るばかりだった。王妃から箝口令が敷かれていたらしく、幼い東宮に真実を教えてくれる者は誰一人いなかった。

その側室は

一王さまばかりか、また幼い世子さままでをも誑かそうとした。

と、大妃（前中殿）に仕える尚宮から鞭打たれ、流産し、彼女自身も流産後、息を引き取ったという話だった。

我が母ながら、何という酷い所業をするのか。彼が後にも先にも母の烈しい嫉妬を目の当たりにしたのは、そのときだけだった。しかし、そのただの一度は彼の女性不信を決定づけるのには十分すぎた。

若い王と実母である朴大妃との関係は、そういう経緯もあり、微妙なものだ。大妃は一人息子を溺愛しているが、当の息子は母に対して常に一定の距離を置いている。むしろ、王が物心つく前から養育に当たった守り役の沈内官長（内侍府長一内官を統括する部署の長）や今は提調尚宮となっている乳母の金尚宮らの方をよほど信頼し、心を開いている。

王が十八歳の頃、やはり、廷臣たちから国婚についての議題が提出され、王自身が参加しての御前会議で何度も話し合われたが、当の王はのらりくらりと交わすばかりで、これも話ほうやむやになった。

だが、賢宗が二十一歳になったこの年早々、ついに痺れを切らした廷臣たちと大妃が共謀して王には無断で禁婚令を発布した。これは国婚（王の結婚）のため、朝鮮国中の八歳から十七歳までの適齢期の両班の子女に対して、この間は無断で結婚してはならないというものだ。

あと半月も経たない中に、新しい中殿を決めるための選考試験が始まる。選考試験は志願者・推薦者を含めて全員に対して数度に渡って行われ、最終（四次）選考まで残った娘たちが次に大妃や議政府の高官たちの前で一人ずつ面接試験を受け、その中から一人選ばれた令嬢が中殿に冊立される。

また、最終選考まで残った令嬢たちはそのまま当代の王の後宮に入ることは決定済みで、彼女たちはそれぞれ実家の家門にふさわしい位階を側室として賜る。

長らく我が娘を中殿にと虎視眈々と窺ってきた両班たちは今こそ我が娘たちを中殿候補にと名乗りを上げてきている。早くも志願者は見込み数を軽く越え、選抜試験の担当者たちは令嬢たちの履歴書などを一枚一枚眼を通すのに大わらわであった。まず書類選考で不合格となる気の毒な令嬢もいるのだ。

新中殿の志願者の異例の多さは、当代の国王の結婚に対する関心がそれだけ大きいことを物語っていた。

もっとも、相も変わらず肝心の若き国王は自分の花嫁選びだというのに知らん顔で、まるで関心がなさそうである。

その重圧からというわけでもないだろうが、その頃、賢宗は熱を出して寝込んだ。どうも軽い風邪を引き込んだのを甘く見たのが良くなかったようだ。

その日、ファソンは金尚宮に言われ、大殿の寝所で病臥している王の許に薬湯を運ぶことにな

った。後宮の女官として働くようになって十日余りが過ぎたある日のことだ。

通常、正式な女官には見習い期間を経なければならぬ。が、ファソンの場合は公にはしていないものの、国王自らの推挙ということもあり、見習いではなく正式な女官として仕えることが決まった。これは極めて破格の待遇である。

提調尚宮は一つの殿舎を賜っているため、ファソンは女官長預かりということで、キム尚宮の下で女官として必要な礼儀作法や実務などを学びながら、色々とキム尚宮の身の回りの雑用をこなしていた。

大殿の磨き抜かれた長い廊下を小卓を掲げ持って静々と歩きつつ、ファソンは首を傾げた。

大殿にも専属の尚宮や女官はいるのだから、何もわざわざ他の殿舎で働く自分がやる仕事でもなかりうに。そういう疑問があった。よもや国王の方からキム尚宮に一たまにはファソンの顔を見たいゆえ、こちらに寄越してくれ。

内々に頼まれたキム尚宮がファソンを王の許にやる口実だとは想像だにしない。

天翔る龍が彫り込まれた重厚な両開きの扉が見えてきた。国王の寝所である。扉の前に数人の内官や尚宮、女官が控えている。その中には例の`爺、こと沈内官の顔もあった。

あの老人とはどうも最初の出逢いが良くないが、今やファソンは後宮で働く女官である。

大先輩の内官長に面と向かって敵意を露わにするほど、ファソンも子どもではなかった。

ファソンの姿を認め、沈内官が小さく頷けば、若い女官二人が両側から扉を開いた。

「陳女官が薬湯をお持ち致しましてごさいます」

沈内官の声と共に、ファソンは静かに寝所に入った。背後でまた扉が閉まる。

室の奥に大きな寝台が見えるが、ここからでは絹布団の山が見えるだけだ。もしかしたら、カンが眠っているのかもしれない。だが、薬湯だということからは起こしてでも飲ませた方が良いでしょう。

そう判断して寝台に近づいた。カンは子どものように布団を引き被っている。

「一殿下」

遠慮がちに呼びかけると、いきなり山のような布団が勢いよく跳ね上がった。

「きゃっ」

あまりに愕いたので、らしくない悲鳴を上げてしまい、ファソンは慌てて両手で口を覆った。

「な、なに。愕くじゃないの」

と、これはおよそ至高の立場の人に対する物言いとは思えない口調で抗議する。

「ふふ、これはちょっとした罰だよ」

カンは満面に笑みを湛えている。

「罰ですって？ 一体、私が何をしたというの」

「少しは私のことを思い出してくれた？」

「はあ！？」

ファソンは何とも間の抜けた声を出した。カンの言おうとしているところがさっぱり判らない。

「十日もファソンの顔を見ていない。その間、私は君の顔を思い出しては切ない溜息ばかりつい

ていた。ファソンに見つめられたときの、あの胸の鼓動が速くなるのも懐かしいと思ったほどだったんだ」

「一」

カンの科白は極めて意味深だ。こんな科白を他人に聞かれたら、恋人同士の熱い告白と勘違いしかねないところだが、生憎とファソンは難しい書物は読めても、恋愛にかけては超奥手であった。

カンが滔々と告げている科白の意味にどれほど重大な意味があるかは理解できていない。

「逢えない間、私はファソンに逢いたくて堪らなかった。ファソンは私に会えなくて、淋しくなかったのか？」

なので、言葉そのものを素直に受け取り返事をした。

「もちろん、逢いたいと思ったわよ。だって、この広い宮殿ではカンしか知っている人がいないんだもの」

最初の科白では歡びに眼を輝かせたが、次の瞬間にはカンは肩を落とした。

「何だ、ファソンが私に逢いたいというのは、そういう意味だったのか」

「そういう意味って、他にどういう意味があるっていうの？」

生真面目に問うファソンに対して、カンは淡く微笑した。

「いや、良いんだ。今はまだ、それで良い」

カンはまた意味不明の言葉を独りごちた。

「だから、罰だというんだ」

「え？」

「私一人がファソンに逢いたいのを我慢して、ファソンは私のことをろくに思い出しもしてくれなかったことへの罰」

「カンの話はよく判らないわ」

ファソンが肩を竦めると、カンはまた笑った。その時、ハッと自分の大切な任務を思い出す。

「そういえば、キム尚宮さまに頼まれて、薬湯を持ってきたのよ」

ファソンは寝台の側に置いた小卓を見た。鮮やかな牡丹色の風呂敷を取り去ると、湯飲みに入った薬湯と口直しの甘い菓子が載っている。

「でも、この分じゃ薬湯を飲む必要もなさそうね。心配して損しちゃった。元気すぎるくらい元気じゃないの」

呆れたように言うのへ、カンは悪戯っぽく笑った。

「あれ、何か悪寒がしてきた。熱がまたぶり返したのかもしれない。自分では薬が飲めないから、ファソンが飲ませてくれ」

「なっ」

ファソンは両手を腰に当てた。

「言うに事欠いて、飲ませろですって。そんなに元気が有り余ってるのに。自分で飲みなさいよ」

「ああ、咳が出る」

わざとらしくコホコホと咳き込んで見せるのに、ファソンは大きな溜息をついた。

「仮病なのは判ってるのよ？」

「苦しい。薬を」

ファソンはこれ見よがしに息を吐いた。

「しょうがない人ね」

小卓に乗っている匙を取り上げ、湯飲みから薬湯を掬う。匙は毒に反応する銀製だ。

「はい、口を開けて」

「あーん」

カンが親鳥から餌を貰う雛よろしく大きな口を開けている。その嬉しげな表情に、ファソンは呆れて何も言えなくなった。

「はい、もう一度」

「うん」

にこにこ口を開け、ファソンは匙で薬湯をカンに飲ませる。そんなことを繰り返し、漸く薬湯はすべて終わった。

「ああ、幸せだ。ファソンに薬を飲ませて貰えるなんて思ってもみなかった」

満足げに言うカンに白い手巾を渡す。と、彼はニッと笑う。

「ああ、本当に子どもなんだから」

ファソンは歯がみし、カンの手から手巾を奪い取り、口の周りについた薬湯を拭いてやった。

「何でもキム尚宮さまは、これが特別な薬湯だとおっしゃっていたけど」

ふと思い出して言うと、カンが笑った。

「セオク特製の薬なんだ」

セオクというのはキム尚宮の名前だ。今でも母のように慕っている乳母を王は名前で呼ぶ。

「キム尚宮さま特製の？」

「ああ、実は薬湯ではなくて生姜湯」

「ええっ」

カンは相変わらず笑みを浮かべている。

「私は幼いときから御医が調合した薬が苦手ですね。よほど酷いとき以外は、セオクが作ってくれた生姜湯を薬代わりにしてきたんだ」

「我が儘な王さまね」

「我が儘ついでにもう一つ、薬湯の後は口直しの甘い菓子が食べたい」

ファソンは笑い、軽くカンを睨んだ。

「薬じゃないなら、必要ないでしょ」

「そう言うなよ。ほら、あーん」

と、また口を開けるので、ファソンはもう自棄気味に綺麗な花を象った干菓子をそのまま口に放り込んだ。

「む、くぐ」

カンは眼を白黒させている。

「これが私から我が儘な王さまへの罰」

カンはひとしきり噎せた後、恨めしげな眼でファソンを見た。

「負けず嫌いな女だなあ」

「当たり前よ。生姜湯も飲み終えたし、私はこれで帰るわね」

「待ってくれ」

カンの様子がどうにも必死だったので、ファソンは脚を止めた。

「まだ何か用事がある？」

「頼みがあるんだ」

「なあに」

「歌を歌って欲しい」

「どんな歌？」

カンは少し押し黙った。

「笑わないか？」

「ええ」

「子守歌」

ファソンは眼を見開いた。

「私が知っている子守歌なんて、一つくらいしかないわよ」

「何でも良い」

ファソンは頷いた。

「また熱が上がるといけないから、横になって」

「うん」

素直に横になったカンの上から掛け衾(ふすま)を掛け、ファソンは寝台の枕辺に浅く腰掛けた。

「私の大切な吾子はどこから来た。吾子は天からやって来た。吾子はどんな金銀財宝よりも大切な宝物。吾子よ、私の吾子よ、天から下された大切な宝物よ」

朝鮮に古くから伝わる伝統的な子守歌であり、上は両班から下は庶民に至るまで、よく歌われるものだ。

「私が子どもの頃、母がよく歌ってくれたの」

ファソンは歌い終えと言った。

「そうか。ファソンは幸せだな。私はセオクがたまに歌ってくれたくらいで、実の母の子守歌なんて聞いたことはないよ」

「カンのお母さまって、朴大妃さまよね」

「一ああ」

カンは頷いた。親代わりの沈(シム)内官やキム尚宮のことになると嬉しげに話すのに、実の母大妃については浮かない顔で口を閉ざすのは気になった。

「ファソン。私は一度だって王になりたいと願ったことはないんだ」

カンの突然の吐露に、ファソンは眼を見開いた。

「でも、前王さまの御子はカン一人だったんでしょう。望むと望まざるに拘わらず、カンが王位を継ぐのは宿命だったのね」

「本当にそうだろうか」

え、と、ファソンは問い返した。

「ファソン、おかしいと思わないか？ 父上は母以外にも五人の側室を持っていた。その中の誰にも子ができなかったのは不自然すぎる」

流石に、ファソンにもカンの言いたいことの意味は判った。

「誰かがわざと他のご側室たちに御子を産ませまいとしたというの？」

「そういう噂が後宮には流れている。私の母が身籠もった側室を流産させた」と

慥(くら)い声音で呟くカンに、ファソンは絶句した。

「後宮は怖ろしいところだ、ファソン。もしかしたら、私にはたくさんの弟妹がいたのかもしれない。母は何人の罪なき生命を犠牲にして、私を王位につけたのだろう。私は兄弟を犠牲にしてまで、王になりたくはなかったのに」

「カン、思いつめないで。あくまでも、噂の域を出ない話なのだし。それに、あなたは前の中殿さまのただ一人の王子さまだったのだから、たとえ他にご兄弟がいたとしても、あなたが王位を継いだことに変わりはないと思うわよ」

そこで、ファソンはカンから怖ろしい事実を聞かされた。幼き彼がかいま見た雪の日の惨劇、前王の側室が懐妊中、大妃の嫉妬のために雪の上に席藁待罪(ソツコテジエ)し鞭打たれた挙げ句、流産したこと、挙げ句にその側室まで亡くなったことを。

あまりの陰惨で残酷な話に、ファソンは言葉もない。

カンは慥い声で続けた。

「父は母の暴挙を見て見ないふりをしていた。今では私も母を遠ざけた父の気持ちがよく判る。だから」

カンは両手で顔を覆った。

「私は後宮なんて持ちたくないと思ってきた。さりながら、子どもだったときはともかく、成人した王として、それは許されないことだ。周囲は皆、早く中殿を迎えろとせつついてくる。もし、どうしても妻を迎えろと言うのなら、せめて母のような残酷なことはしない一心優しい娘を中殿に迎えたいと願っている。父のようにたくさんの側室を持って無用の争いは起こしたくないゆえ、側室を持つつもりはない」

ファソンは大きく頷いた。

「カンの言うことは判るわ。中殿さまといえば、国の母となるべき方だもの。大丈夫よ、あと数日中には中殿さまを選ぶ選抜試験が始まるわ。今回はたくさんの応募者がいると聞くから、きっと徳の高い国母にふさわしい令嬢が見つかると思う」

力づけるように言うと、カンが弱々しい声で言った。

「そうかな」

「ええ、大丈夫。カンの奥さんにふさわしい娘がきっといるはずよ」

「一つ訊いても良いかな」

「なあに？」

「ファソンは何故、家を出たりしたんだ？」

ファソンは微笑んだ。

「見合いをさせられそうになったの」

「見合いを？」

「そう。父にね、無理に見合いをさせられそうになったのよ。だから、逃げ出してきたの。甘いわね。屋敷を出さえすれば何とかかなると思ってたのよ。曹さんのところで何か仕事をさせて貰えると勝手に決めてたの。でも、その場で曹さんに断られて。私のような世間知らずが一人で生きてゆけるほど都は甘くないから、さっさと屋敷に戻れって言われちゃった」

カンが言いにくそうに言った。

「これまで敢えて訊ねなかったけど、ファソンは両班の令嬢だろう？」

「ええ、一応、父は王さまにお仕えしております、殿下」

ふざけて言うと、カンは思案げな顔で言った。

「両班の令嬢というのは普通、親の言うなりに政略結婚するものだろうが」

「このファソンをそんじょそこらのお嬢さまと同じにしないで欲しいわね。私は生涯、誰にも嫁がないと決めているんだから」

「結婚するなら、書物とするのか？ 本好きのお嬢さん」

「そうね。でも、もし誰かに嫁ぐのなら、親に決められた相手ではなく、ちゃんと自分で見つけるわ。私もその男(ひと)を好きになって、相手の男も私をちゃんと見てくれる—そういうのが良い」

カンが愉快そうに言った。

「ファソンは見かけによらず、夢想家(ロマンチスト)なんだ」

「まあ、見かけによらずは余計よ。相変わらず、ひと言多いのよね、カンは」

だから、とファソンは眼を閉じた。

「春香伝の春香と夢龍(モンリヨン)のような両思いが良いわあ」

恍惚りと呟くのに、カンが笑い転げた。

「何だ、ファソンは難しい本しか読まないのかと思ったら、春香伝も読んだのか？」

ファソンは肩を竦めた。

「当たり前でしょ。ただ漢籍が好きというだけで、私は至って普通の女の子です。もちろん、これも父や母には内緒よ。でも、本当はお母さまも父や使用人に隠れて春香伝を読んでいるのは知ってるの。私には、そんな色事しか描いてない、はしたない小説は駄目って言ってるくせにね。案外、父も母がこっそりと小説を読んでいるのを知ってるのかもしれないと思うときがあるわ」

「何か面白そうな父上と母上だな」

「そう？」

そこでファソンは声を低めた。

「ところで、カンはその後、春香伝の続きは書いているの？」

その問いに、カンは白い面をうっすらと上気させた。

「実は風邪を引き込んだのも、そのせいなんだ」

「夜更かしでもしたの？」

「まあ、そういうこと」

茶目っ気たっぷりに言うカンに、ファソンは姉のような口調でたしなめる。

「無理をしては駄目よ。カンはこの国の王なのよ？ 代わりのきかない大切な身体なんだから。病気ばかりしていたら、朝廷の大臣たちも心配するでしょう」

「だな。世継ぎがないから、余計に早く中殿を迎えろと煩くなるんだよ」

「それは仕方ないわよ。私だって、心配するわ」

カンは横たわったまま上目遣いにファソンを見た。

「それは私の健康が心配だということか？ それとも、私に世継ぎがないから、何かあったら大変だと？」

「嫌ねえ、どちらも心配よ」

何故、そのような質問をされるのか判らず、ファソンは言った。

「あまり無理はしないでね。日中は夏のように暑いけど、夜は冷えるから、余計に身体に負担がかかるのよ」

「判ってはいるのだが、昼間は政務があるし、小説を書くとなれば、夜しかない。必然的に眠る時間を削るしかないんだよ」

「どのくらい進んだの？」

「そうだな」

カンは首を傾げた。

「私の書いたのは続編というよりは、正しく言うと、春香伝の異聞のようなものなんだ」

「異聞？ 面白そうね」

勢い込んで訊ねると、カンは笑った。

「そなたは聞き上手だな。そんな風に訊かれると、ますます話したくなる」

「お世辞ではなくて、本当に聞きたいわ。どんな話なのか、教えて」

「晴れて悪徳使道から逃れた春香はモンリヨンと都に行った。そこで奥方に迎えられ、幸せに暮らすんだ。だが、ある日、モンリヨンが政敵に陥れられ、濡れ衣を着せられ義禁府に囚われた」

「まあ、それは大変」

「そこで、賢妻春香の出番だ」

ファソンは固唾を呑んで、カンの言葉を待った。カンはファソンの表情を見て、満足げに笑う

。「春香は良人の無実を証(あか)そうと男装してひそかに単独で聞き込みを始めた」

あろうことかモンリヨンは妓生殺しの罪で囚われたのだ。酒には強いはずの彼は両班の知り合いに誘われ、妓房に上がった。数人で賑やかに飲み明かしている中に、モンリヨンは深酒が祟って眠ってしまい、翌朝目覚めたときには彼の傍らに妓生の亡骸が転がっていた—という事件だった。

「モンリヨンは仲間内からも『策』と呼ばれていたほどの酒豪だった。ゆえに不覚にも眠ってしまったのは、酒に眠り薬を入れられたからだ」

「明らかに、誰かがモンリヨンを陥れようとしてやったのね？」

「そう！ その謎を春香が解き明かすという筋立てなんだ」

「素敵じゃない。完成したら、絶対に読ませてね」

ファソンが力づけるように言うと、カンはますます頬を染めた。

「うん、真っ先にファソンに見せるよ」

ファソンは夢見るような瞳で呟いた。

「やっぱり、春香伝は良いわよねえ。想い想われて結ばれる幸せな恋物語。どんな試練があっても、強い愛で結ばれた二人は乗り越えて生涯幸せに暮らすの」

「なら、さしずめ私がモンリヨンで、そなたが春香か？」

「あら」

ファソンは令嬢らしくもなく、鼻をうごめかした。

「モンリヨンの正体が王さまだったなんて、幾ら何でも、あり得ないわよ。まあ、それを言うなら、王さまが春香伝を読むどころか、続きを書くだなんて誰も想像もしないでしょうけど」
「それもそうだな」

カンは頷き、思案顔になった。

「だが、曹さんは私の書いた続春香伝を売ってくれると約束したぞ」

「私も売れると思う。今度は春香がただひたすら耐えるだけではなくて、自ら良人の無実を証明するために男装までして聞き込みするのよね」

「そうだ。時には妓楼に上がる客を装って潜入調査もする」

でも、と、ファソンはカンを訝しげに見た。

「王さまが何故、妓楼を舞台に描けるほど詳しいのかしら」

「いや、それはそのだな。曹さんの本屋に行くついでに色町へも」

「まっ、色町ですって。妓房に上がったことがあるの！ 何よ、今の国王さまは、女嫌い、のほずでしょ！」

カンは渋面で言い訳を始めた。

「女嫌いというのは周囲が勝手に言っているだけだ。私だって男だよ。特に後宮に渡るわけにもいかないとすれば、たまには妓楼にも行く。もっとも、妓房では飲むだけで、女を買ったことはない」

「知らない！ カンがそういうことをする男の人だって思わなかった」

ファソンはそっぽを向き、立ち上がった。

「それでは、私はこれで失礼致します。殿下」

「待て」

咄嗟に手首を掴まれ、ファソンは背後を振り返った。

「怒った？」

「別に、カンが妓房で妓生遊びをしても、私には関係ない話だもの」

「怒るなよ。妓房に上がったのは小説を書くため、まあ、実地調査のようなものだ。どんな場所か知らなくて、描こうにも描けないだろう。別に女遊びをしたくて行ったわけではない」

「でも、さっきは言ったでしょう。後宮に行けない代わりに妓房に行ったとか」

ファソンがむくれて言うのに、カンは含み笑いを洩らした。

「あれは、そなたを妬かせてみたくて」

「私を妬かせる？」

眼をまたたかせるファソンに、カンは破顔した。

「いや、今の言葉は忘れてくれ。それよりも、ファソン。もう少しだけ側にいてくれないか？」

先刻までの剽軽な様子と異なり、どこか縋るような物言いだ。ファソンは胸をつかれた。

「手を一放して」

ファソンの手はいまだカンの手の中にある。またしてもあの正体不明の熱がどんどん身体に溜まってきているような気がして、ファソンはカンに頼んだ。

「嫌だ」

「カン」

咎めるように名を呼べば、カンが綺麗な顔に笑みを浮かべた。

「お願いだ、もう少しだけ、このままで」

二人はしばらく黙り込み、ファソンはカンに手を握られたままでいた。

「ファソン」

突如として名を呼ばれ、ファソンはハッと我に返る。

「そなたに見つめられたり、こうして手を握っていたら、何故、私の胸の鼓動が速くなるのか。以前、どうしてなのだろうと聞いたが、そなたは、その理由が判ったか？」

「いいえ」

ファソンは首を振る。まさか、自分も同じで、カンの綺麗な微笑みを見る度に、もしくは彼にこうして手を握られる度に身体が熱くなるなんて言えるわけがない。奥手なファソンでも、それがはしたないことではないか、という程度の知識はあった。

「私もまだ判らないんだ」

「考えても判らないことは考えるのを止めるのがいちばんよ。カン、少し眠った方が良いわ。私、長話をしてしまって、あなたを疲れさせてしまったかもしれない」

「気にするな。私は愉しかったよ。そなたといると、時間の経つのも忘れるほどだ。もう少し宮殿での暮らしに慣れたら、セオクに頼んで私付きの女官にして貰おうと思っている」

ファソンはそれには返事をしなかった。後宮の人事には原則として国王も口出しはできないといわれている。王妃がいる場合は王妃が決めるべきであり、王妃不在の今は、大妃の裁量で決められるはずだ。ここで新米女官にすぎないファソンが迂闊に応えられる問題ではなかった。

カンもファソンからの応えは期待していなかったようで、すぐに話題を変えた。

「もう一度、あの歌を一子守歌を歌ってくれぬか」

「はい」

ファソンは応え、母がよく幼時に歌ってくれた子守歌を歌い始めた。

「私の大切な吾子はどこから来た。吾子は天からやって来た。吾子はどんな金銀財宝よりも大切な宝物。吾子よ、私の吾子よ、天から下された大切な宝物よ」

繰り返して歌う中に、カンは規則正しい寝息を立て始めた。

ファソンはカンのどこか無邪気ともいえる寝顔を見つめ、そっと彼の手から自分の手を抜いた。

「カンは子どもの頃から今もずっと淋しいのね」

それにつけても、ファソンは我が身の子ども時代を思った。母は一人娘のファソンのことしか頭になく、何かにつけては口うるさく干渉してくる。しかし、七歳になるまでは毎夜のようにファソンが眠るまで側にいて、子守歌を歌ってくれたものだ。

「私はまだ幸せだったのね」

優しい両親に恵まれ、何不自由ない暮らしをしていた。カンは王という至高の立場にいながらも、実の母大妃とは心通わせられず、淋しい子ども時代を送ったようだ。

その時、ファソンは家を出て初めて両親のことに想いを馳せた。今頃、父も母もどうしているだろうか。こちらから断れないほどの身分の高い相手との見合いだったというのに、自分勝手に屋敷を出てしまい、どれだけ両親に迷惑をかけたかしのれない。

何故、そこに今まで思い至らなかったのだろう。けれど、今更、おめおめと屋敷に戻ることもできはしない。第一、帰ればまた見も知らぬ男と見合いをさせられるに違いない。

ファソンは切なげな溜息をつき、カンの寝顔を見た。

「おやすみなさい。せめて楽しい夢を見てね」

心淋しく哀しい子ども時代を過ごしたというカン。せめて彼が結ぶひとときの夢の中では心愉しく過ごせますように。哀しい想いはしませんように。

祈るような気持ちで今度こそ立ち上がり、彼女は国王の寝所を静かに退出した。

一方、ファソンが両親のことを思い出していたその頃、陳家の屋敷では当然ながら大騒動になっていた。

陳氏の当主ミョンソの居室では、夫人のヨンオクが刺繍入りの手巾を握りしめ、派手に泣いて

いた。

「あなた(ヨボ)、ですから、私は最初から本当のことをあの子に話した方が良いのではと申し上げたのです」

「さりながら、ヨンオク。あのお転婆な娘の性格を考えてみる。真実を話したとて、余計に反発するのが関の山ではないか」

ミョンソが大きな息を吐いた。

「困った娘だ。このままでは、我らは不敬罪に問われかねんぞ。一体、彼(か)の方にどのようにお詫びすれば良いものか。私の首一つで済めば良いが、下手をすれば陳氏の家門そのものが危うくなるやもしれぬ」

ヨンオクが金切り声を上げた。

「大監は先刻から、家門のことばかり。私は家門よりもファソンの身の方が心配でなりません。可哀想に、無理に見合いをさせられると思いつめ、川にでも身を沈めたのではないのでしょうか。もし、そうなのなら、もう、この世には生きてはいないでしょう。哀れな私の娘！」

ヨンオクが芝居がかった動作で泣きじゃくる。

ミョンソは苦虫を噛みつぶしたような表情で言う。

「そうは申せど、私よりもこの縁談に乗り気だったのは、そなたの方ではないか、夫人(プーイン)。見合いの前夜もファソンに断れぬ話だと申ししていたであろう」

「それは確かにそのように申しましたれど」

ヨンオクが手巾を握りしめ、口ごもる。

ミョンソはやれやれというように首を振った。

「だが、案ずるな。我らの娘に限って、世を儚んで入水などするはずがない。ファソンは殺されたって死ぬような娘ではない。あの逞しい娘のことだ、きっと、どこかに潜り込んで何とかやっておるだろうて。さあて、ファソンを見つけねばならぬのは山々ではあるが、ここはまず、勝手に娘が行方を眩ませた言い訳をどう言い繕うか考えるのが先だ」

ミョンソとヨンオクは顔を見合わせて、深い息をつくしかなかった。

契約結婚と本物の恋

ファソンは溜息をついた。ここ一刻ばかりの間に、これがもう何度めか知れない。

「これが新参者いびりというものなのね」

呟き、すっかり力が入らなくなった手に力をこめる。側には洗い上がった洗濯物の山、また山である。

ファソンが女官になって、はや、ひと月。暦はいつしか六月に入っている。彼女は提調尚宮直属の女官として仕えているものの、最初はその金尚宮に遠慮していた先輩女官たちも今では、妬みと敵愾心(ライバル心)をあからさまに剥き出しにするようになった。

現に、こうして毎日、山のような洗濯物を押しつけられ、一日の半分を洗濯物と格闘している有り様である。

キム尚宮の許に食事を運んでいる最中には、わざと脚を引っかけられたりチマを引っ張られたりして無様に転び、膳の物を駄目にしたこともある。当然、賄い方の女官にはさんざん嫌みを言

われ、作り直した物を運ぶ羽目になった。

上流両班の息女として育ったファソンは、洗濯など実は一度もしたことがない。慣れない仕事は尚更、手間も時間もかかるのは当たり前のことだ。

しゃがみ込んでいたファソンは立ち上がり、腰や背中を拳で叩いた。

「うー、肩は凝るし腰もだるいし、最低だわ」

格闘したお陰で、洗濯物はあらかた終わった。後はこれらをすべて干せば終わりである。とはいえ、小柄なファソンにとっては、干す作業もなかなか骨の折れる作業であることに変わりはない。

「痛い」

腰をかがめ、まだ痛む背中と腰をさすっていると、いきなり臀部をつるりと撫で上げられた。

「いやっ」

思わず悲鳴を上げると、クスクスと忍び笑いが聞こえてくる。どこの色狂いの仕業かと振り返れば一。

「カン!？」

カン一国王賢宗がその場に立っていた。

「あなたって、そういうことをする男だったの？」

ファソンは両手を組んで偉そうに抗議する。どう見ても、王さまに対して女官が取る態度ではない。それこそ不敬罪ものだ。

が、カンは怒るどころか、嬉しげに眼を細めた。

「だって、触って下さいと言わんばかりに尻を突き出していただろ。私だって、男だ。触り心地の良さそうな女の身体を見たら、つい手が伸びて一」

カンは最後まで言うことはできなかった。ファソンの平手が彼を直撃したからだ。

パッチーンと小気味の良い音が響き渡り、我に返ったファソンは蒼褪めた。

「私ったら、何てことを」

ファソンはその場に膝を突いた。

「申し訳ございません、国王殿下」

幾ら鷹揚なカンでも、ただでは済まないと思った。彼があまりに気さくに接してくれるから、つい友達感覚で対してしまうけれど、彼は王なのだ。ファソンにその自覚が足りなさすぎたのは間違いない。

立場としてはカンは国王で、ファソンは女官だ。女官は`王の女、といわれ、原則として王の所有物ということになっている。つまり、王は後宮に咲く女官という美しい花を見初めて、いつ何時なりと手折っても良いのだ。

王に身体を触れられた程度で大騒ぎして、あまつさえ王の玉体に手を上げるなど言語道断だ。

ファソンはうつむき、込み上げる涙を堪えた。もしファソンが陳ミョンソの娘だと露見すれば、父にまで迷惑がかかってしまう。

「ごめん、ファソン」

ややあって、カンの心底申し訳なさそうな声が降ってきた。

「私の悪ふざけが過ぎた。そなたの身体が魅力的で触りたいと思ったのは本当だけど、そんなことをするべきではなかった」

どこまでも正直すぎるカンである。

「さあ、立って」

カンはファソンの手を取り、立ち上がらせた。ファソンの眼に滲んだ涙を見て、カンは眉をひ

そめた。

「本当に済まなかった。もう二度としないから、泣くな」

カンが袖から手巾を出して、ファソンの涙を丁寧に拭いた。

それから、彼は洗濯物の一つを手を取った。

「お詫びに干すのを手伝うよ」

「ええっ、王さまが洗濯物を干すの？」

ファソンは二度びっくりし、大きな瞳を見開いた。

「別に王だって人間だし男だし」

と、意味深なことを言い。

カンは手際よく洗濯物を干してゆく。

開けた空間には二本の棒が立ち、物干し綱が張り巡らせてある。物干し綱は縦に何列にも並んでいて、カンはその一つに色鮮やかな布をきちんと一枚一枚干していった。

まさかカンが自ら洗濯物を干すなんて言い出すとは考えてもおらず、ファソンは茫然と眺めていた。が、まさか王一人にやらせるわけにもゆかず、慌てて彼と一緒に洗濯物を干しにかかる。

カンが干しているのは女官たちの制服や私服だ。幾枚もの色鮮やかなチマが初夏の蒼空にはためくのは壮観でもあった。

「これは私が干すわっ」

カンが何度目かに手にした洗濯物をファソンは慌てて奪い取った。カンは愕いて眼を丸くしている。

「これはその、男の人に干して貰うわけにはいかないでしょ」

ファソンはうす紅くなりながら、女官たちの下着を干した。

「なるほど、そういうことか」

カンは笑い、それ以上の追及はしなかった。王が女官たちの衣服を干すだけでも十分許されないことなのに、下着まで手にしたとなれば、あの沈内官長は怒りのあまり、その場で憤死するかもしれない。

「あなたが女官の服を干しているのを見たら、沈内官長も金尚宮さまもきっと卒倒するわよ」

「確かに」

カンは笑って頷く。彼のお陰で、山のような洗濯物もあっという間に片付いた。美しいたくさんの色布が風に揺らめくのは一幅の絵のようでもある。

「綺麗ねえ」

ファソンはもちろん、女官のお仕着せ姿だ。濃紺の上衣と赤色のチマの上から前掛けをつけている。一つに編んだ髪は動きやすいようにくるりと丸めて纏め、これも定められた紅い髪飾りをつけている。

カンの方はこれは王の正装一天翔る龍を赤地に金糸銀糸で織りだした龍袍だ。

ファソンの背後で眼にも彩なチマが翻っていた。六月の眩しい陽光が少女の白い膚を輝かせている。

「女官のなりも可愛いが、そなたにはもっと華やかな衣装の方が似合いそうだ」

カンが眼を細め、ファソンを見つめた。

「あなたに貰った簪も付けられないわ」

女官は決められたもの以外、一切身に付けることは許されない。カンから贈られた堇青石（アイオライト）の簪はずっと与えられた私室の備え付けの筆筒にしまっている。

と、ファソンはカンの姿が見えないことに気づき、少し慌てた。

「カン？ カン！」

呼ばれるも、いらえはない。

「カン、どこに行ったの？」

狼狽え、目の前にある紅い布をめくったその瞬間、大きな声と共にカンの笑顔が迫った。

「わっ」

「ー！」

ファソンは声にならない声を上げる。

「酷い、また愕かせて」

彼女は握り拳を振り上げた。カンが笑いながら逃げる。

「怖い怖い。また叩かれて痛い想いをするのはご免だよ」

「待って、待ちなさい。本当に懲りないんだから」

追いかけるファソンと逃げるカン。若い国王と美しい女官が笑い声を上げながら戯れているところを見れば、まず王の意がその美しい娘にあることは一目瞭然ではあった。しかし、幸か不幸か、その場には誰もおらず、ファソンはただ無邪気にカンと追いかけてっこをしているとしか思っていない。

ひとしきりカンが逃げ回った次は、カンが鬼になってファソンが逃げる番だ。

「待て」

「待てと言われて、待つものですか」

ファソンは笑いながら背後を振り返り、風にはためくチマを器用にくぐっては逃げる。こういう時、小柄で身軽なのは役に立つ。

そういえば、子どもの頃には仲の良い女の子たちと追いかけてっこをして遊んだ記憶がある。走っていると風になったようで、気持ちが良い。

だが、ここでもカンの方が一枚上手であった。ふいに姿が見えなくなったかと思うと、蒼色の布が向こうから持ち上げられ、カンがヌッと姿を現した。

「きゃっ」

愕いた際に、ファソンはカンに抱きしめられた。

「捕まえた」

「カン」

カンはファソンを腕に閉じ込め、その黒髪に頬を押し当てた。

「良い香りがする。花のような匂いだ。ファソンは名前のとおり、本当に花の精なのかしめれないな」

ファソンは逞しい男の腕に囚われて、身じろぎもできない。細身で線が細そうに見えても、やはりこうして抱きしめられてみれば、その体軀はファソンとは違い、大人の男のものだ。

「カン。もう良いでしょ、良い加減に放して」

ファソンが身を振ると、彼はすぐに自由にしてくれた。解放された刹那、ファソンは無意識に熱くなった頬を手で押さえた。

良かった。このまま彼に抱きしめられていたら、心臓の跳ねる音が彼に聞こえてしまったかもしれない。

「愉しかった。久しぶりに子どもに返ったようだった」

カンが心からの笑顔を見せて晴れやかに笑う。そんな彼の屈託ない笑顔が見られて、ファソンも嬉しかった。国王という重責を背負う人だからこそ、自分と過ごすわずかな時間でも、カンが寛げれば良いなと願わずにはいられない。

既に十日前には新中殿候補の第一次選考試験が宮殿内で行われ、まずは書類審査に合格した少女たちが一同に会した。流石にいずれ劣らぬ名花、美しさと聡明さに裏打ちされた令嬢ばかりで、後宮の女官たちは興味半分嫉妬半分というところで、美しい令嬢たちが宮殿内の敷地を謹厳な尚宮たちに連れられて試験会場へ移動するのを遠巻きに眺めていたものだ。

この一次選考でかなりの数の少女たちは不通、つまり不合格となり、絞られた精鋭たちが次の二次選考に臨む。その二次選考が行われるのは一ヶ月後の予定となっている。炎暑の最中ではあるけれど、栄えある二次選考に晴れて臨む選ばれた令嬢たちはその準備に余念がないことだろう。

自分には生涯拘わりのない世界の話ではあるが、孤独なカンのためにも、この選考で最後まで勝ち抜き選ばれた令嬢が彼にふさわしい女性であることを祈っていた。そう、この女たちの戦い

で見事勝ち抜いた女性こそがカンの妻つまりは中殿となる。

カンの奥さん。中殿、国母という地位には何ら魅力も感じられないのに、何故か彼の妻という立場を考えた時、ツキリと胸にかすかに走った痛みはそも何なのか。カンが妃を迎えると聞いて、どうして、こんなに胸が苦しいのか。その理由を突き詰めて考えてみるのが怖くて、ファソンは無理に考えることを止めた。

願わくば、選ばれた方、中殿さまがカンの淋しさを癒してあげられるような優しい方でありませうように。

そんなことをぼんやりと考えていると、カンの声が耳を打った。

「ファソン！」

ハッとして眼をまたたかせる。

「私の顔に何か付いているか？ そなたがあまりに見つめるので、顔に穴が空くかと思ったぞ」と、これはいつもの彼らしい冗談だとは判った。

「それとも、私の男ぶりに見惚れていたとか、惚れ直したとか？」

ファソンは笑った。

「いやあね。自惚れが強すぎる男はモテないのよ」

二人はどちらからともなく並んで歩き始めていた。

「モテるで思い出したが、数日前、初めて中殿候補の娘たちの絵姿と履歴書を見たよ」

言うともなしに呟いた彼に、ファソンは無理に微笑みを浮かべた。

「そう。一次選考に来ていた娘たちでさえ、あれだけ綺麗だったんだもの。更にその中から選りすぐりの方々が二次に残ったわけだから、きっと中殿さまにふさわしい人ばかりでしょうね」

心なしか声が震えた。大丈夫だろうか、今、私は彼の前でちゃんと笑えているー？

「良かった。カンには幸せになって欲しいの。あなたにふさわしい方が見つかることを心から祈っているわ」

物分かりの良いことを言いながら、泣き出したいような気持ちなのは何故？ そんなに嬉しげに王妃となるべき女性について語らないで欲しいと願うのは、私の我が儘よね。

ファソンは一旦うつむき、顔を上げた。

「じゃあ、顔を合わせなかった十日ほどの間、カンはずっと中殿候補の方々の姿絵を眺めて過ごしていたのね」

これは冗談のつもりだったが、カンはそうは受け取らなかったようだ。綺麗な眉をはっきりとひそめた。

「そんなわけないだろう。見たとは言ったが、母上さまにせつつかれて仕方なく、一通り眼を通しただけだ」

どうして、彼がそう言っただけで、私はホッとするのだろうか？

「そなたの方はどうだ？ 宮仕えを始めてそろそろひと月だ。少しは女官の仕事にも慣れたか？」

話題が変わって、胸を撫で下ろし、ファソンは微笑んだ。

「全然よ。さっきも見たでしょ。相変わらず、要領が悪くて金尚宮さまにも叱られてばかり」

ふいにカンがファソンの手を握った。

「カン？」

カンはファソンの手をじいっと見つめている。

「手が酷く荒れている。女官の仕事のせいだな。初めて曹さんの本屋で出逢った時、そなたの手はまったく荒れていなかったのに」

ファソンは慌てて彼の手から自分の手を引き抜いた。

「なあ、ファソン。そなたはいずれ名のある家門の娘ではないのか。両班の娘であるそなたが家を出るには相当の覚悟が必要だったはずだ。その理由を訊ねた時、そなたは無理に見合いをさせられそうになったと言っていた。今まで無理に問いただすのは控えていたが、その相手というのはどこの誰なんだ？

詳しい事情を私に教えてくれないか。もしかしたら、力になれることがあるかもしれない」

「それは」

ファソンが立ち止まると、カンも止まった。

少しく躊躇った後、ファソンはひと息に言った。

「実は、私も相手の男のことはよく知らないの」

「何だって？」

ファソンは力ない微笑を浮かべた。

「本当よ。嘘じゃない」

ファソンはカンの表情が翳ったのを見逃さなかった。だが、自分の先ほどの言葉がどうして彼の心をそうまで乱すのかは判らない。

「相手の男も気の毒に、私と同じだな」

「それは、どういう意味？」

「つまり、私も嫁に逃げられたということさ」

ファソンは息を呑む。

「嫁って、今は中殿さまを国を挙げて決めている最中なのよ？ それなのに、もうお嫁さんになる女性が決まっているの？」

カンがフと淋しげ笑った。その横顔は酷く切なげで、ファソンは胸が痛んだ。

「だから、正式な嫁じゃない。だが、ほぼ本決まりだったらしい。母上が大乗り気だった娘だそうだから」

そこでまた彼は自嘲気味に嗤った。

「おかしなものだ。私の花嫁を決めるのに、当の私の好みや気持ちは端から無視されている」

「カンー。そんな風に自分を追いつめないで。さっきもあなたは言ったじゃない。二次選考に残った令嬢方の姿絵を見たって。その中に好みの人や逢ってみたい人がいれば、その気持ちを大妃さまにお伝えしてみたら、どうかしら」

「無駄なことだ」

唾棄するような言い方は、いつも穏やかな彼らしくない。

「無駄だって決めつけないでー」

言いかけたファソンに彼は皆まで言わず、烈しい剣幕で言い募った。

「無駄だ。中殿は私が決めるものではなく、母上や大臣たちが決めるものだから。それに、二次選考の残った娘たちの中に、取り立てて逢ってみたいと思う娘などいなかった」

そのひと言にホッとする自分は、どれほど身勝手に嫉妬深い女なのだろう。ファソンは自分の中に棲んでいる醜いもう一人の自分の存在を初めて知った。

カンは淡々と続ける。静謐な表情は先刻の激した様子が嘘のようだ。

「国王の結婚は国婚とも呼ばれ、自分の意思で伴侶の一人選べない。考えてみれば、王なんて、つまらないな」

「勝手に結婚相手を決められてしまうってということ？」

「ああ」

カンは複雑な表情でファソンを見た。

「いや、王だけでなく両班家の娘も似たようなものか。そなたも親に無理に見合いをさせられそうになって、家出してきたクチなものな」

「実のところ」

カンが声を低めた。

「大がかりな中殿の選抜試験をやっているが、あれは本当に無意味なことなんだ」

「え？」

訳が判らないといった顔のファソンに、カンは肩を竦めた。

「中殿は既に決まっているのも同然ゆえ」

「カンが今し方、言っていた令嬢のことなのね」

「そうだ」

カンはまるで気のない顔で頷いた。

「母上と大臣たちが全員一致で決まった娘だそうだ。家柄、父親の官職、その娘の人となりから容姿まですべて問題はないとか聞いた」

つまりは、と、カンは面白くもなさそうに言った。

「最初から母上らの推す娘を中殿に据えるわけにはゆかない。何故なら、国王の結婚については公正を期すべきで、両班の令嬢であれば、すべての者たちに機会を与えられるべきだという考え方があるからだ。そのために形式的に公募で中殿候補を募り、選考試験とやらをご丁寧に行っているわけだ」

「そんな。選考試験に参加している令嬢方は皆、真剣なのに。酷いわ」

我こそは国母にという一心で選考試験に臨む少女たちの心を踏みにじる行為ではないだろうか。

「それで、既に決まった未来の中殿さまは、選考試験には参加していないの？」

「さあな。元々は一次選考から参加はさせる予定だったらしいぞ。もちろん、その娘が一次、二次と勝ち抜いて最終選考で中殿に選ばれるという筋書きは予め決まっていたらしいが。苦勞知らずの乳母日傘で育ったそのような娘、どうせ気位ばかり高い鼻持ちならない女に決まっている。だから、私の方も見合いをすっぽかしてやった」

自分の未来の妻のことなのに、カンはその令嬢に関心もなさそうだし、極めて冷淡だ。考えてみれば、親の都合で政略結婚の犠牲になるその令嬢も気の毒な立場だった。その娘にも、どこかに恋い慕う男がいるかもしれない。そう、丁度、今の自分のように。

その刹那、ファソンはハッとした。

「私、カンが好きなの？」

ストンと落ちてきた想いは、ファソン自身でさえ今まで気付かなかったものだった。

けれど、と、彼女は哀しく考える。この恋は実らない。カンは王さまなのだ。既に決まった女性もいるという。自分の出る幕なんて、これから先も未来永劫ないだろう。

この想いはカンに告げることもなく、永遠に自分一人の胸に封印しておかなければならない。彼に告げても、彼を困らせるだけだ。

「その娘に逃げられたのね」

「ま、そういうことだな。さりながら、逃げてくれて、どこかでホッとしている。私はつくづく卑怯な男だな」

「もしかしたら、その令嬢には好きな男がいたのかもしれないわ」

「何だって」

カンがギョツとした顔でこちらを見ている。ファソンは笑った。

「あくまでも仮定の話よ。恋い慕う男がひそかにいて、無理に結婚をさせられそうになった。そういう娘が結婚を嫌って逃げ出すというのはよくある話だわ」

カンは唸った。

「私はよく判らないな。それこそ小説の中の話ではあるまいに」

と、カンがジロリとファソンを怖い眼で見た。

「まさかファソンにも惚れた男がいるとでも？」

「そんな男がいたら、その男と今頃は駆け落ちでもしてますよ」

「ファソンには、そういう男はいないんだな？」

やけに拘るので、ファソンは逆に睨み返した。

「しつこいわね。そんな男はこの世のどこを探してもいませんってば」

一嘘よ。カン、私、本当はあなたを好きなの。好きになってはいけない男を好きになってしまったの。

カンへの恋情を自覚したばかりで、当の本人の前で嘘をつくのは辛かった。

カンが乾いた笑い声を立てた。

「つまりはだ、母と大臣たちが選んだ娘が既に中殿に決まっていて、私は形式的に彼女と顔合わせだけすれば良い。お膳立てはすべて整っていたというわけさ。笑えるな」

しばらく二人は無言で歩いた。ふいにカンがポツリと洩らした。

「伴侶くらいは自分で決めたい」

「それはそうよね」

結婚相手を自分で見つけたい、想い想われた人と結ばれたいという気持ちはファソンも同じだ。共感をこめて頷くと、カンがじいっと見つめているのに気付いた。

どんどん鼓動が速くなる。

それで、やっと気付いた。この胸の鼓動の正体は何なのか。ファソンは最初から一恐らく下町の古本屋で出逢った瞬間から、カンに恋をしていたのだ。だから、彼にこうして見つめられたり、触れられたりする度に身体が熱くなったり鼓動が跳ねたりしていた。この胸の動悸の正体は一恋の時めきなのだ。

「何なの？」

真っすぐな視線を受け止め切れず、ファソンはあらぬ方を向いた。

「私に一つ考えがあるんだけど、協力してくれないか？」

「何を考えているの？」

カンの黒い瞳を見つめていると、その幾つもの夜を閉じ込めたような深いまなざしに囚われてしまうようだ。

「ファソンにしか頼めないことだ。是非、協力して欲しい」

カンが次に発した提案は、ファソンの想像の限界をはるかに超えていた。

「私の側室になってくれ」

「え！？」

カンの瞳に魅入られそうになっていたファソンは一挙に現実には引き戻された。

「じ、冗談でしょう。私はこれでも一応、嫁入り前の娘なのよっ。王さまの後宮なんかに入ったら、一生お嫁に行けなくなるじゃないの」

本気で憤慨して抗議すると、カンが大真面目に言った。

「じゃあ、嫁に行かなくても良い。私の側にずっといて」

ファソンは頭を抱えた。

「そういう問題ではないの。側室になるということは、曲がりなりにも、あなたの奥さんになることなのよ。面白半分で作って良いことではないわ」

「私は別に面白半分で言っているのではない。ファソンも私も意に沿わぬ結婚を強いられようとしているのは同じだから、困っている者同士で協力し合えば良いと言っているだけだよ」

「私がカンの側室になることがどうして助け合いになるの？」

「つまりはだ。そなたも私も意に沿わぬ結婚を免れることができるだろう？」

カンの言い分には一理はある。つまりは見せかけだけの結婚をして、それを隠れ蓑にして嫌な相手との結婚を避けようというのだ。

ただ、それには大きな難点があった。

「確かにカンの言うように、意に沿わぬ結婚からは逃れられるかもしれない。でも、それはまた新たな束縛を生むことにもなりかねないわ」

「新たな束縛とは？」

「つまりー」

ファソンは言葉を濁したものの、ここは、はっきりと言った方が良いと判断した。

「あなたと私。お互いに自由になりたいと願った時、結婚という形を取ったら、それを解消するのは難しいと思うの」

殊にカンは国王だ。国王の離婚は原則として認められていない。妃の方によほど落ち度があって、廃されて庶人になるとか、何か相応の理由がなければ、たとえ正式な妻ではなく妾妃といえども、後宮から出ることは難しい。

「ファソンはそんな日が来ると思っているのか？」

黙り込んだファソンに、カンは静かな声音で問いかける。

「そなたが私を棄てて、後宮を去る日が来ると」

「私たち、偽りの結婚の話をしているのよ、カン。それに、私があなたを棄てるなんて言い方はしないで」

ファソンは唇を噛みしめた。カンは後宮で女たちが無用な争いをするのを見たくないから、正妃一人しか持たないと言っている。つまり、いずれ`形だけの妻、の我が身は後宮を去らなければならないということだ。

第一、彼が中殿を迎えて他の女と仲睦まじくしているところなんて見たくない。彼はファソンが自分を棄てるなどと言っているけれど、いずれ彼に棄てられるのは自分の方なのだ。

「中殿選びが終わるまでで良いから、私の側室になってくれ。母上には、はっきりと言うつもりだ。惚れた女ができたから、その者を後宮に迎えたいと。自分で選んだ娘以外に娶るつもりはないと告げる」

ファソンは泣きそうになった。

一私が彼の側にいられるのは、中殿さまの選考試験が終わるまでなのね。

それでも。ファソンは、どうしても彼の虫の良すぎる提案を断れなかった。

たとえ偽りの妻でも、短い間だけでも、好きな男の傍に居たい。

けれど、それも良いかもしれない。意に沿わぬ相手と見合いをさせられそうになり、自分は家を出た。頼みにしていた曹さんにも仕事は貰えず、ゆく当てもなく途方に暮れていたところをカンが宮殿に連れてきてくれた。

仕事と棲む場所を与えてくれた恩返しとでも思えば良い。しかも、自分はカンを好きになってしまった。好きな男の役に少しでも立てるなら、こんなに嬉しいことはない。

中殿選びが終われば、ファソンは用済みになる。そのときは潔く宮殿を出て、カンのことは綺

麗に忘れよう。その頃にはほとぼりも冷めているだろうし、屋敷に戻ったとしても差し支えはあるまい。無理に嫁に行かせようとするれば家出さえしでかす娘だと判れば、両親もこれからは無理強いはしないに違いない。

ファソンのささやかな反抗にも幾ばくかの意味はあったといえることになりはすまいか。

「判ったわ」

どうも諦めかけていたらしいカンは、ファソンが唐突に返した返事に眼を見開いた。

「本当なのか、ファソン」

「ただ、これだけは約束して。中殿さまの選考試験が終わったら、必ず私を自由の身にしてね」

「ファソン。やはり、そなたは私の側を」

言いかけたカンに、ファソンは鋭く言った。

「偽りの関係で、そう長く皆を欺くことは難しいわ。カン、お願いよ。中殿さま選びが終わって私の役目も済んだなら、後宮から私を出してちょうだい。そう約束して貰えるなら、私、しばらく側室のふりをしても良い」

「判った、約束しよう。中殿選びが終わったら、そなたは自由の身だ。それで良いかな」

「ええ」

ファソンはなおも見つめてくるカンから、そっと視線を逸らした。

「他に何か条件というか、頼みはあるか？ そなたも相当の覚悟をして引き受けてくれたのだから、何か望みがあるなら叶えるが」

ファソンは黙って首を振る。カンが吐息をついた。

「欲のないことだな」

彼はしばらく考えに耽っているようであったが、やがて意気揚々と言った。

「そなたの父御の位階を上げてはどうだろうか。王の妃にふさわしい官職を与えよう」

ファソンは弾かれたように面を上げた。

「ありがたい話だけれど、遠慮するわ」

「どうして？」

カンは解せないといった表情である。ファソンは首を振った。

「王が公私混同しては駄目だわ。妃が朝廷の人事に口を出すなんて、絶対にあってはならないことでしょう。ましてや、自分の身内の官職を上げて欲しいだなんて、尚更口にしてはいけないことよ」

更に、消え入るような声で続ける。

「それに、これは本物の結婚ではないんだもの」

私は、あなたの側に居られるだけで、十分幸せなんだから。それ以上のものを望もうとは思わないの。

ファソンの心の声は届かない。と、同様に、その時、カンがひそかに落とした呟きが想いに沈むファソンの耳に入ることはいになかったのである。

「そなたのような女こそ、中殿にふさわしき器であろうのに」

カンはやるせなげに呟き、二人はそれからもしばらく黙り込んで歩き続けた。

月が中天に掛かる刻限になった。

その夜、初めて王の閨に召される娘がいた。名を陳ファソンといい、十六歳になる。咲き初（そ）めた水仙の花のように清楚で涼やかな美貌は、あと数年待てば、いかほど美しく咲き誇る大輪の花になるかと思わせる美少女だ。

ファソンは両班の娘ということではあるが、父親は中級官吏で、家門もさしたる勢いはない、要するに問題にならないほどの家であるという専らの噂だ。にも拘わらず、さしたる後ろ盾もないこの娘が丁重に扱われているのは、提調尚宮が後見についており、なおかつ、若き国王自らが町で見初めて入宮させたという経緯があるからだとの専らの噂である。

提調尚宮は国王の乳母を務めた人である。実の母大妃よりも乳母を慕う国王が最も信頼するのが王の幼年時代から常に王の側にいた提調尚宮と内侍府長の二人であった。そのキム尚宮に託すからには、王がいかほどその娘を大切に思っているかは自ずと知れるものだ。

後宮内の湯殿でファソンは湯浴みを済ませた。数人の女官たちに寄ってたかって磨き上げられる。緋薔薇(そうび)の花びらがふんだんに浮いた湯船に長時間つかり、湯上がりにはやはり花の香りの香油を丹念に膚に塗り込まれた。

就寝する際としてはいささか濃すぎる化粧を施され、白い夜着を着せ付けられ、支度万端を整えて国王の寝所に送り込まれる。

長い艶(つや)やかな髪も洗い立てで、ほのかに花の香りが漂い、洗い髪は横に一つで束ねられている。本来、正室である中殿、側室問わず、彼女らが王の閨に侍る際は、提調尚宮によって入念な身体検査が行われる。それは万が一にも、女たちが王の寝首をかくために武器となる刃物を隠し持つ危険を回避するためでもあった。

むろん、この夜、初めて夜伽を務める娘に対しても行われたが一。ファソンがどうしても身に付けたいと願った小さな簪は王その人の許可を得た上で、特別に身に付けることが許された。

その夜、王宮は何とはなしに色めき立っていた。何と言っても、二十一歳の国王には正室はおろか側室の一人もいない。当代の王が即位後、初めて閨に召される女性が現れたのだ。

一これで王室も安泰ですな。

一この上は一日も早く、国王殿下の御子を拝見したいものです。

若い王が`女に興味を持った、のは風のごとく後宮はおろか宮殿中に広まり、あちこちでそのようなひそひそ話が交わされた。しかし、一方で、このようなことを言う者もいた。

一何故、中殿さまの選抜試験が行われている真っ最中に殿下はわざわざ新しい側室を召されたのでしょうか？

これまでどれだけ周囲が勧めても、女には食指を動かもしなかった王。同性愛者とまで囁かれた王がどうして、今、この時期になって初めて女性を寝所に招いたのか一。

それを疑問に思う者がいて、当然ではあった。そして、その問いに対する応えはまた当然、一大妃さまに対する挑戦、もしくは反抗。

と映ったのだ。

そのような噂が広まれば、必然的に大妃派の大臣や大妃その人からの風当たりが強くなることをまだその時、ファソンもカンでさえもが予測はできていなかった。

支度を整えたファソンを取り囲むようにして、女官たちの一団が国王の寝所へと導く。大殿に入る前に見上げた夜空には、十三夜のやや欠けた月が静かにファソンを見下ろしていた。

長い廊下を先導の女官が掲げる雪洞の明かりを頼りに進み、見覚えのある扉の前で止まる。

そこには金尚宮や沈内官長、大勢の内官や女官が待ち受けていた。キム尚宮はざっと形式的にファソンの身体を寝衣の上から調べただけで、身体検査はすぐに終わった。

「首尾良く事が運ぶようにお祈りしております。何事も殿下にお任せして下さいませ」

今夜から、ファソンは王の側室となる。これまではキム尚宮の方が格上であったが、明日の朝を境にファソンが主筋になるのだ。キム尚宮の物言いが丁重になるのは当然でもあった。

王が信頼するだけあり、キム尚宮は懐も広く情理を備えた女性だ。はっきりとした素性の知れぬファソンを快く預かり、厳しくも優しく女官としての作法を教え込んでくれた。

ファソンは感謝を込めてキム尚宮に頭を下げた。両側から女官二人が扉を開き、ファソンはその隙間から身をすべり込ませる。

背後で扉が閉まった。ここにはかつて一度だけ来たことがある。女官になってまもない日、金尚宮に薬湯一実は生姜湯を病臥している王に運ぶように命じられたときのことだ。

あの日からまだひと月半ほどしか経っていないというのに、何か随分と昔のような気がする。相変わらず大きな寝台が奥に見え、王はといえば、傍らの丸卓の前、椅子に座り、手酌で酒を飲んでいて。

「やあ」

ファソンを認めると、カンはいつものように屈託ない笑みを浮かべた。ファソンはいつもと変わらない様子の彼にどこかホッとして、近づく。

「何か待ちきれなくて、先に飲み始めてしまった」

見れば、カンの眼許はうっすらと染まっていた。彼も白一色の夜着姿である。

「支度に時間がかかりすぎたのね」

何しろ王の側に侍る初めての女が現れたということもあり、尚宮や女官たちは張り切って、今宵、玉の輿に昇る世にも幸せな女官、の支度を整えた。

ファソンが立ったままなのに改めて気付いたらしく、カンが笑った。

「ああ、ごめん。座って」

どう？ と、盃を差し出され、ファソンは首を振った。

「あまりお酒は飲んだことがないの。私がやるわ」

ファソンは卓上の酒器を手にし、カンの差し出した盃に注ぐ。

「良いね、こういうのは。何だか夢みたいだ。ファソンとこうして一緒に夜を過ごすことができるだなんて」

それから後もカンは盃を重ねた。干せばまた差し出してくるので、注がないわけにはゆかない。用意された酒器は三つ、二つが空になってもまだカンは酒が欲しいとねだった。

ファソンが注ごうとしないので、焦れた彼はファソンの手から酒器を奪おうとする。彼女は酒器を奪い取ったカンの手を上からやんわりと押さえた。

「飲み過ぎよ」

「そうかな？」

カンは酒を飲んでいる間中、他愛ないことを喋っていた。いつもはどちらかといえば無口で、喋るのは専らファソンの方なのに、今夜のカンはどうもいつもと違って見えるように見えた。

「あまりお酒には強くないんでしょ、カン」

眼許を染めているカンはいつになく男の色香を漂わせている。美しい男だけに、酔いでほんのりと白皙の美貌を染めている様は凄艶ともいえた。

「ふふ、バレたか」

外見とは裏腹に悪戯を見つけられた子どものようなあどけなさで言い、立ち上がった。カンの身体が一瞬、ふらつく。

「危ないわ、気を付けて」

カンの身体を支え、苦勞して寢台へと連れてゆく。大柄な彼と小柄なファソンでは身長差がありすぎるので、支えて歩くのもひと苦勞だ。

「おっと」

カンがおどけた声を発し、それを合図とするかのように二人は均衡を崩し、もつれあうようにして寢台に倒れ込んだ。

寢台の上には濃厚な香りを放つ深紅の花びらが一面埋め尽くすかのように散り敷かれている。膚に纏った香油の匂いに加え、寢台から立ち上る花の香りに、ファソンはボウと神経が痺れ、まるで飲んでもいない酒に酔ったかのような軽い酩酊状態になりそうだ。

気が付けば、カンはファソンを逞しい腕で囲い込んでいた。ぬばたまの闇よりもなおも深い瞳が射貫くように見つめている。

「ファソン」

ツキリとした痛みが首筋に走った。いきなり首筋に口づけられ、ファソンは固まった。痛みを憶えたからには、ただ口付けただけではなく、軽く咬まれたのかもしれない。

幸か不幸か、この衝撃でファソンの茫洋とした意識は急速に現実に呼び覚まされた。

「止めて。見せかけだけの結婚だと約束したじゃない」

ファソンの抗議に、カンがふっと謎めいた微笑を刻む。

「見せかけだけじゃない、君が望むなら本物の結婚したって良いんだ」

カンはなおも彼女を見つめる。寢台の枕許では大きな蠟燭が赤々と燃えている。黄金色の蠟燭には国王の象徴である龍がくっきりと刻まれていた。朝鮮国では古(いにしえ)より王は龍の化身とされる。

淡い光を投げかける灯火が、王の端正な横顔を照らし、ファソンを見下ろす双眸に微妙な陰影を刻んでいた。

張りつめた沈黙に押し潰されそうになった時、ファソンは消え入るような声音で応えた。

「一望まないわ」

カンは更にそのままの体勢で見下ろしていたが、やがて、ずっとファソンから離れた。

ファソンは急いで身を起こして立ち上がろうとする。と、すかさず背後から抱きしめられた。

カンとぴったりと身体を密着させた状態だ。ファソンは再び身を強ばらせた。

「せめて、これくらいは我慢してくれ。そなたをこの腕に抱くくらいは許して欲しい」

カンはファソンの腰に両手を回し、髪にそっと唇を押し当てる。

カンの鼓動が重ねた身体越しに伝わってきて、同じように高まった我が身の鼓動もファソンの耳に異様に大きく響いた。二つの鼓動は烈しく高らかに重なり合っている。

カンの手がそろりと伸び、ファソンの艶やかな髪にふれた。

「この簪、初夜に付けてきてくれたんだ。セオクから君がああ簪を付けたいと言っていると知らされた時、私はとても嬉しかったんだ。私と同じように、ファソンもこの夜を特別なものだと思ってくれていると期待をしてしまった」

「カン、その初夜という言い方は」

本当の結婚ではないのだからと釘を刺そうとすると、カンが「シッ、と止めた。

「ファソンにとっては、そうなのかもしれない。さりながら、私にとっては特別な夜なんだ。特別な女と迎える初めての夜だから」

「ーっ」

息を呑んだファソンに、カンの掠れた声が囁いた。

「ー好きだ。ファソン。たとえファソンが私を好きでなくても、受け容れてくれなくても、それはそれで良い。無理に君の身体を奪って、それで永遠に心を失いたくはないんだ」

彼はそっとファソンの髪のひとつを掬い、口付けた。刹那、走った鋭い感覚を何と例えれば良いのか。ファソンにはまだその時、それを言い表す言葉を持たなかった。

髪の上に触れられただけなのに、直接膚を愛撫されかたのような、危うい熱。小さな焔が髪先に点り、それが大き焔となり全身にひろがって、身体ごと彼から与えられた熱に灼き尽くされるかのようだ。

一好きだ。

彼は確かにそう言った。けれど、彼の気持ちを知って両思いだからと判っても、事態は何も変わりはない。

彼を受け容れることは容易いが、その先はどうなる？ 彼は王だから、いずれ正妃を迎えることは判っている。その時、自分はどんな顔をして彼の側にいれば良い？

「好きだ」と熱く囁いたその同じ口で別の女性を口説き、その腕に抱くのを側で見ているのはあまりにも辛い。

そう、王さまを好きになるというのは、そういうことだった。けして大好きな男のただ一人の女になることはできないのだ。後宮という美しい花が咲き誇る庭園で、たまに気まぐれに訪れる蝶を待つだけ。

蝶が飽きれば、花は後はうち捨てられ、ひっそりと咲いて散るしかない。それが、後宮で生きる女の宿命なのだ。

愛のない男ならば、他の女を抱くのを側で黙って見るのも耐えられようが、彼を愛していればこそ尚更、側で見ているのは耐えられないし辛い。

いつしかカンが眠ってしまったようだった。

「私の大切な吾子はどこから来た。吾子は天からやって来た。吾子はどんな金銀財宝よりも大切な宝物。吾子よ、私の吾子よ、天から下された大切な宝物よ」

ファソンは歌う。カンがあの日、初めて彼女がここに脚を踏み入れた日、歌って欲しいと懇願した子守歌を。

一度歌い終えても、何度も何度も繰り返し歌った。歌い続けるファソンの白い頬にひと筋の涙がつたい落ちている。

ファソンは泣きながら、いつまでも歌い続けた。孤独な愛する男がせめて夢の中では安らげることができるようにと、心をこめて歌った。

初めて寝所に召された翌朝、ファソンは一つの殿舎を与えられた。これまではキム尚宮の殿舎で女官として一室を与えられていたのが、独立した殿舎の新たな主人となったのだ。

更に王命によって、側室として位階が与えられた。ファソンに与えられたのは「昭媛(ソウオン)」という地位である。側室には最下位の「淑媛(スクウォン)」から上は「嬪(ヒン)」まで様々な階級がある。嬪は側室の中でも最高位であり、正室たる中殿、王妃に準ずる高い地位だ。

今回、ファソンに与えられたのは昭媛といい、最下位の淑媛よりは一階級上であった。しかし、このことによって、王の母朴大妃の怒りに油を注ぐ形になってしまった。

元々、大妃は王が独断で迎えた初めての側室について容認どころか、むしろ猛反対していたのだ。更にここに至り、その新入りに与える位階が淑媛ではなく昭媛であるというそのことが、大妃の逆鱗に触れた。

一何という我が儘で未恐ろしいおなごか。お若い主上(チユサン)を我が意のままに操る妖婦めが。さぞかし寝所で主上を手練手管を尽くして、かき口説いたのであろうて。

大妃の怒りは凄まじかった。

一女官が王に見初められて側室になる場合、長い後宮の歴史を紐解いても、まずは一番下の淑媛を与えるのが妥当ではないか。聞けば、その娘、父親は両班とはいえ、名乗りもできぬほど逼塞した家門の下級両班だそうな。そのような娘をいきなり昭媛にするなど、言語道断。同じ側室でも、こたびの選抜試験を受けて入宮する令嬢とは格が違うことを示さねばならぬというに、主上は何を血迷われたのか。

確かに大妃の意見にも理はあった。女官に王の手が付いて後宮となる場合、淑媛もしくは側室でもない`特別尚宮、を起点とする先例が多かったのは事実である。特別尚宮というのは`承恩尚宮、ともいい、仕事を持つ一般の尚宮とは違う。要するに側室としての位階は賜れなかったが、王の寝所に召されて伽を務める女官を一般の尚宮と区別して`特別尚宮、と呼んでいる。

`承恩、とは王の恩寵を承けたという意味だ。我が生みし王子が王となり、王の母として嬪にまで上り詰めた側室でさえ、女官出身であれば特別尚宮から出発して嬪まで進んだ場合が多い。

今回のように公募の選抜試験で勝ち残り最終選考まで進んだ令嬢の場合、いきなり高位の側室に任ぜられることも少なくはないが、それはまた別格なのである。

そして、大妃の邪推はまた他の多くの人々の思惑と大差なかった。

一新入りの陳昭媛が夜毎、国王殿下をご寝所で誑かしているような。

一何でも病身の父親や能なしの兄を官職につけて欲しいと泣いてねだっているというぞ。

もちろん、事実無根の心ない噂だし、どこでどう間違っても、そんな会話を聞でした憶えもないファソンだ。

大体、`初夜、を済ませた後、毎夜のように共寝をしているといっても、ファソンはただ王の寝台でカンと枕を並べて眠るだけなのだ。話はたくさんするけれど、それは大方はその日一日、逢わない間に起こった出来事ばかりで、極めて他愛ないものばかりだった。

恐らくは大妃殿の女官辺りが故意に流した悪意のある噂というより誹謗中傷に相違なかった。

悪は千里を走るという。`妖婦陳昭媛、の噂は瞬く間に野火が枯れ野にひろがるように後宮といわず宮殿中にひろがった。

そんなある日の昼下がり、ファソンはカンに伴われ、ある場所に連れられていった。

「ねえ、カン。どこに案内してくれるの？」

ファソンはカンに無邪気に訊ねた。ファソンとて自分をめぐる酷い噂を知らぬわけではないだろうのに、いつも明るく笑っているのが余計に王の心をファソンに惹きつける。

ファソンはむろん、`妖婦、と罵られていることは知っていた。どうして、そんな噂がひろまってしまったのかは皆目判らないけれど、自分は何も天に恥じるようなことはしていない。ゆえに、毅然としていれば、いずれ心ない噂も消えてゆくのではないかと思っている。

一ファソン。天が遠くにあるからと甘く見るなという諺を忘れてはいけないよ。自分がなした行いは良くも悪くも必ず巡り巡って自分に返ってくる。人は良い行いをすれば必ずから良き運を招き、悪き行いをすれば不運を招く。誰が見ていなくても知らずとも、天だけは見ているのだから。

らね。

幼い頃、父ミヨンソはファソンを膝に乗せて、そんなことを語り聞かせた。そのときから、ファソンは「天に恥じる行いだけはすまい、と自らを固く戒めてきたのだ。

ゆえに、今回の騒動も刻が経てば鎮まるに違いない—というのがファソンの考えであった。

「お父さま、どうしているかしら。心配性のお母さまはまたヒステリーを起こして泣いてばかりいるかも。」

家を出て二ヶ月近くが経とうとしている。最近、流石にファソンも実家や両親のことを思い出すことが多くなってきた。

「さあ、一体、どこだろうな」

カンには彼女がどこか愁い顔なのに気付いているようで、しっかりと繋ぎ合わせたファソンの手に力をこめた。

「着いたぞ」

カンは袖から鍵束を取り出し、その中の一つを眼の前の建物の扉に差し込んだ。ここは広大な宮殿の敷地内でも最奥部に位置する。

鍵穴に差し込んだ鍵を回すと、難なく扉が開いた。わずかに軋んだ音を立てて開いた扉を押し、カンが先に入る。その後から、ファソンもついて入った。

「カン、ここは書庫ね？」

ファソンは思わず歓声を上げていた。

「うん、清国や諸外国から入ってきた貴重な外国の本などはほぼすべてここに揃っているはずだ」

ファソンは眼を輝かせながら、早速、並んだ書棚を巡った。王宮には誰でも立ち入ることのできる書庫があるが、ここは違う。国王、王妃、更には王族、特別に許可を得た者でなければ立ち入りはできない場所なのだ。

さして広くはない空間に縦長の書架が幾つも並んでいる。書架には貴重な蔵書が整然と陳列されていた。

ファソンはその一つ一つの書架を時間をかけてゆっくりと見て回る。古い本の匂いが立ちこめた空間で深呼吸すると、何だか生き返ったような心もちになった。

「あ、見て。`忠孝明道、もあるわ」

最後尾の書架までいったファソンが叫び、カンもやって来た。

「どれどれ」

彼は上背があるので、ファソンのすぐ背後に立ち、難なく確認したようである。

「見ても構わない？」

窺うように見上げられ、カンの白い面がうっすらと染まった。

「もちろんだ。ファソンは私の妻なのだから、れきとした王族だ。ここは王族は立ち入り自由だし、好きなだけ見ると良い」

許可を得たファソンは伸び上がった。`忠孝明道、は書架のいちばん上の棚にあった。ファソンでは、どうしても届かない。

「よしよし、待って。今、取ってあげるから」

背後でひそやかな笑い声が聞こえ、カンがお目当ての本を楽々と取って渡してくれる。

「ありがと」

ファソンは熱心に`忠孝明道、を読みふけた。実際、こんな生き生きとしたファソンを見る

のはカンが初めてだった。宮殿に連れてきてからというもの、ファソンはどこか元気がなく打ち沈んでいるようなところがあった。

今日のファソンは彼が初めて下町で出逢ったときの彼女を思い出させる。

「この娘はつくづく本が好きなのだな。」

「本の虫、というあだ名はあながち間違っていないということか。」

こんなに歓ぶのを見られるのなら、度々、ここに連れてきてもいいし、何ならファソンにこの書庫の合い鍵を与えてもいいだろう。合い鍵を与えたからといって、勝手に貴重な蔵書を持ち出したり私したりするような娘ではない。「王の寵愛」に甘えるようなファソンではないとカンはよく判っていた。

優しくて健気で、泣き虫で、いざとなったら自分の信ずる道をはむしゃらに突き進む頑固な少女。欲など一切なく、ましてや他人を陥れたりすることなど、考えたこともないだろう。

カンがファソンを抱かないのは、彼女の人柄によるところも大きい。もちろん、初夜に言ったとおり、一時彼女の身体を欲しいままにして、永遠に彼女の心と信頼を失うのは避けたい。そういう理由もある。けれど、いちばんの理由は、ファソンが後宮という伏魔殿で生きてゆくには優しすぎるからということもあった。

ファソンという花はきっと後宮では萎れてしまうだろう。彼女の生き生きとした魅力は恐らく、宮殿ではなく市井でこそ発揮できるものだ。多くの女たちが王の寵愛をめぐる競争を競い、時にはライバルを策略を巡らせて陥れたりする後宮という魔窟に彼女を閉じ込めてしまうには忍びない。

だからこそ、彼はよりいっそうファソンという少女に魅了される。

「ねえ、カン」

そこでカンの想いは中断された。当のファソンが輝く瞳で彼を一心に見上げている。こうなると、二十一歳の国王はもう何も考えられなくなる。ファソンが「若い王を骨抜きにしている」という噂はある意味では正しいといえるかもしれない。

一方、ファソンは、どうしてもカンに伝えたいことがあった。

「同じ「忠孝明道」なのに、私の持っているのと所々、違っている部分があるのよ。どちらが正しいのかしら」

カンは首を捻った。

「そうなのか。私は恥ずかしいが、まだそこまで熟読してないからな。多分、ここの書庫にある本は清国から渡ってきた原本、もしくは原本に近いものだろう。ならば、市井の書店で入手したものよりは、宮殿の書庫の方がより正しいのではないか」

ファソンは弾んだ声で応じた。

「そうかもしれないわね。曹さんの本屋にあった本は、誰かが書き写して更に書き写したものだという可能性が高いもの。その点、宮殿の書庫はあなたの言うとおりに、清国から伝わったものがそのまま保管されていると思うから、きっと、こちらが原本により近いのね！」

ファソンは興奮した面持ちで続けた。

「私、違っている部分を憶えられるだけ憶えて帰るわ」

カンが笑った。

「必要なら、殿舎に持って帰れば良い」

「あら、それは駄目よ。ここの書庫の本は全部禁帯出なんでしょう。持ち出し禁止の本なのに」

「王命があれば、例外的に持ち出せることになっている。私が許可するゆえ」

ファソンは真顔で言った。

「それは止めておくわ。こんな言葉は使いたくないんだけど」

ファソンは言い淀み、続けた。

「`寵愛、に甘えるようなことはしたくないの。皆はカンが私に甘すぎると言ってるのよね。」

もし、私がここで持ち出し禁止の本を持って帰ったりしたら、自分で噂を肯定するようものでしょう」

そのひと言に、カンはハッとした表情になった。

「確かに、そなたの言うとおりで。私が浅はかだった」

ファソンは微笑んだ。

「そんなことはないわ。カンはずっと私に優しく、気遣ってくれるもの。ありがたいと思ってる。カンが行き場のない私を助けてくれたように、私もできることは知れているけれど、カンの役に立ちたいわ。私たち、恋人や夫婦にはなれなくても、友達にはなれるわよね」

「友達、か」

カンは泣き笑いの顔で言った。

「今度、案内して貰うときは筆記用具を持って来るわ。ここで書き写すのなら、問題はないでしょ」

「そうだな。では、そのときまで我慢して、今日は憶えきれないだけ憶えて帰ってくれ」

カンの言葉に、ファソンは笑顔で頷いた。

「そうするわ」

ところで、と、ファソンはカンを見た。

「最近はずっと『春香伝』の続きは書いているの？」

初夜以来、殆ど同じ寝台で眠っている二人だ。以前、カンは執筆は夜にやると話していたが、このところ、彼はファソンと枕を並べて眠るだけで、特に執筆をしている気配はない。

実は、ファソンはそのことがずっと気になっていた。最初に出逢った時、彼は『春香伝』の続きを書きたいのだと熱く語っていた。彼にはその夢を諦めて欲しくないのだ。

ファソンの問いに、カンは黙り込んだ。ややあって、照れたように笑う。ファソンの大好きな少年のような笑顔に、鼓動が速くなる。

「ちゃんと書いているさ。夜は書けないから、昼間にちょっと政務の合間に」

「まあ、駄目じゃない。お仕事をするときにはちゃんと仕事に集中しなければ」

「爺の眼が光っているから、そこまではできないんだよ。上に上奏書に乗せて、下に書きかけの原稿を置いて書くんだ。で、爺が入ってきたら、すぐに上奏書を読むふりをする」

身振り手振りを入れて得意げに話すカンは、まるで親の眼を盗んで勉強中に悪さをする子どものようである。

ファソンは思わず、クスリと笑みを零していた。

「いけないことではあるけど、カンらしいわ」

沈内官に隠れて必死で小説を書いている王の姿が眼に浮かぶようで、笑えてくる。が、ファソンは表情を引き締めた。

「カン。私のことなら、気にしなくて良いのよ。私も一日あなたに逢えなくて淋しいし、ゆっくり話せるのは夜だけだから愉しみにしているけれど。あなたの執筆の邪魔をしているのなら、淋しいのも我慢するわ」

暗に寝所に召す回数を減らして欲しいと伝えれば、カンは慌てた。

「いやだ。私だってファソンに逢えない日中は、とても長くて淋しいんだ。夜だけしか逢えないゆえ、夜がもっと長く続けば良いのと思うことがある」

「黄真伊(ファン・ジニ)の歌にそんなものがあつたわね」

カンは無言で頷き、歌うように続けた。

「あなたに逢えない独り寝の長い夜を切りとって、あなたに漸く逢えた短い夜に縫い付けたい」
久方ぶりに逢えた恋人と過ごす夜があまりに短いと嘆く女性の切ない恋心を歌ったものだ。ゝ
天下の名妓、と今もその名を語り継がれる実在の妓生ファン・ジニリの詠んだ詩である。

「一人で過ごす夜はとても長いのに、二人で過ごす夜は呆気ないほど速く過ぎてゆく。だから、一人で過ごす長い夜を切りとって、あなたと逢う短い夜に縫い付けて少しでも長くしたい」
ファソンも呟き、溜息を零した。

「今なら、ファン・ジニの気持ちが判るような気がするの」

そこで、ファソンは我に返った。我ながら、何という大胆な科白を口にしてしまったのだろう！

これではゝ好き、と直截に告白するより、よほど気持ちが丸分かりではないか。

しかし、カンにはファソンの気持ちよりは、切々とした恋情を綴った詩の内容により関心を向けているようだ。

どうやら、カンにはファソンの恋心に気付かなかったようである。そのことに、ホッとしながらもどこかで落胆している自分があることを、ファソンは滑稽にも哀しくも感じていた。

ファソンはわざと明るい声で告げた。

「じゃあ、とりあえずゝ忠孝明道、は元の場所に戻しておくわね」

つま先立ち書架の最上段に本を戻そうとした時、よろめいた。やはり、わずかに手が届かなかったのだ。

「危ないっ」

カンが咄嗟にファソンの華奢な身体を受け止めてくれなければ、彼女は床にまともに衝突していたはずだ。

背中に回された彼の手が熱い。丁度、二人は抱き合うような格好になっている。

「放して」

やや掠れた声しか出ない。見上げれば、愕くほどにカンの顔が近くにあった。

「いやだ。放したくない」

一何て綺麗な男なのかしら。

ファソンはカンの美しい面を見つめる。綺麗なひとだとは思っていたけれど、つくづく美しい男だと改めて思った。

綺麗に弧を描く眉、秀でた額から筋の通った鼻梁、わずかに切れ上がった眼(まなこ)、薄く形の良い唇。

よく憶えておこう。いつか、彼の許を去る日が来ても、ずっと逢えなくなっても、彼の顔をいつまでも憶えておけるように、綺麗な面影を心に刻みつけておこう。

でも、大丈夫だろうか。半日、一日逢えないだけで、こんなにも淋しくて辛いのに、彼にずっと逢えなくなると、私は生きてゆけるの？

そして、彼に逢えなくなる日は遠くない将来、必ず来る。ファソンは彼と約束したのだ。中殿選びが終われば、彼女はカンの許を去る、と。

何故、あんな約束をしてしまったのか。どうせなら、中殿選びが終わっても、彼が正妃を娶る

までは側にいると言えば良かったのに。

そんなことを考える未練な自分がいやだ。

カンの美しい面が迫ってくる。唇が重なる予感がして、ファソンはそっと眼を閉じた。

「友達でも良い。何でも良いから、ファソンを手放したくない。好きだ」

しっとり重ねられた唇はすぐに離れた。

ファソンの眼に大粒の涙が溢れる。

「ファソンはそんなに私を嫌い？ 口付けられただけで泣くほど嫌なのか？」

カンの声音には傷ついたような響きがある。ファソンは夢中で首を振った。

彼への「好き」が、想いが溢れて言葉になにならない。ただ今は、自分も彼の広い背中に手を回して縋り付くしか、ファソンにはできなかった。

「好きよ。私もあなたが大好きよ、カン。でも、あなたは私には遠すぎる男だわ。」

この瞬間、ファソンは国王を愛してしまった自分の悲哀を嫌というほど悟った。

書庫で過ごした時間は思いの外、長かったようである。昼過ぎに来たはずなのに、書庫を出たときは既に長い夏の陽は傾いていた。

宮殿の幾重にも連なる壮麗な薨が残照に照らされ、黄金色に輝いている。そのはるか上の空の高みをねぐらにでも急ぐものか、数羽の鳥が群れを成して飛んでいった。

「また、近い中にそなたを連れてこよう。それまででも、来たいと思ったら、私に言えば良い。遠慮することはないんだぞ？ どうも、も、そなたは慎ましすぎる」

カンの優しい言葉に、ファソンはまだ涙の雫を宿した瞳でカンを見上げた。カンが眩しげに眼を細めたのは夕陽のせいだけではないのを、恐らくファソンは知ることないだろう。

「そんなに哀しそうな表情をするな。そなたが泣くと、私まで哀しくなる」

カンが笑い、人差し指でファソンの涙を拭いた。ファソンははにかんだように微笑む。

泣くなと言われて、泣くまいとしているのが判る。人眼もはばかりず、抱きしめたいほど可愛いと、カンは頬を緩めた。

二人は顔を見合わせ、微笑み合った。一緒にいる時間が多くなるにつれ、不思議なことに、会話はなくても二人でいることそのものが何より安らげる時間となっていた。

二人だけの時間に闖入者が現れたのは、そんな最中であつた。ファソンは違和感を感じ、傍らのカンを見た。

カンは凍り付いたように動かない。訝しげに彼を見つめ、その視線の先を辿ったファソンの眼に、一人の女性が映った。

美しい女(ひと)であつた。年の頃はまだ四十前、恐らくはファソンの母と同じくらいだろう。臍長けたその女性は愕くほど顔立ちがカンと似ていた。その豪華な身なり、彼に酷似した容貌から、この女性が朴大妃その人であることはファソンにも察しがついた。

女性の背後には数人の尚宮や女官が控えている。

「これは主上」

大妃は手のひらを口許に添え、微笑んだ。美しく整え染められた爪がかいま見える。細く白い指に填められた幾つもの玉の指輪が陽光に燦然と燦めいた。

「母上さまにはご機嫌麗しく何よりに存じます」

カンは実の母に対するとは思えないほど、他人行儀に恭しく頭を下げた。血の通った母と息子なら、無理にここまで冷淡にならなくても良いのではないかと、カンに対して思ったほどだ。これでは大妃が気の毒だと思つたくらいである。

だが、その認識が甘すぎたとなつてファソンは直に知ることになる。

「母上、申し遅れましたが、この者が」

カンが傍らのファソンを紹介しようとする、大妃は手で制した。が、カンは知らぬ顔で続ける。

「この者は新たに我が後宮に迎えた昭媛でございます」

カンにわずかに背を押され、ファソンはおずおずと前に進み出た。大妃の前で両手を組み、拝礼を行う。

だが、拝礼の間、大妃はずっとあらぬ方を見ていた。実のところ、ファソンはカンと初めて夜を過ごした翌朝、大妃殿に挨拶に行ったのである。が、頭痛がするとのことで逢つては貰えず、結局、十日続けて挨拶に通つても、対面は叶わなかった。

大妃がカンを見た。相変わらず、ファソンの方には視線を合わせようとしぬ。

「そのような恥を知らぬ者を王族とも嫁とも認めるつもりはない」

「母上！」

カンの声が大きくなった。

「大体」

大妃が初めてファソンを見た。睨(ね)めつけるような視線に、身が竦むようだ。ファソンはあま

りにもあからさまな敵意に膚が粟立った。朝鮮開国以来の功臣の名家に生まれ、大切に育てられた令嬢育ちのファソンは生まれてこのかた、ここまでの凄まじい憎しみを向けられたことはなかった。

「そなたらは、あの書庫で何をしておったのだ？ 書庫は貴重な書物を保管する神聖な場所でもある。そのような場所で昼日中から、淫らな行いに耽るとは許し難い。そなたも下級とはいえ、両班の娘なら、恥を知るが良い」

あまりの言葉に、ファソンは唇を噛んだ。無意識に強く噛んだため、口中に鉄錆びた味が苦くひろがる。

「大妃さま（テービマーマ）。それは誤解です。私は天に誓って、そのような恥ずべき行いは致しておりません」

せめてこれくらいは許されるだろう。ファソンが言い終えた時、ピシッと空気を打つような鋭い音が響き渡った。

「一」

ファソンは思わず手のひらで頬を押さえた。両親にでさえ、ぶたれたことはない。厳しい父も口うるさい母も、ファソンを叱ることはあっても、手を上げたことはなかった。

「母上(オバママ)」

カンの顔色が瞬時に変わった。

「そなたごとき小娘がこの大妃である私に直接もの申すとは何という身の程知らずな。目上の者に無闇に話しかけてはならぬと父母から教えられなかったのか！ もっとも、このような淫売を生んで育てるような親の賤なぞ、たかが知れておろうかの」

ファソンは膝前で組み合わせた両手を白くなるほど握りしめた。

「あんまりです、大妃さま」

「淫売を淫売と申して何が悪い。そなたがやっておることは主上に色目を使い媚を売る、妓生がやっておることと同じではないか。両班の息女が色町の遊び女と同じことをしておるというのだから、この国ももう世も末であろう」

涙が、溢れた。ここまで他人に悪し様に言われたのは初めてだ。何故、自分がここまで貶められねばならない？ しかも、自分だけではなく、両親のことまで。

「私のことはまだよろしいのです。さりながら、何の拘わりもなき父母まで悪し様に仰せになるのは止めて下さいませ」

「生意気なッ」

またピシリと、乾いた音が響いた。ファソンは打たれた両頬にひりつく痛みを憶えながら、大粒の涙を流した。

ついに、カンが切れた。

「母上っ、止めて下さい。昭媛にどのような罪咎があって、このような酷いことをなさるのですか！」

大妃がキッとカンを睨みつけた。

「大体、そなたが悪いのです。このような小娘にのぼせ上がってしまわれ、後先も考えず側室に

するなど。今がどのような大切なときなのか、主上もお判りでしょう」

息子に諫められ、大妃の怒りはますます煽られたようだ。当然ながら、その怒りはファソンに向けられた。

「ええい、お前が悪いのだ、お前が王宮に来てから、主上は狂ってしまわれた。お前さえ、主上の前に現れなければ良かったのだ。そなたがすべての禍を招く元凶に違いない」

今度はファソンも、大妃の振り上げた手をよけようとした。しかし、その手の先が頬を掠め、ファソンの白い頬には糸ほどの細い傷ができてしまった。雪膚にくっきりと浮かび上がる鮮やかな紅い傷に、カンが悲鳴を上げた。

「たとえ母上だとして、もう許せぬ」

カンの握りしめた拳が戦慄していた。それを見た大妃がヒステリックな笑い声を上げた。

「何と、真、その妖婦に惑わされてしまいましたか、主上。実の母を、そなたを腹を痛めて生みしこの母を手にかけるおつもりか！」

ファソンは信じられない想いでカンを見た。いつも穏やかな彼がここまで怒りを露わにしたのを初めて見た。だが、このままでは本当に大妃に殴りかかっていきそうな勢いだ。

ファソンはその場に跪き、カンに取り縋った。

「殿下、お願いでございます。どうか、お怒りをお鎮め下さい。すべては私が至らず、大妃さまのお怒りを招いてしまったゆえなのです。ゆえに、この場はどうか」

自分などのためにカンと大妃の母子仲に亀裂が入ってしまったとしたら一。それはあまりに哀しいことだ。

「殿下、殿下。お願いです」

泣きながら訴えるファソンを、カンはやるせなさげに見つめた。

大妃がせせら笑った。

「大方はそのように夜毎、お閨でお若い主上に泣き縋り、主上を意のままに操っておるのであろう、女狐め」

「母上、この上、我が妻を愚弄するのは、たとえ母上とて許せませぬぞ」

カンの声音は先刻と異なり、どこまでも静謐だった。普段感情を表に出さない人というのは、怒りが深ければ深いほど、かえって静謐さをその身に纏うものだ。

恐らく大妃はそれを知らないのだろう。

「何が妻だ、聞いて呆れる。先刻も申したであろう、私は大妃として、内命婦の頂点に立つ者として、そなたを王族とも嫁とも認めるつもりはない。さよう心得よ」

「母上(オバママ)ア」

カンが吠えた。まさに、虎の一瞬の咆哮。その叫びは大地と空を揺るがせ、聞く者を震え上がらせるには十分だった。

大妃に付き従う尚宮と二人の女官はもう顔面蒼白で震えている。

「大妃さま、ここはひとまず大妃殿に戻った方が」

尚宮が小声で囁くのに、大妃はそれでもまだファソンを睨みつけた。

「大切な国婚を前に、泥棒猫のような娘の色香に血迷ってしまわれるとは我が息子ながら、情けなや」

カンは大妃ではなく、その背後の尚宮に声をかけた。

「馬尚宮」

「は、はい。殿下」

「大妃さまはかなり御気色が悪いようだ。しばらくは大妃殿でご静養頂くことにする。朕(わたし)の許可があるまで、大妃殿を出られることはまかり成らず。これは王命と心得よ」

「承りましてございます」

気の毒に、四十ほどの尚宮は震えながら頭を下げ、女官二人に目配せした。

「さ、大妃さま。参りましょう」

馬尚宮が声をかけるのを合図に、女官二人が大妃の肩を両脇から抱えるように抱く。

「主上、主上はこの母を大妃殿に監禁なさるおつもりか！ たかが妖婦に惑わされて、そなたを生んだ母を蔑ろにすると」

大妃は髪を振り乱し、後ろを振り返りながらわめき散らしながらも、女官らに拘束されて大妃殿に引き返していった。

大妃一行が見えなくなった次の瞬間、ファソンの身体はふわりと逞しい腕に抱きしめられた。

「済まぬ」

カンがファソンの髪を撫でた。

「まさか母上がそなたにこのような酷い所業を致すとは考えてもみなかった。私が甘かった」

「うっ、えっ」

このときばかりはファソンも我慢の限界をとうに超えていた。彼女はカンの腕に抱かれて、泣きじゃくった。

カンはファソンが泣き止むまで辛抱強くずっと髪を撫で続けてくれた。

夜になった。

ファソンはいつものように王の寝所に召された。今、二人は寝台に腰掛けている。

「痛むか？」

カンはファソンの頬にそっと人差し指で触れた。

「痕は残らぬとは思うが」

ファソンの白い頬にはまだ細く紅い筋がくっきりと残っている。

ファソンは微笑んだ。

「大丈夫、こんなのは、かすり傷よ。舐めておけば治るわ」

その言葉に、カンが吹き出す。

「いかにも、そなたらしいな」

しかし、次には真顔で言う。

「いやいや、可愛いその顔に少しでも傷痕が残っては大変だ」

彼は丸卓の上に乗った円い小さな器を取り上げた。器は陶製で、蓋には藍色で牡丹と蝶が描き込まれている。カンは蓋を開け、器に入った軟膏を指で掬った。

「少し痛むかもしれないが、我慢してくれ」

カンは軟膏をファソンの傷に丁寧に塗った。確かに触れられれば痛む。だが、そこまで心配するほどではない。

それでもカンは軟膏を何度かに分けて丹念に塗ってくれた。

「これはヒビやあかぎれにも効くのだ。今日の騒動を聞いて、セオクが届けてくれた。むろん、切り傷、擦り傷にもよく聞くゆえ、治りも早いだろう」

「金尚宮さまが下さったの？」

「ああ。私が幼い頃にも転んで怪我をする度に、よく塗ってくれた」

どこか遠い瞳で懐かしげに語るカンの横顔には、拭いがたい翳りが落ちていた。もしかしたら、彼が思い出す遠き幼い日の記憶には、実の母である大妃はいないのかもしれない。

それは今日の二人を見ても、自ずと知れることであった。ただ単にファソンが原因で仲違いをしたというわけではなく、二人の間に生じた溝はもっと根深い部分から始まっているように思え

てならなかったのだ。

部外者のファソンですら、それを微妙に感じ取ったのだから、当事者たちは更にしっかりと自覚しているに相違ない。

ファソンはわざと明るい声を出した。

「カンはやんちゃ坊主だったのね？　きっと金尚宮さまや沈内官を困らせてばかりいたのでしょう」

「いまだに家出するお転婆な`本の虫、姫には言われたくない科白だな」

「それは言わないで」

ファソンは身を縮めて言い、カンはそれを見て大笑いした。

が、ふとした拍子に彼は呟いた。

「セオクや爺がいなければ、私はとっくに気が狂っていたかもしれないな」

「カンー」

ファソンは何を言うこともできず、切なくカンを見た。

「おかしな家族だった。父も母も健在だというのに、父は母以外の女一側室たちの許に入り浸りで、妻と息子を顧みもしない。母は母で良人に振り向かれぬ淋しさを美しい衣装や宝飾品で身を飾ることで忘れようとした。普段は自分に息子がいることなど忘れ果てている癖に、ふとした拍子に思い出すんだ。そして、狂ったように息子を溺愛した」

カンが自嘲気味に笑った。

「ひとしきり息子を構った後は、また私のことなど思い出もしない。気まぐれな母の愛情をそれでも子どもだった私は待っていたよ。今度はいつ母の笑顔を見られるのか、そればかり考えていた。そんな私にごく普通の愛情を与え、それがどういうものかを教えてくれたのが爺とセオクだった。私にとっては実の両親よりも爺とセオクが身近で、本当の親のようなものだ」

「昼間のことはカン、私が悪かったからでー」

言いかけたファソンに、カンが哀しげに微笑んだ。

「いや、そなたは悪くない。幾ら何でも、あれは大妃さまの言い過ぎだ。気が狂ったとしか思えない」

カンは`母上、ではなく`大妃さま、と呼んだ。ファソンは瞳を潤ませた。

「カン、大妃さまはカンを生んでくれたお母さんよ。お母さんのことをそんな風に言ってはいけないわ」

ファソンは涙声で言った。

「大妃さまは国母であらせられ、この国で最も高貴な女性だわ。そのお方に私は刃向かった。確かに礼儀をわきまえないと誹られても仕方なかったと思う。だから、もう、大妃さまのことを悪く言うのは止めて」

確かに、あのときはファソンもカッとなって大妃に心のままを吐露してしまった。父母を侮辱され、逆らってはいけないと思いつつ、抑えられなかった。自分だけなら貶められても我慢できたけれど、大切な父と母を悪し様に言われて、許せないと思った。王の母に対して初対面で食ってかかったのだ。確かに大妃は行き過ぎであったが、ファソン自身にも非がないとはいえなかったのだ。

カンが笑った。

「私はそなたのそう言うところが好きなんだよ、ファソン」

単に性格を褒められたただけだというのに、そんな些細なことにも頬が熱くなってしまふ。紅くなったファソンを優しい眼で見つめ、カンは言った。

「今日のことでは、そなたに辛い目をさせた。何か詫びがしたいのだが、欲しい物はない？」

ファソンは慌てて首を振った。

「そんなもの、要らないわ」

いや、と、カンは今度ばかりは、きっぱりと断じた。

「どうしても詫びをしたい」

ファソンは困ったように眉を下げた。

「そんなことを言われても、かえって困る」

カンがすかさず言った。

「特に欲しいものでなくても構わない。何かして欲しいこととかあれば、遠慮無く言ってごらん」

ファソンは少し躊躇った後、控えめに言った。

「一度、家に帰らせて」

「ファソン。まさか、私の側から去るといのか？」

カンの声が一段低くなる。ファソンは慌てた。

「違うの、そういう意味ではなくて。一度、家に帰って両親に無事な姿を見せたいの。屋敷を黙って出て、もうそろそろ二ヶ月になるわ。父のことだから、きっと都中を探したでしょうけど、私を見つけられなくて心配していると思うの。母は母で心配性だから、どうしているかと考えると、気が気じゃなくなってしまうのよ」

その説明で、彼は漸く納得したようだ。

「なるほど、そういうことか」

確かに。彼は小さく頷きファソンを見返す。

「宮殿で暮らしてみても、私、自分がどんなに世間知らずだったか知ったような気がする。今までは両親がああしなさい、こうしなさいと言うのが鬱陶しくて、早く束縛から解放されたいとばかり思っていたけれど、本当は父や母に守られていたんだなって、判った。父と母なりに私の幸せを願って、見合いをしろと勧めたのね、きっと。でも、子ども過ぎた私は親の愛情を理解できなかった。だから、家に戻って、父や母に謝りたい。それから、どうしても伝えたいことがあるの」

「一」

カンが訝しげにファソンを見る。彼女は瞳を閉じて、また開き、ありったけの勇気をかき集めて言った。

「本当に好きな男の傍にいる幸せを知ってしまったから、もう別の男には嫁げないと言うわ」

カンが眼を見開いた。

「それは、私を好きだということか？」

ファソンは恥じらいながらも、しっかりと彼の眼を見て頷いた。

カンの綺麗な面にひときわ優しい微笑が浮かぶ。

「そんな可愛いことを聞いたら、もう二度と放してやれなくなるぞ。気が変わったというなら、今の中だ」

ファソンは泣き笑いの表情で首を振る。

「大丈夫。さんざん悩んで、やっと自分の気持ちを素直に口にできたの。心変わりなんかしない」

随分と回り道をしたけれど、これで悔いはない。彼の側にいたいという気持ちと、彼と共に生きてゆきたいという気持ち。どちらの想いにも眼を背けず、運命を受け容れていこうと思うのだ。

それは即ち、後宮の女になるということでもあった。王の側室として、いずれ彼が迎えるであろう中殿や他の側室たちと共に後宮で生きてゆく。

今でも正直言えば、彼が自分以外の女をその腕に抱いたり優しく微笑みかけるのを見たくはない。でも、彼を永遠に失ってしまうのと、彼の側にいたいという気持ちを秤にかけた時、彼の側にいられなくなるよりは、辛くても微笑んで王の女として生きることを選びたいと思ったのだ。

だが、この胸の葛藤をカンに告げる気はなかった。こんなどす黒い、もやもやとした想いは自分一人の胸にしまっておけば良い。彼が中殿や他の側室を迎えることになったら辛いだろうけれど、涙は堪えて微笑んでいれば良い。難しいかもしれないが、微笑むことができるように精一杯努力しよう。

ファソンが考えに耽っている中に、ふわりと身体が宙に浮いた。思わず悲鳴を上げて彼にしがみつくと、カンが薄く笑った。

「どうやら、今夜が私たちの本当の初夜になるみたいだね」

「ーっ」

真っ赤になったファソンを抱き上げ、カンは宝物を扱うような恭しい手つきで彼女を寝台に横たえた。

「カン。私ー」

思わず身を起こそうとしたファソンの身体をやわらかく押し倒し、カンは彼女の上からすかさず覆い被さった。

「心変わりほししないと約束したばかりだぞ？」

からかうように言われ、ファソンは眼を見開いた。

「ーそう、私は決めたのだ。」

「後悔ほしない？」

再度問われ、今度は落ち着いて応えられた。

「ほしないわ」

「そう？」

優しく唇を啄まれる。二度目の接吻だ。

カンの長い指がつうっとファソンの白い喉をなぞる。思わずピクンと身体を跳ねさせたファソンを見て、カンはひそやかに笑った。

悪戯な指は止まらず、喉から鎖骨、更には夜着の上からこんもりと盛り上った膨らみを辿り臍の辺りをさまよっている。

かと思うと、また上に上がって、まるやかな膨らみの辺りを中心に執拗に愛撫している。何故なのか、彼の気まぐれな指が通ってゆく度に、夜着を隔てているのに、触れられた箇所から言いようもない震えが走り、身体がビクビクと跳ねてしまう。

恥ずかしいことに、その度に声が上がってしまうのだ。しかも、その声はこれまで耳にしたこともない、自分でも耳を塞ぎたくなるような艶を帯びた声だった。

ファソンはあまりのはしたなさに頬に朱を散らした。狼狽して、両手で口を覆い、声が洩れないようにする。

「我慢しなくて良いんだ」

真上から覗き込むカンに優しく諭された。

「でも」

更に紅くなったファソンを見て、カンが笑う。

「可愛い」

彼の美しい面に意地の悪い笑みが浮かんでいる。こういう不敵な表情を見せるときは大抵、良からぬことを考えているのだと、ファソンはもう知っている。

「そんな可愛い表情を見ると、もっと虐めて啼かせたくなる」

いきなり唇を奪われる。今度の口づけ(キス)は最初のと異なり、飢えた獣に烈しく貪られる小動物になった気分のような一身体ごと喰らい尽くされるような獰猛さを帯びていた。

「少し怖い。何だか、いつものカンと違うみたいで、頭から食べられてしまいそう」

正直に打ち明けると、カンはひそやかに笑った。

「確かに今は、ファソンの全部を食べてしまいたい気分だ。ずっとお預けを喰らってきたからね。その分、烈しくなるのは仕方ないかもしれない。もちろん、できるだけ怖い想いや痛い想いをさせないように優しくはするつもりだけど」

「お預け？」

きょとんとするファソンの唇を、シッ、とカンが人差し指で封じた。

「静かに」

そして、改めてファソンをこの上なく慈しみのこもった瞳で見つめた。

「愛してる、ファソン」

やがて、彼の夜色に染まった深い瞳の奥底で焰が燃え上がった。先ほどまでの優しさとは相反する猛々しい男の欲望が閃く瞳がファソンを見降ろしている。

寝台脇の灯火がひそやかに照らし出す中、壁に映った二つの影が重なり、もつれ合う。

しばらく後、国王の寝所の灯りが消えた。静まり返った夜陰の底を時折、かすかな衣擦れの音と喘ぎ声がなまめかしく這う。

外は夏の夜、紫紺の空が都全体を覆うようにひろがり、満ちた月が静かに宮殿の銀色に燦めく

藁を照らし出していた。

その夜、王の寝所の丸窓越しに時折月影が映し出す二つの影は朝までずっと離れることはなく、烈しく絡み合い、庭園で咲く純白の紫陽花も恥じらって淡く染まるのではないかと思えた一。

真実と愛情の狭間で

七月に暦が変わってまだ数日を経ない日の朝、ファソンは女輿に揺られ、実家に戻った。ファソンは一人でと言ったのだが、カンがついてゆくときかなかったのである。

一そなたの両親ならば、私の義理の父上と母上なのだ。妻の父御や母御に婿として挨拶するのは当然のことであろう。

と、どうしても引かない。確かに、好きな男というよりは既に良人となったカン両親には早く紹介したい。自分が結婚して人妻になったのだということも彼と一緒にいてくれた方が両親にも説明しやすい。

そのため、ファソンも敢えて反対はしなかった。しかし、いきなり国王が娘婿として現れては、父や母も卒倒しかねない。ゆえに、カンには王という身分はまずは伏せて貰い、何度か両親と逢ってから、状況を見て真実を話そうと事前に決めていた。

懐かしい我が家が見えてくると、ファソンは少し手前で輿を停めて貰った。カンは栗毛の愛馬に跨って、彼女の輿を守るように付いてきていた。付き従うのは女官一人と護衛官二人である。

お忍びの来訪のため、供回りは考えられないほど少ない。

「ファソン？」

カンが訝しげな視線を向ける。ファソンは笑みを浮かべ、輿を降りた。

「ここからは歩いて行きたいの」

「そうか」

カンもまた馬からひらりと降り、護衛として付き従ってきた武官の一人に手綱を預け、ファソンと二人で並んで歩き始めた。

門の前まで来た時、門前を箒で掃いていた若い女中が弾かれたように顔を上げ、次いでこちらを凝視した。

「チェジン」

ファソンが走り始めると、チェジンも箒を放り出して駆けてくる。

「お嬢さま！」

飛びついてきたチェジンとファソンはひしと抱き合った。

「ああ、お嬢さま。今まで、どこでどうしていらっしゃったのですか？ 旦那さま（ナーリ）は漢陽中を隅から隅までお嬢さまをお探ししたというのに、お嬢さまときたら、それこそ霞みのように消えてしまわれたんですから。奥さま(マーニム)は毎日、朝から晩まで泣いてらっしゃるばかりです。最初は旦那さまも、お嬢さまに限って自害なんてするはずがないとおっしゃっていたんですけど、この頃じゃ、もう諦めてしまわれて、この分では近々、お嬢さまの弔いを内々に出そうかなんて話までなさっていたんですよー」

チェジンはよほど興奮しているのか、喋るだけ喋ると、おいおいと泣き出した。傍らのカンは

呆気を取られている。

「ごめんね、チェジン。あなたにも随分と迷惑をかけてしまったわね。私が出たことで、あなたが鞭打たれたりしなければ良かったんだけど」

ファソンは泣きじゃくるチェジンの背中をあやすように叩いた。

「うちの旦那さまや奥さまは、そんな酷いことをなさる方じゃありませんよ。それに、私じゃ、何も知らなかったんですから。何で、お嬢さま、今回に限って、あたしに何も言わずにお一人で出ていかれたんです？ 迷惑なんてかけられちゃいませんけど、心配なら、たくさんしましたよ。あたしは使用人ですけど、お嬢さまのことを亡くなった母から頼まれていましたし、僭越ですけど、妹のように思っていたんです。なのに、黙って、いなくなってしまうなんて、あんまりですよ」

騒ぎを聞きつけた陳家の執事が中から様子見に出てきて、泡を吹かんばかりに愕いた。

「旦那さま、大監さま（テーガンナーリ）、お嬢さまが、ファソンさまがお戻りになりました！」

その大音声に、屋敷からは次々に使用人が飛び出してきて、皆、二ヶ月ぶりに帰還したお嬢さまの姿を見て泣き出す始末だった。

それから四半刻後、陳家の客間においてファソンは父と向き合っていた。母の方はといえば、ファソンの姿を見るなり放心したようになり、倒れてしまい、今は別室で眠っていた。

つまりは、それほどに母に負担を強いていたわけだ。ファソンは今、己れがなしたことがどれだけのことを引き起こしたのかを突きつけられていた。

だが。この後、彼女は更に今回の家出が何を意味したのかを知る事となる。

それにしても、と、ファソンは気遣わしげに父とカンを交互に見た。今日はもちろん、カンは王衣を纏っているはずがない。薄紫の上品なパジチョゴリに身を包み、いつものように帽子から垂れ下がる玉は紫水晶を合わせている。

ファソンはといえば、淡い水色のチョゴリに薄桃色のチマを合わせていた。チマには華やかな百合の花が鮮やかに刺繍され、チョゴリの裾に控えめに蝶が飛んでいる。

髪は既婚を示し、後頭部で一つに髷を結って、カンに贈られた堇青石（アイオライト）の簪を挿していた。

屋敷内に脚を踏み入れてからというもの、カンの表情は冴えなかった。殊に父と対面したカンの動揺は、はっきりとしていた。

また、父は父でカンを見るなり絶句し、言葉さえ出てこないほど愕いているようである。二人の間には一体、何かあるのだろうか。

ファソンが視線で傍らのカンに問いかけたその時、カンが静かな声音で言った。

「まずは私から義父上にご挨拶申し上げます」

ファソンも慌てて立ち上がり、二人は揃ってファソンの父ミョンソに拝礼を行った。

そんな若い二人をミョンソは何とも言えない顔で見ている。例えていうなら、苦い薬を無理に飲まされたような表情とでもいえようか。

拝礼を終えると、カンはまた神妙な顔で端座した。ミョンソは小さくかぶりを振り、大きな息を吐き出した。

「一体、どのようなおつもりで、このようなことを？ 殿下」

「私も今、この屋敷に来て初めて事の次第を悟ったのだ。左相大監」

二人のやり取りに、ファソンは声を上げた。

まさか、二人はずっと以前からの知り合いだった一？ そして、怖ろしい事実に行き当たり、身体中の血が引いてゆくのが判った。

当たり前だ。父は議政府の三丞承の一人であり、領議政が空席の今、朝廷の臣下としては最高位にある政治家なのだ。そして、カンはこの朝鮮の国王。二人が顔見知りどころか、互いによく知っているのは当たり前だ。

いや、ファソンの不審はそんなことで兆しているのではなかった。二人が知己なのは当たり前

だとしても、何なのだろう。二人共に罰が悪いというか、何とも気まずげな最悪の雰囲気なのは。

ファソンは隣のカンを縫るような眼で見た。

「カン、どうしたの？ 様子が変よ」

娘の物言いに、ミョンソが眼を引きむいだ。

「これ、ファソン。控えなさい。国王殿下に何というご無礼な」

カンが鷹揚に笑った。

「左相、良いのだ。私とファソンはいつもこんな風なのだから」

カンはファソンに安心させるように微笑みかけた。

「案ずることはない」

彼はファソンの眼を見て頷き、その額に落ちたひと筋の髪の毛を直し、ついでに髪を撫でた。人眼をはばからない仲睦まじい新婚夫婦ぶりの二人に、ミョンソは眼のやり場に困惑した素振りでコホンと咳払いする。

「話せば長くなるが、まずはファソンに話しておかなければならないことがある」

カンはファソンに向き直った。

「二ヶ月前、そなたは見合いを嫌って屋敷を飛び出したと言ったな。その見合いの相手というのは私だ」

「え？」

ファソンは眼をまたたかせた。ミョンソが苦渋に満ちた声で話し始めた。

「ファソン。殿下のおっしゃるとおりだ。そなたがお逢いするはずだったのは他ならぬ国王殿下だったのだ」

一嫁に逃げられた。

一嫁といっても、正式な嫁ではないが。

カンと交わした会話が次々と甦った。そういえば、彼もまた意に沿わぬ相手と結婚させられそうになっていると話していた。

その相手とは大妃や大臣たちが勝手に決めた令嬢で、カンはその相手に対しては好意どころか興味さえ抱いてはいないようだった。

一中殿の選考試験なぞ、形だけのものさ。内実は大妃と大臣たちが勝手に決めていて、その娘が中殿になると決まっているんだ。

その令嬢はカンと内々に対面する直前、姿を消したと、カンは話してはいなかったか？

ファソンの眼から大粒の涙が溢れた。

「どうして」

どうして気付かなかったのだろう。意に沿わぬ相手との結婚、顔合わせの前に家出した令嬢。話のすべてが一致しすぎている。そのどちらもがカンとファソンをめぐる`見合い、だと判りそうなものなのに。

馬鹿だ、自分は大馬鹿だ。父の手の内をかいぐり、見事に好きな男を見つけて想い想われて結ばれたと思っていたのに、現実には父の思惑どおりに動いていただけだった。

母だって、見合い、の前夜に言っていたではないか。

—この縁談は断ることはできないのですよ。

こちらから辞退できないほどの相手とは誰なのだろうと訝しんだものだけれど、相手が国王だというなら、納得はゆく。

つまりは、そういうことだ。我が身は左議政の娘として中殿に一王妃に冊立されるはずだった！ それは最早、大妃や父たちの間で話し合われ、当のカンやファソンの意思は関係なく決定事項として扱われていた。

あの運命の日、もしファソンが逃げ出さなければ、二人は予め仕組まれた王と未来の王妃という形で出逢っていた。

仮にそういう出逢いであったなら、今の自分たちのように打ち解けて恋に落ちていたのだろうか。いや、相手が王だと知れば、恐らくファソンは言葉を交わすのさえ戸惑っていただろう。

カンにせよ、ファソンが左議政の娘で、既に決められた中殿だと知れば、冷淡にふるまっていたかもしれない。ファソンに興味を持つどころか、見向きもしなかったはずだ。だって、彼はあんなに嫌っていた。『予め決められた中殿、を。

「私、ごめんなさい。これ以上、今は何もお話しできません」

ファソンは泣きながら室を飛び出した。背後でカンが呼ぶ声が聞こえたけれど、ファソンは振り返らなかった。いや、振り返ることができなかったのだ。

長い話を終え、カンはずっと息を吸った。改めて左議政陳ミョンソを見やる。

ファソンが室を飛び出して一刻余り。彼女のことが気になって居ても立ってもいられないカンに、ミョンソが

一娘は妻の部屋にいるようです。

と、伝えてくれ、とりあえずは安心した。

左議政にはすべて包み隠さず話した。ファソンとの町での出逢いから、彼女を王宮に連れていったこと、既に側室として位階を与えていること。

ミョンソは当然ながら、その衝撃と驚愕は大きかったらしい。

一今、後宮はおろか宮殿を騒がせている`妖婦、がよもや我が娘であったとは。後宮にいては都中を探したとて、見つかるはずもありませんなあ。

と、苦笑いをしていた。

同時に、不安と当惑を隠せない親しての本音も盛らした。

一親が申すのも何ですが、あの娘は策を弄するなどという真似は到底できません。良く申せば真つすぐ、悪く言えば、融通の利かぬ石頭で、およそ幼い頃から道に外れる行いを嫌う子でした。何ゆえ、ファソンが殿下を誑かす女狐などと誹られることになったのでしょうか。

カンは口ごもりながら言った。

一それは私がファソンを。

流石に臣下とはいえ、自分が抱いた女の父に向かって言える科白ではない。ミョンソは王の意を汲み、言いにくい科白を口にした。

一殿下の深いご寵愛はありがたき幸せにございますが、過ぎたるは及ばざるごとしということもございます。また、長い我が国の歴史を紐解きましても、王がただ一人の女人に溺れすぎた御世は世が乱れております。どうか、その辺りをご了察下さい。

我が娘が王の寵を得るのは両班であれば、誰しものが望むことだ。しかしながら、生真面目にその王に対して`娘に溺れるのもたいがいにせよ、と諫める辺り、やはり正義感の強いファソンとこの堅物の左議政の父娘はよく似ている。

一陳氏という姓はどこにでもあるゆえ、まさか左相の息女だという発想は私には皆無であった。もし私がファソンに見合いの相手は左相の令嬢だということを告げていれば、ファソンが受ける衝撃もこれほどではなかったかもしれぬ。

カンが率直に言うと、ミョンソは難しげな表情になった。

一さて、それはどうでしょうか。今となっては、それがしにも判りかねますが、結果良ければすべて良しとも申しますゆえ。結局、殿下と娘は出逢うべくして出逢い、結ばれたのでしょくな。予め天が定めた縁で結ばれた者は、たとえどのような障害が入ろうと、必ず出逢うといひます。

話は終わった。カンは頼もしい左議政の顔を見ながら最後に言った。

「左相、ファソンのことは私に任せてくれ。一生、大切にすべし」

「既に側室の位階を賜っているとすると、娘の処遇はどうなりますか？」

「左相の希望を訊く前に、私の意思を伝えよう。私はファソンを中殿に立てるつもりだ。ただ、いきなりというわけにはゆかぬ。ゆえに、とりあえずは淑儀か昭儀辺りに昇進させて、近々、嘉

礼を行い正式な妃とするつもりだが、どうだろうか」

「願ってもない話にございます。確かに殿下の仰せのとおり、身分の低い側室をいきなり中殿さまに立てるというのは無理がある話です。無理がある話というのは、やはり、周囲からも認められにくい。私の娘という素性を公表しても、昭媛から王妃にというのは難しいでしょう」

ミョンソは深々と頭を下げた。

「殿下にそこまで思召して頂き、我が娘は果報者にございます。ただ、あれはなかなかの頑固者でして。終わりよければすべて良しと、単純に割り切ることができるかどうか。素直にこのありがたきお話をお受けすると良いのですが」

暗に、ファソンが容易には納得しないのではないかと、娘の気性をよく知る父はカンにとってあまりありがたい予言をしてくれたのだった。

更には。

一その頑固娘を納得させるのは、娘に惚れたお前のなすべきことではないか。

ミョンソの顔には、そう書いてあるような気がしてならなかったのは、カンの勘繰り過ぎというものだろうか。

人の身体というものは、つくづく不思議なものだと今更ながらに思ってしまう。

昨日から今日まで、およそ丸一日も泣き続けているのに、涙はまだ尽きることはないようである。ひりつく痛みを感じるからには、恐らく人には見せられないであろうほど眼は紅く腫れ上がっていることだろう。

特に、`あの男(ひと)`にだけは、そんな醜い様は見せたくない。一と思ってしまう自分は、どれだけ愚かなのか、甘いのか。あれだけ手酷い裏切りを見せつけられ、まだこの期に及んで彼を好きだという気持ち棄てられないのだから。

一本当に、私ってば馬鹿ね。

いまだにカンを忘れられない。そんな自分が嫌で、余計にまた涙が溢れてしまう。これだけ泣いてもまだ身体に水分が残っているというのが、我ながら滑稽なようでもある。

多分、これまで生きてきて流した分よりも、昨日今日一日で流した涙の方が多いのではないかと思うほど、泣いた。

また新たな涙が出そうになり、ファソンは涙を啜った。まったく、幼い子どものように涙を垂れ流している自分は恋する十六歳の乙女だというのだから、我が事ながら嗤えてくる。

そのときだった。遠慮がちに声かけられた。

「お嬢さま」

その声はチェジンだった。昨日、ふた月ぶりに実家に戻ったファソンに付き従い、チェジンは王宮にやって来たのだ。それはチェジンの強い希望でもあった。

一あたしは一生、お嬢さまにお仕えすると決めております。教養も礼儀も知らない賤しい身分ですが、どうかお連れ下さいまし。

伏して懇願され、またファソン自身も姉とも信頼する乳姉妹が側にいてくれたら、心強いことはこの上にない。そのため、両親の許可を得て、チェジンを王宮に伴ったのだった。

チェジンは早速、この殿舎を取り仕切る年配の尚宮から宮殿内での礼儀作法などをみっちりと

仕込まれているはずだ。仮にも王の側室の側近く仕えるからには、相応の教養も作法も身に付けなければならず、これまで女中の仕事しかしてこなかったチェジンにとっては辛い日々になるはずだ。

だが、試練を乗り越えた先には、宮廷女官としての道が約束されている。ファソンの信頼も厚いチェジンは上手くゆけば尚宮になれる可能性もあるはずだ。尚宮ともなれば、正五品の位階を賜り、表の廷臣たちとも互角の立場となる。

王の側室を除けば、尚宮は女官としては最高位に位置づけられる。チェジンはそのことも十分自覚しているらしく、これまで習ったことのない文字を教えて欲しいとチェジンに頼み込んだほどだ。

チェジンが張り切っているのは良いことだ。いずれ彼女が自分付きの尚宮になってくれれば、こんなに頼もしいことはない。

もっとも、そんな遠い未来まで自分が王宮にいるとは思えないが。

と、ファソンはまた哀しくなった。

「お嬢さま」

チェジンは他の女官と異なり、今も変わらずファソンを「昭媛さま、ではなく「お嬢さま、と呼ぶ。それも嬉しいことだ。

「なあに」

もそもそと被っていた掛け布団から顔を出したファソンに、チェジンは笑った。

「お嬢さま、まるで亀みたいですよ？」

「そう。眼の紅い亀なんて、いるかしら」

チェジンの笑えない冗談に、ファソンは気のない様子で応えた。

「国王殿下がお越しになるそうです」

先触れの女官が知らせにきたのだろう。ファソンはきっぱりと言った。

「逢いたくないわ」

「そういうわけにはいきませんかでしょうに」

「いいえ、逢いたくないの、今はまだ」

ファソンの物言いがおかしかったのか、チェジンはクスクスと笑った。

「今はまだ、ですか？ では、いずれはお逢いするということですね」

ファソンは紅くなった。

「そういう意味ではないの。ええ、そうですとも。あんな方には絶対に逢いたくないわ」

「お嬢さま、強情は良い加減になさらないといけませんよ。可愛げのない女は殿方に嫌われますからね」

どうにも癪に障る言い方に、ファソンは自棄になって叫ぶ。

「別に構わないわ。どうせ、あの方は私のことなど端からお嫌いだったんだから」

チェジンは意味ありげに言う。

「そんなことをおっしゃって、良いんですか？ 昨日、いよいよ中殿さまを決めるための二次選考試験が行われたっていいですよ。悠長なことをおっしゃっていたら、王さまのお心を他の女に盗まれてしまいますよ」

「勝手にすれば良いわ。側室でも中殿でも持ちたいだけ持てば良いのよ」

また叫んだが、チェジンの返事はない。

ファソンは信頼する乳姉妹にして今は女官見習いとなったチェジンと呼んだ。

「チェジン？」

だが、やはり、いらえはない。代わりに聞き慣れた声が返ってきた。

「ファソン」

どれだけ聞きたかったことだろう。たった一日聞いていなかっただけなのに、もう、こんなにも彼の声を聞きたいと思う。

ファソンはつい顔を布団から出した。いつしかチェジンはいなくなっていた。

「ファソン」

カンが心配そうな表情で見つめている。ファソンは慌てて布団を頭から引き被った。

「ファソン。隠れないで、顔を見せてくれ」

カンの声が近づき、枕許に椅子を引き寄せて座る気配がした。ファソンは依然として布団を被り、息を潜めている。

「今度のことは済まなかった」

何が`済まない、ですって？` あなただって、見合い相手の令嬢が私だとは想像もしなかった。だから、あなたが私に`既に決められた中殿、が陳家の娘だと話さなかったのは、別にあなたのせいではない。

そんなことは判っていた。カンが悪いのでも責任があるのでもない。

運命があまりにも皮肉で、残酷すぎたのだ。

私がいちばん哀しかったのは、あなたが何も話さなかったことではない。あなたが既に出逢う前から、私を嫌っていたのを知ったからよ。

逢う前から嫌われているのでは、私はもう、あなたの側にはいられないわ。

大きな溜息が聞こえ、ファソンは彼が諦めて出ていくのかと思った。が、次の瞬間、ファソンは掛け布団ごと、ふわりと身体が宙に浮いたのを自覚した。

「一？」

ほどなく被っていた布団が引きはがされ、眼の前には今、いちばん逢いたくて逢いたくない男がいた。しかも、ファソンは夜着のまま寝台に座ったカンの膝に乗っている。

「布団に隠れて出てこないなんて、まるで子どもだな」

カンはファソンを膝に乗せたま、笑っている。だが、ファソンの顔をしげしげと見て、その端正な顔を曇らせた。

「眼が腫れている。どうして、そんなに泣いたんだ？」

ファソンは顔を背けた。

一あなたに嫌われたから哀しくて泣いただなんて、絶対に言うものですか。

「殿下にお願いがあります」

他人行儀に言うと、カンの眉が上り上がった。

「願いとは何か、陳昭媛」

どうやら、ファソンの出方を見るつもりになったようである。

「お暇を頂きとうございます」

が、流石にこれは想定外の頼みだったようで、カンの秀麗な面が見る間に強ばった。

「後宮を去って、いかがするつもりだ？」

相当怒らせたのか、声も今まで聞いたことがないほど低い。

「実家で心静かに過ごそうと考えています」

「一生、誰にも嫁ぐつもりもないのか？」

「互いに想い想われる相手と出逢うことができれば、また嫁いでも良いかと一」

ファソンは皆まで言えなかった。

「ならぬ！」

カンの怒声に、ファソンは身を竦ませた。

「そなたは私のものだ。勝手に後宮を去ることも他の男と結婚することも許さぬ」

刹那、ファソンの身体は強い力で寝台に突き飛ばされていた。

「そなたは髪の毛ひと筋まで俺のものだ。他の男になど渡すどころか、触れることさえ許すものか」

寝台に仰向けになったファソンの上から、カンがのしかかってくる。

「カンー」

ファソンは、これまで見たことのないカンの凄まじい怒り様に怯えた。

「私、あなたを怒らせるつもりでは」

言いかけた唇を乱暴に奪われる。息をつかせない口付けは延々と続き、ファソンが息苦しさに喘ぐ度に、カンの愛撫はあっという間に荒々しさを増していった。

「ーいやっ」

怯えて寝台から逃げようとするファソンをカンは押さえつけ、乱暴に夜着を剥ぎ取った。ろくに馴らすこともせず一気に貫かれ、ファソンの唇からか細い悲鳴が上がった。

「ーああっ」

寝台の上で白い背中が弓なりに仰け反る。背後から覆い被さったカンに烈しく揺さぶられながら、ファソンは涙を零した。

ーあなたにとって、私は所詮、いつでも欲しいままにできる慰みものでしかなかったというのー

真夏だというのに、心が凍えそうなほど寒かった。誰か温かい腕で抱きしめて欲しい。

ファソンは泣きながら意識を手放した。

意識を失ったファソンのたおやかな身体をカンはそれでもまだ狂ったように貪った。

ファソンの許に大妃殿から招きがあったのは、その翌日のことである。

「どういう風の吹き回しかしら」

ファソンは可愛らしい顔を曇らせ、チェジンに例の大妃との一件を話した。宮殿の書庫を出たところで大妃と遭遇し、あらぬ誤解をかけられ罵倒された挙げ句、頬を打たれたことを話すと、チェジンは自分のことのように憤慨した。

「許せません。たとえ国王さまのお母君といえども、あたしの大切なお嬢さまをぶつなんて。今度、逢ったら、あたしの方が大妃さまを殴ってしまうかもしれません」

などと、真顔で怖いことを言っている。

「毒でも飲まされるのかもしれませんがよ」

と、また、さらりと続けるのに、ファソンは苦笑いしかない。

「毒を飲めというなら飲んでも良いけど、飲むなら大妃さまも一緒だわ。一人で死んであげるほど、このファソンさまは甘くないんだから。大妃さまも道連れになって頂くわ」

「まあ、お嬢さまったら」

チェジンは笑い転げている。物騒な会話をする主従だが、どちらも大真面目な顔だ。

ファソンが大きな息を吐いた。

「それにしても、本当に一体、何の魂胆があるのかしらね」

「さあ、それは判りませんが、大妃さまのご招待をまさかお断りするわけにもいかないでしょうし」

チェジンも愁い顔だ。

「毒を食らわば皿までも言うわね。こうなったら、行くしかないみたい」

ファソンはとチェジンは顔を見合わせ、溜息をついた。

その日の午後、ファソンはお付きの尚宮とチェジンを伴い、大妃殿を訪れた。何か手土産が必要かと、葛と寒天で作ったゼリーをよく冷やしたのを涼しげな玻璃の器に形よく盛り、それを小卓に乗せて運ばせる。

大妃殿の前に控えていた馬尚宮に到着を告げると、馬尚宮は大妃の意向を伺いにいった。ほどなく入るようになると言われ、馬尚宮に案内されて庭から続く階を昇り殿舎に入る。

女官が外側から両開きの扉を開け、ファソン、お付きの尚宮、チェジンの順で入室した。

ファソンは両脇から尚宮とチェジンに支えられ、大妃に拝礼を行った。

「忙しいところ、呼び立てて済まなかった」

拝礼を終えて座ったところで、大妃が鷹揚に言った。皮肉かと思ったが、大妃の花のかんばせには微笑が浮かんでいるだけだ。

どうも風向きが以前とは全然違う。眼の前の慈母観音のような女性と、金切り声でファソンを罵り叩いた夜叉のような女が同じ人だとは俄に信じがたい。

啞然としているファソンの前に、馬尚宮が運んできた茶を置いてゆく。それこそ毒でも入っているのかと、ファソンは落ち着かない視線を湯飲みに落とした。

と、華やかな笑声がその場に満ちた緊迫を破った。

「毒なぞ入ってはおらぬ。安心して飲まれよ、陳照儀（ソイ）」

「は、はい」

思わず応えた後、ファソンは首を傾げた。今、大妃は何と言った？

ファソンの疑問を見透かしたかのように、大妃が妖艶な笑みを浮かべた。

「おや、そなたは知らなかったのか？ 今日付で主上がそなたを昭媛から照儀に昇進させるという王命を出したと聞いていたが」

ファソンは眼を見開いた。

「そのような話は一切、お伺いしておりません」

大妃はしらっと応える。

「おや、それはおかしいこともあるものだよ。当の本人が知らぬとはな」

「あの、私は」

「何だ？」

大妃の視線に射貫かれ、ファソンは一瞬たじろいだものの、ひと息に言った。

「私はその王命を承ることはできません。国王殿下にはお暇乞いをお願い致しましたので」

「なるほど。だが、主上がその願いを聞きとどけられるとは思えぬがな。あれほど、そなたにご執心なさっておられるものを」

「大妃さまは私が主上さま（サンガンマーマ）のお側にいるのはご反対ではなかったのですか？」

どうも態度を豹変させた大妃の真意を測りかね、ファソンは訊ねずにはいられなかった。今の口ぶりでは、大妃はむしろカンの側にファソンを置いておきたいとでも言いたげではないか！

「何とも思ったことをはっきりと申す娘よ。愚かなのか、怖れ知らずなのか」

大妃は呆れたように言い、笑った。

「ま、それはいずれ時が明らかにしてくれようぞ」

大妃はスと表情を引き締めた。その冷めた表情は以前、あからさまな憎しみをファソンに向けたときと同じものだ。やはり、大妃はファソンの存在を認めたわけではなかった。

だが、何故、偽りの親しみを束の間とはいえ、示して見せる必要があったのか。

「そなたの申すとおりに。私はそなたが今でも気に入らぬ。叶うことなら、主上のお側からさっさと追い払ってしまいたいと思うている」

大妃は言葉を切り、綺麗に整えられた指先を見つめている。ファソンは問うた。

「私が左議政の娘だから、お気持ちを変えられたのですか？」

「それもないとは言わぬ。だがな」

大妃は首をゆっくりと振った。

「主上のお気持ちがどうしても動かぬと知った今、そなたを疎んじて何とする？ あの子は幼き折より、頑固であった。しかも、そなたの父はこれよりまたとない強力な主上の後ろ盾となろう。主上のお気持ちとそなたとの婚姻によって得る外戚の力を考えれば、敢えて私が反対する理由はどこにもない」

大妃がどこか晴れやかにも思える笑みを浮かべた。言い換えれば、吹っ切れたともいえるべき笑いでもあった。

「主上が他の娘を今後一切後宮に入れるつもりはないと宣言されたからには、そなたを後宮から追い出すわけにはゆかぬではないか」

ファソンは首を傾げた。

「お言葉ではございますが、大妃さま。中殿さまを選ぶ選考試験は予定どおり行われ、無事に十数名の方が三次選考に進まれたとか。更にその中から五名の方が最終選考に残ったとも聞き及んでおります」

二次選考と三次選考はほぼ時を置かずして行われた。五人の令嬢が最終選考に臨むと聞いている。即ち、最終選考に残ったということは、その五人がカンの後宮に入るのは決まったも同然であり、その五人の中から次代の王妃が立つ運びだ。

大妃が笑い出した。何がおかしいのか、ころころと笑っている。ファソンは呆気にとられ、大妃を見つめた。

「確かにのう。五人の娘が最終選考に残ったとは聞いておる。さりながら、その娘どもが主上のお側にお仕えすることはない。それぞれがふさわしき年格好の王族に嫁すこととあいなろう」

「それは、どういうことでしょうか」

何故、未来の王妃を選出するための試験で選ばれた令嬢が王族の妃になるのか？ ファソンは皆目判らず、眼をまたたかせた。

「言葉どおりだ。主上にその気がおありにならぬゆえ、中殿選びは中止とあいなった。されど、折角最終選考まで残った娘たちを無下にもできぬ。そういうわけで、令嬢やその父親の体面を保つには、せめて適当な王族男子に娶せてやるのが良策ということになったのよ」

ファソンは言葉もなかった。けれど、今となっては大妃に言いたいことはある。

「最初から、そのおつもりだったのですか？この度の中殿さまを選ぶための試験はかりそめのものにて、最終選考に残った令嬢方は王族に嫁がせると？」

大妃が鼻を鳴らした。

「馬鹿なことを申すでない。本来であれば、残った令嬢たち五人はそのまま主上の側室となるはずであった。主上が聞き分けのないことを仰せゆえ、致し方なく取った苦肉の策だ」

大妃は黙り込んだファソンを透徹なまなざしで見据えた。

「そこまで存じておるからには、そも最初から決まっていたという中殿が誰なのかも心得ておるのであろう、陳ファソン」

ファソンは大妃の厳しいまなざしを真正面から受け止めた。

「私は中殿になるつもりはありません。そのような器ではありませんし、主上さまも私をお迎えになることをお望みではないと思います」

埒もない、と、大妃が切り捨てた。

「認めるのは癪ではあるが、あの書庫から出てきた主上とそなたを見た時、二人が相思相愛であることは一目瞭然であったわ。何も私が望んでいるのではない。他ならぬ主上ご自身が強く望まれているのだ。中殿には陳ファソンしか望まぬと、王妃はそなたしか考えられぬと」

―それでも、自分は中殿にはなれない。このお話をお受けすることはできない。

ファソンが言いかけたまさにその時、扉の向こうから女官の声が響き渡った。

「国王殿下のおなりにございます」

刹那、ファソンの顔色が変わった。老獪な大妃はまるで研いだ爪を隠し持つ猫のようだ。素知らぬ顔で応えた。

「お通しせよ」

ほどなく扉が開き、国王が入ってきた。その場にファソンを認め、王の整った顔も瞬時に強ばった。

「これは奇遇なこともあるものだ。嫁が機嫌伺いに来てくれたところに、息子が来るとはのう」

大妃は立ち上がった。

「さて、邪魔な年寄りも早々に退散致すとしよう。夫婦二人だけの話もあろうゆえ、心ゆくまで話すが良い」

意味深な科白を残した大妃が室を出てゆきかけ、つと振り向いた。

「陳照儀、いや、まもなく中殿になられるのであったな」

わざとらしく言い直し。ファソンを強い瞳で見つめた。

「王室には一日も早い世継ぎの誕生が必要だ。私にとって大切なのは王室の存続なのだ。はっきりと申せば、主上の世継ぎを生む女が誰であれ、構いはしない。世継ぎが生まれることの方が重要だと考えている。それが、そなたが聞きたがった問いに対する私の応えだ」

一大妃さまは私が主上さま（サンガンマーマ）のお側にいるのはご反対ではなかったのですか？

ファソンは大妃にそう訊ねた。つまりは、何ゆえ、ああまで頑なに嫁とは認めぬと言い張っていた態度を一転させたのか？ その理由を今、大妃はくれたのだった。

何と変わり身の早いというか、思考の切り替えの鮮やかなことか。いっそ小気味良いとさえ思える大妃の態度に感心もするし呆れもする。だが、それが後宮の女として、あまたの女たちの頂点に立つ中殿として生き抜いた大妃が身に付けた処世術であるのかもしれない。

大妃に続いて馬尚宮も退出する。去り際、ファソンに付いてきた尚宮やチェジンがいまだにファソンの側に控えているのに対し、大妃がたしなめた。

「気の利かぬことだ。さっさとそなたらも出てゆかぬか！」

大妃の叱声に、尚宮とチェジンが慌てふためいて部屋を出ていった。

二人きりになった室内は、何とも気まずい沈黙が漂った。これ以上の沈黙には耐えられない。ファソンはカンに一礼し、室を出ようとした。

「ーファソン」

背後から、カンの苦悩に満ちた声が追いかけてくる。

「昨日はごめん。そなたが私の側からいなくなると聞いて、カッとなってしまった」

ファソンは務めて平静を装った。

「私なら平気よ。それに、後宮の女は王の女ですもの。あなたはいつでも後宮の女を好きなようにできる唯一の男でしょう。だから、私を抱いたのよね。私はそれに文句を言える立場ではないわ」

「それは違う！ ファソン、聞いてくれ。私は本当にそなたを」

ファソンはカンの言葉に覆い被せるように言い放った。

「聞きたくないの。あなたは私に逢いもしない中から、私を嫌っていたわ。まだ見たことのない中殿、に対して、物凄く冷淡だった。今更、それを聞かなかったことにはできないし、あなただって気にならないはずはないでしょう。よく考えてみたら、きっとこれで良かったと思うときが来る。だから、私はあなたの側から姿を消すの」

「私は確かに、左議政の娘を疎ましく思っていた。勝手に決められた中殿など要らないとも思った。それを否定はしない。だが、そなたと共に過ごした日々も確かに存在したはずだ。誰よりも愛しいと思い、誰よりも側にいて欲しいと願った一私が初めて愛した女がそなたであったことも事実なのだ」

ファソンは扉を開けた。カンの声がわずかに震えた。

「それでも、そなたは否定するというのか？ 私とそなたの間に必ずあったはずの感情まで、無かったものにできると？」

ファソンは未練を振り切るように扉を後ろ手で閉めた。振り向きもしなかった。

振り向けば、カンに取り縋ってしまいそうだったから。泣いて彼に訴えてしまいそうで、怖かったのだ。

一私とあなたの間にあった、あの愉しかった日々を無かったことなんて、できるはずがないじゃない。

私は今でも、あなたを愛しているのよ。でも、一度、あなたに嫌われたという事実をどうしても乗り越えることができないの。もし、あなたがいつかまた私に飽きたときが来たら、私はどうすれば良いの？

あなたにいつか嫌われるくらいなら、いっそのこと今、思い出が綺麗な中に、あなたの側から姿を消した方が良い。そう思ったの。私らしくない意気地なしな生き方だとは思うけど。

ファソンは泣きながら階を駆け下りた。

庭で待っていた年配の尚宮とチェジンが愕いて駆け寄ってくる。

「お嬢さま？」

チェジンの気遣わしげな声も耳に入らず、ファソンは涙を流し、殿舎までの道のりを力ない足取りで辿った。

翌朝、ファソンは宮殿ではなく、陳家の屋敷にいた。昨夜、ついに後宮を去り、実家に戻ってきたのである。

突如として帰宅した娘を父ミョンソは黙って出迎えた。後宮を去った理由について問いただすこともなかった。

今、ファソンの前には開いた扉の向こう、庭がひろがっている。七月上旬の庭には紫陽花が至る所に群れ咲いていた。

今朝、目覚めてから見るとはなしにボウと庭を眺めている。

そろそろ長い梅雨も明ける。紫陽花の花期の終わりが近づいたということだ。こここのところの晴天続きで、蒼色に染め上がった紫陽花も心なしか元気なく、うなだれているように見えた。

「もう梅雨も明けたのかしらね」

聞き慣れた声が聞こえ、ファソンは緩慢な動作で顔を上げた。母ヨンオクが側に立っている。

「こう雨が降らないと、折角の紫陽花も萎れてしまうわ」

ヨンオクはファソンの隣に座った。

「少し話しても良いかしら」

母に言われ、ファソンは小さく頷いた。

「昔話をするわね」

母は淡々と話し始めた。

「大昔のことよ、私には好きな男がいたの」

ファソンの視線がチラリと動いた。

「それって、お父さまのことよね、お母さま」

と、ヨンオクは声を潜めた。

「それが違うのよ」

「ー！」

ファソンは眼を瞠った。

「ここだけの話だけどね。嫁ぐ前に、好きな男がいたの」

「その男はどんな人だったの？」

貞淑そのものの両班の奥方だと信じて疑っていなかった母にそのような過去があったとは。俄に信じられず、ファソンはまた興味も引かれた。

母が遠い瞳になった。その視線は紫陽花に向けられているようでもあり、遠いはるかな過去に向けられているようでもあり、定かではない。

「実家の下僕だったわ」

「そう、だったの」

まさか相手が使用人だとは思ってもせず、ファソンは言葉もなく母を見つめる。

「とても働き者でね。同じ年頃の下僕が嫌がるような仕事でも、進んでやるようなそんな人だったわ」

「素敵なお男だったのね」

相槌を打つと、母が笑んだ。ハッと胸をつかれるような、まるで可憐な少女のような微笑だった。

「そうね、素敵なお人だったと思うわ。仕事の合間に私から話しかけたのがきっかけで、色々話すようになって、いつしか恋仲になっていたの。そんな頃、お父さまとの縁談が知り合いを通じてもたらされた」

結局、母は父と結婚した。けれど、そこに至るまでに、母はどのように自らの心に折り合いをつけたのだろうか。ファソンはそれを知りたいと思った。

「お祖父さまとお祖母さま、つまり、私の両親はもちろん、私と彼のことを知らなかったわ。知れば、大事になったでしょうね。それでも、私は彼以外の男に嫁ぐなんて考えられず、彼に縁談があることを知らせたの。すると、彼は言った」

「二人で逃げましょう。」

その下僕の青年はヨンオクが縁談があると打ち明けた三日後の夜、二人で手に手を取って、駆け落ちしようと言った。

「二人で俺たちを誰も知らないところに行って、二人だけで新しい暮らしを始めましょう。」

彼は真摯な眼でヨンオクに言った。

「それで、どうなったの？」

ファソンは息を吞んで訊ねた。ヨンオクは微笑んだ。

「約束の場所に行かなかったの。彼は私たちが暮らしていた村の外れにある水車小屋で待っていると聞いたけれど、私は約束の時間にそこに行かなかった」

ヨンオクは依然として遠い眼で続けた。

「翌朝、一人で約束の場所に行ってみたわ。でも、当たり前だけど、彼はいなかった」

代わりに簪が一つ、置いてあったそうだ。飾りもついていない安物の簪だったけれど、彼がヨンオクのために買ったものであることは明らかだった。もしかしたら、二人の新しい門出の贈り物として贈るつもりだったのかもしれない。

ヨンオクは消え入るような声で言った。

「今でも時折、考えることがあるわ。もし、約束の夜、水車小屋に行っていたら、どうなってい

たかしらって。きっと私の運命も大きく違っていただでしょうね。お父さまはご立派な方で、私を妻として大切にしてくださいました。両班に生まれ両班に嫁いだ私を人は誰も幸せな生涯だと言うでしょう。でも、もしかしたら、彼の手を取っていたら、別の人生もあったかもしれないと後悔にも似た気持ちになることがあるのも確かよ」

ファソンにとっては、あまり知りたくなかった母の独白だ。ファソンは恐る恐る訊いた。

「お父さまと結婚したのを後悔している？」

「いいえ」

この時、ヨンオクはきっぱりと言った。

「後悔はしていないわ。でも、彼の手を取れば良かったと今も思うことがあるのも確かなの」

「どちらとも決められないのね？」

「そうね。今となっては、どちらが良かったのかなんて判らない。ただ、あの時、私は自分の気持ちに対しては嘘をついた」

「それは、どういうこと？」

「あなたには申し訳ないけれど、お父さまとの間に恋愛感情はなかったわ。親の決めた相手に言われるままに嫁いだの」

「一緒に行こうと言われた男のことは好きだったのね」

「ええ。好きだったわ」

ヨンオクは頷き、ファソンを見た。

「私がこんな昔話をあなたに打ち明けた理由が判るかしら」

ファソンが首を傾げるのに、ヨンオクは笑い、幼いときのように娘の髪を撫でた。

「ファソン。親が決めた相手に文句も言わずに嫁ぐのは、両班の娘として生まれた宿命のようなものよ。私やあなただけじゃなく、他の大勢の女人も同じことだわ。皆、何も言わないけれど、好きな男がいるのに他の男に嫁がされ、泣いた女もいるでしょう。そんな中で、あなたは心からお慕いする方にめぐり逢えた。そして、その方の妻になれることが決まっている。それがどれだけ幸せで恵まれたことか。あなたは考えてみたことがあって？」

「お母さま」

「今、あの方の手を放したら、あなたはきっと後悔するわよ。何故、彼が差し出した手を取らなかったのか、自分の気持ちに正直に向き合わなかったのかと、私のように幾つになっても考えることになるわ」

他人からうり二つだと評されるファソンそっくりの母。その母が淡い微笑を浮かべて立ち上がった。

「私が話したかったのは、それだけよ。後は自分でよく考えなさい」

母が静かに去った後、ファソンは庭に視線を向けた。紫陽花ははや、花びらが乾いて色が茶色っぽく変わっているものもある。

決断をしなくても、刻は流れてゆく。

変わらないものなど、この世には何一つありはしないのだ。

すべてが刻一刻と変化し、うつろってゆく中で、確かなものがあるとしたら、それは何だろう

。ファソンはその後もずっと、チェジンが様子を見にくるまで、その場所で紫陽花を眺め続けた

。今日も都漢陽の下町外れ、`曹さんの本屋、は、大路の賑わいが嘘のように、ひっそりと静まり返っている。

ファソンはそっと深呼吸する。同時に大好きな紙の特有の匂いが身体中に滲み渡り、生き返った心地がした。よくぞ二ヶ月以上もの間、この大好きな場所に来なくて平気だったものだ。

宮殿で暮らしている間は、カンが立派な王宮の書庫に連れて行ってくれた。あれはあれで素晴らしかったけれど、やはりファソンにとっては、下町のこの古本屋がいちばん落ち着ける場所に違いない。

カン。ファソンは今でも忘れられない愛しい男の面影を胸にいだき、そっと心で呼ぶ。まるで手放したくない宝物を愛おしむかのように、心を込めて呼ぶ。

今頃、どうしているだろう？ また風邪を引き込んで伏せているのではないか。`続春香伝、を書くのに時間を忘れ果て、無理をしているのではないだろうか。

逢いたい、逢いたいよ、カン。

大好きな男の名を呼びつつ、本がずらっと並ぶ本棚を眺め渡したその時、左端の最上部に初めて見る書名が眼に付いた。

「なになに、`続春香伝、」

そのタイトルを見て、ファソンは眼を瞠った。慌てて伸び上がるようにしてつま先立つ。

こんな時、カンが側にいてくれたら、すぐにとってくれるのに。一カン。

また、名を呼びそうになったその時。

ファソンの頭越しに手が伸びて、`続・春香伝、は先客に奪い取られてしまった。

「申し訳ないですが、この本は私が先に見つけたのです」

戸惑いがちに言い終えたファソンの上に、クスクスという笑い声が降ってきた。

「これを書いたのは、この私なんだけど」

「カン!？」

見憶えのある薄紫のパジを上品に着こなしたカンが笑顔で立っている。

「相変わらず、ここが好きなんだね。`本の虫、のお嬢さん」

彼の笑顔はどこまでも屈託がない。まるで、初めてここでめぐり逢った日に時間を巻き戻したようだ。

「小説が完成したのね」

「ああ、ファソンを歓ばせたくて、これでも頑張ったんだ」

親に褒めて貰いたい子どものように得意げに言い、それから慌てて言い足す。

「あ、でも、別に昼の政務はサボってないからな。ちゃんと夜に書いた」

更にカンは早口で言った。

「そなたと一緒に夜を過ごさなくなったから、夜は時間を持て余すようになった。だから、執筆の方もはかどったんだ。だが、私はファソンと一緒にの方が良い。そなたと愉しく語らって同じ寝台で眠った夜の方が良い」

カンの頬がうっすらと上気していた。

「もう一度、ここから始めよう。私にとって妻と呼べるのはファソンしかいない。改めて求婚させてくれ。私と共に生きて欲しい」

ファソンの瞳に大粒の涙が盛り上がった。

常に変わりゆくこの世で変わらないもの。今こそ知った。

それは今、この瞬間、自分の心があなたの許に向かって流れているということ。

たとえ何がどう変わろうと、私のこの想いだけは変わらない。

ファソンはカンのひろげた腕に飛び込んだ。その背にカンの手がしっかりと回される。

ファソンの結い上げた漆黒の髪に蒼い鳥を象った堇青石（アイオライト）が夏の陽差しを受けて燦めいた。

終章～そして物語は続く～

終章～そして物語は続く～

『続春香伝』はその後、『曹さんの本屋』で売られるようになり、口づてにひろまり、人気に火が付いた。

『春香伝』の愛読者たちは、あの続編が出たということで、こぞって読みふけたという。売り本だけでなく貸本も数冊置いてみても、どちらもすぐに売り切れるか借りられてしまい、待ちきれずに持っている者に大枚をはたいて借り受け、自ら書き写す者まで続出したとのことだ。

続編は、『春香伝』でモンリオンに不正を暴かれた使道の弟が兄の復讐を図るという筋書きである。舞台は都に移り、晴れて高官となったモンリオンは或る日、友人に誘われて妓房に上がる。

そこで眠り薬の入った酒を飲まされ、目覚めた翌朝、彼の側で妓生が死んでいた。妓生殺害の容疑をかけられたモンリオンは義禁府に囚われの身となる。

モンリオンの妻春香は良人の無実を信じ、男装して客として妓房に上がり、死んだ妓生の馴染み客や朋輩妓生たちの話を聞き込みして回り、ついにモンリオンを陥れたのがあの悪徳使道の弟だと突き止める。

弟は情人でもある妓生と共謀して、その妓生がモンリオンの酒に眠り薬を入れたのだが、春香はまんまと色男になりすまし、情人を誘惑して事件の真相を彼女に話させることに成功、何も知らない女は春香に乞われるまま義禁府で証言する。

見事、良人の無実を証した春香の評判は都でも上がり、稀代の貞女としてその名を馳せることとなった。

この『続春香伝』を書いたのがまさか両班どころか、思いもかけぬ貴人だと知れば、人は腰を抜かしたに違いない。

『続春香伝』の人気が都でうなぎ登りになっていたその頃、二十一歳の若き国王が中殿を迎えた。盛大な嘉礼が行われ、国を挙げての久々の慶事に、朝鮮中の民がお祝いムードに包まれたといわれている。

良人たる国王にただ一人の妻として熱愛された世にも稀有な女人、それが賢宗大王の王妃仁貞王后だ。

私が語った恋物語の主人公たちがそも誰なのか、もう、お判りかな？

この類い希な高貴な方々のお話一つを見ても、よほどモンリオンと春香の物語よりも劇的(ドラマティック)だと思わんかね。

まさに、事実は小説より奇なりを地でいくような話ではないか。さて、この二人の話はこれで終わりというわけではない。

一国の王と王妃という関係は、ただ互いに愛情があればそれで成り立つというものではない。漸く結ばれた二人ではあるが、実は、この後も紆余曲折があったのじゃ。

二人が真の意味でこの朝鮮の王と王妃と呼べるようになるまで何があったのか。

もし、興味があるなら、語ってみようかのう。マ、すべてを聞きたいというなら、少し長い昔語りになるかもしれんが。

(了)

アイオライト

石言葉一和名は堇青石。石言葉は「愛を見つめ育む」。

青い鳥一「幸せ」の象徴。青い鳥モチーフの小物を持つと幸福になれると伝承される。

あとがき

さて、今年も残すところ数日となりました。一年が経つのは、あっという間ですね。

今回は少しお休みを頂いていた後の復帰第一作とありなりますが、いかがでしたでしょうか。

実のところ、私は少し前に見た韓流時代映画『花、香る歌』に大変感銘を受けました。時は朝鮮王朝時代末期、女性が歌うことは禁じられていたパンソリの初めての女性詠唱者となったチン・チェソンの生涯を描いた名作です。（拙作のヒロインの名前は、この名前をヒントにさせて貰いました）。あのキム・ナムギルさまも出ているということで、とても愉しみにしておりました。

やはり、韓流時代劇は良いな、と、しみじみと思いました。

それで、本来ならば書こうと思っていた作品があったにも拘わらず、予定を変えて、こちらの作品を書きました。

拙い作品であり、突っ込みどころもあるかと思いますが、少しでも愉しんでいただけたなら幸いです。

もしかしたら、というよりは既に決めているのですが、この作品はシリーズ化しようと考えています。この先、ファソンとカンがどのようになってゆくのか。この物語はまだまだ続いてゆく予定なので、是非、二人のその後を見届けていただけると嬉しいです。

何かオーバーワーク気味なのと、年末で仕事の方も多忙なのとが重なって、「あとがき」もあまり気が利いたことが書けそうにありません。

ですが、来年はまた気持ちも新たに二人の物語を心を込めて紡いでゆきたいと思います。今年一年、ありがとうございました。

どうぞ、良いお年をお迎え下さいませね。

東 めぐみ拝

2016/12/27

あとがき II

この「王の女と呼ばれて」シリーズを書いたのはもう去年の末ですから、かなり月日が経ったこととなります。第一話以来、マイペースで続編を書き続けてきて、あと一話でいよいよ完結のところまでこぎ着けました。

完結編は長くなりそうだったので、前編と後編に分けて先月、前編を書きました。私は丁度その頃、体調を崩しまして、新作執筆に取りかかるのに適当な時期ではありませんでした。

しかし、筆の勢いとうものを考えれば、多少の無理をしても書きたいという想いが強く、普段のペースの半分に落として執筆に入りました。ありがたいというか不思議なことに、執筆途中に痛みはなく、一定の時間書き続けると痛みだし、そのまま床に倒れ込むという有様でした。どうしても動けそうにないときは痛み止めを服用して執筆を続け、何とか書き上げることができた一

というのが内情です。

小説を書くということは、これまで自分にとっては息をするのと同じくらい自然で、当たり前
の行為でしたが、今回の出来事で「書ける」というのがどんなにありがたいことなのか知ったよ
うな気がします。

実のところ、その第一話に当たるこの物語も小説サイトに発表するつもりはありませんでした
。

ただ、今朝、ブログの方にコメントを頂きまして、ふっと久しぶりに小説サイトに作品を出し
てみようかという気になりました。

小説サイトに新作をアップするというのは相当の葛藤があります。私が小説サイトの活動を休
止したその理由というのも、その辺りに関係があるのですが、今日は、その頂いたコメントに勇
気を貰って背中を押して貰ったような気がします。

というわけで、いつもどおりの拙い作品ですが、どうぞご覧いただけましたら幸いです。

2017/05/03

王の女と呼ばれて～異説 春香伝～

<http://p.booklog.jp/book/114564>

著者 : megumi33

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/megumi33/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/114564>

電子書籍プラットフォーム : パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト